

多摩川源流部の沢・尾根・淵・滝・小字等の  
地名と由来に関する調査研究  
—奥多摩編—

2005年

中村 文明  
多摩川源流研究所 所長

## 目 次

(1) はじめに	1
(2) 多摩川源流絵図奥多摩版の特徴	1
(1) 執念の三部作ついに完成	1
(2) 源流絵図奥多摩版の特徴	2
(3) 「源流絵図」奥多摩版完成に向けての取り組み	3
<懐深い日原川の間々>	3
<日原川の実態調査と地元での聞き取り>	4
<日原川本流で72箇所判明>	4
<小川谷の興味ある地名>	5
<熊穴の谷に幻の滝>	5
日原川本流の淵や滝の名前とその由来	6
日原川・長沢谷実踏調査	19
日原川・孫惣谷実踏調査	20
小川谷の滝や淵の名称と由来	22
倉沢谷の淵や滝の名称と由来	25
川乗り谷実踏調査	27
峰谷川実踏調査	28
海沢実踏調査	29
大丹波川実踏調査	30
惣岳溪谷とむかしみち	31
(3) 小河内貯水池建設の経緯と意味について	34
<巨樹と水源の町・奥多摩>	34
<徳川家康の着眼点>	34
<上水施設から水道施設へ>	35
<明治に多摩川水系給水システムを確立>	35
<第一次水道拡張計画による山口貯水池>	35
<難航した第二次水道拡張計画>	35
<多摩川本流へ大貯水池建設案が浮上>	36
<東京市水道局長原全路が小河内村へ>	36
<小河内村の運命を決定づけた鶴屋会議>	36
<大貯水池の堰堤地点の選定へ>	37
<各方面から注視された湖底に沈む悲劇の村>	38
<多摩川下流水利問題の解決に手間取る>	38
<我が村民救済方の請願を貴族院へ>	39

<地鎮祭が厳粛に挙行され工事が開始>-----	39
(4) 「源流絵図」塩山版の特徴について-----	40
<多摩川の最初の一滴・水干>-----	40
<源流の自然は流域全体の貴重な宝>-----	40
<地名に刻まれた源流への感謝や畏敬の念>-----	40
(5) 「源流絵図」小菅版の特徴について-----	41
<山林面積が95パーセントの山村>-----	41
<鎌倉時代の国の重要文化財・長作観音堂>-----	41
<平成13年に多摩川源流研究所を設立>-----	41
<村の全ての小字の聞き取りを実施>-----	42
<村と村の堺を牛に託す>-----	42
<江戸の昔の富士講の足跡>-----	43
<峠より低い身近な尾根にどこどこ越え>-----	43
<滝の名前の由来に法則が>-----	43
<地名は貴重な無形文間財>-----	44
謝辞-----	44
資料編—写真集—-----	46
奥多摩源流絵図-----	97

# 多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の 地名とその由来に関する調査・研究

2004年3月30日

多摩川源流研究所

所長 中村文明

## (1) はじめに

多摩川源流の自然や歴史、文化などの資源に着目して、地元の方々の協力を受けながら、源流域の淵や滝、沢等の名称確定と由来の聞き取り調査を1994年以来系統的に追求し、その成果をもとに「多摩川源流絵図」を作成してきた。第1弾の「源流絵図」塩山・丹波山版は、丹波川、一ノ瀬川、後山川、泉水谷、柳沢川などを中心に実踏調査を行い、5年間420回の源流行を積み重ねて、1999年12月に完成させることが出来た。第2弾の「源流絵図」小菅版は、多摩川の支流である小菅川において、2000年3月12日から実踏調査を開始し、2年間、170回の調査をもとに2002年5月1日に完成させることが出来た。第3弾目に当たる「源流絵図」奥多摩版は、この3年間、200回を超える調査をもとに、平成16年10月1日に完成した。平成6年から平成16年まで10年間にわたる源流実踏調査と地元への聞き取りの取り組みを得て、ここについて執念の多摩川源流絵図三部作（とうきゅう環境浄化財団助成事業）が完成した。

特に奥多摩版の作成に当たっては、山崎進さんの全面的な協力を得ながら調査に当たり、この絵図の完成にこぎ着けたが、無念にも山崎さんは源流絵図奥多摩版の完成を見ないまま、9月19日にお亡くなりになられた。心からご冥福をお祈りするとともに、天国にいる山崎さんにこの源流絵図の完成を報告したい。

## (2) 多摩川源流絵図奥多摩版の特徴

### (1) 執念の三部作ついに完成

2001年4月から開始した源流絵図奥多摩版作成に向けての調査活動は、3年間に渡り日原川本流、川苔谷、倉沢谷、小川谷、孫惣谷、長沢谷、唐松谷、巳の戸谷、大丹波川、海沢川、峰谷川の淵や滝、沢や尾根等の聞き取りと実踏調査を繰り返し、2004年9月15日に調査のまとめを完了した。そして、多摩川源流観察会の石川重人副会長が描いた絵図に中村真里が手書きで一つ一つの地名を書き入れて、10月1日に源流絵図奥多摩版の発行にこぎつけた。判明した地名とその由来は日原川本流が82箇所、長沢谷が7箇所、孫惣谷が9箇所、小川谷が28箇所、倉沢谷が10箇所、川苔谷が11箇所、峰谷川が4箇所、海沢川が8箇所、越沢が3箇所、大丹波川が10箇所、多摩川本流が惣岳の荒の4

個所の176個所である。

源流絵図塩山・丹波山版の実踏調査を開始して10年が経過したが、1999年に源流絵図塩山・丹波山版を作成、引き続き2002年に源流絵図小菅版を作成し、今回の源流絵図奥多摩版の完成で多摩川源流部全体の淵や滝を記した多摩川源流絵図が出来上がったことになる。10年一仕事とはよく言ったもので、源流にひたすらこだわって、執念深く、地元の長老から聞き取り、記録して、保存継承するためにこの多摩川源流絵図作成に取り組んできたが、多くの方々の協力で一つの仕事をやり終えることが出来てホットしている。

## (2) 源流絵図奥多摩版の特徴

### 場の特性活かしたユニークな名称

第一の特徴は、地形や場の特性を表現したユニークな名称が数多くあることである。戸望岩に対峙すると自然のエネルギーの凄まじさにまず圧倒されるが、本村と隔絶された日原の入り口にあたることからこの名前が授けられたという。ヒカリ石、岩清水、曲がり尾根淵、オツボ滝、男釜、女釜、イモアライ滝、バケモノ淵、アミハリドウ、メメズギャーラ、戸望岩、瀬波、鳴瀬、百尋の滝、四十八滝、獅子の口など一つ一つの場所の特徴を实によく観察して名前が付けられている。ここには、古人の洞察力の鋭さと同時に自然への感謝や愛着、畏敬の念などが色濃く反映している。

### 人間と自然の深い関わり

第二の特徴は、奥多摩が人間と自然との関わりが極めて深い地域であり、そのことを示す数多くの地名が刻まれていることである。山村の生活は大昔から川や森に大きく依存している。源流域の人々は釣りや山菜取り、キノコ取り、狩猟などで日常的に山や溪谷、森に入り込んでいた。獲物を得るためには、急峻な溪谷や山々にも出かけたが、そこは平坦なところもあればそうでないところもあったという。危険な個所との関わりが多ければ多いほど怪我や不幸な事故も多発したに違いない。ケガや滑落を繰り返さないためにも、事故を起こした当事者の名前を淵や滝に刻んだのであろう。ゼンベイ滝、ゼンダナ淵、キムラ淵、サクガ淵、キンザ淵、お花ドウ、イザエモン淵、オタツが滝、おみっちゃん河原、オヨウ淵、クエモンの大淵、源五郎滝などの名称が確認できる。

### 山の仕事や暮らしを反映

第三の特徴は、木材の生産と搬出など山の仕事や暮らしに係わる地名が残されていることである。林道が敷設されたのは戦後のことであり、それまでは木馬道や谷の流れを利用した搬出が多かったが、谷の利用に関して川の流れをせき止めた鉄砲だしがよくやられ、日原川では三個所で鉄砲出しがやられ、最上流から一番だし、二番だし、三番だしと呼ばれていた。また、木材流しの最盛期の頃、大人の世話をしたという茶坊主や荷物を持ち運

びするモチコにからむ茶坊淵やモチ小屋淵などがある。さらには紙すきの材料になったミツマタが近くで産出したことからミツマタ出会い淵などの地名も残っている。

#### 修行や祈り、信仰に係わる

第四の特徴は、修行や祈り、信仰に関係する地名が数多く見られることである。聖滝、御供所、精進場、セッチン場、仙人の滝、行者の滝、安穏淵、尼が淵、山王大淵、霧立ち姫、弁天岩、梵天岩などの地名が各地に刻まれている。奥多摩町には、江戸時代から山岳信仰の対象地となった天祖山や御嶽山、大岳山など信仰の山が数多くあり、関東各地から信者が参拝していた。信仰の山に行き来する道中に修行や祈りに関する数多くの地名が刻まれたのであろう。

### (3) 「源流絵図」奥多摩版完成に向けての取り組み

#### <懐深い日原川流域の山々>

「多摩川源流絵図」奥多摩版の作成を目指す調査は、源流研究所が設立された平成13年4月に開始された。写真撮影、実踏調査、地区精通者の聞き込みなどを続けられ、とうきゅう環境管理財団の助成金をいただいた平成14年から集中的な実踏調査が平成16年9月まで継続された。

我が家は、標高550㍎の塩山市の大菩薩の麓に位置しているが、ここから奥多摩までの行程はなかなか遠い。まず大菩薩の登山口である塩山市裂石を通り、そこからヘヤピンカーブの続く急な山道を一気に駆け上がり、標高1472㍎の柳沢峠に着く。晴れた日の富士は絶景であるが、この峠が多摩川と富士川との分水になっている。峠を越えると緩やかな坂道をしばらく下ると塩山市の市ノ瀬高橋の落合地区に着く。ここが、源流研究所までのちょうど中間点である。その集落を過ぎ、オイラン淵、牛金淵、ナメトロなどを通過して丹波山村に到着する。標高600メートルである。信号を右折して小菅村の源流研究所に向かう。途中で標高1000㍎の今川峠がある。この峠を下ると標高660㍎の小菅村に到着する。源流研究所は我が家を出発して41㍎の地点にある。

源流研究所で、調査に必要な地図や資料、カメラを準備し奥多摩町に向かう。奥多摩の役場まで奥多摩湖の湖畔沿いの道を急ぐ。小菅村から奥多摩町の中心まで20㍎の道のりである。奥多摩長の中心にある氷川橋から日原へとハンドルを切る。青梅街道から日原街道にはいると狭い林道に変わる。氷川橋の信号から3㍎進むと平石橋につく。国際マス釣り場がある。さらに3㍎奥にはいると倉沢橋につく。この橋は東京で最も高い橋である。登竜橋、小川谷橋までくると鍾乳洞はもうすぐである。小川谷橋から道は一層険しくなる。いよいよ日原の秘境に入る感を強くする地点である。八丁橋は、孫子谷との出会い地点に掛かっているが、この橋は奥多摩・日原経由の雲取山登山の入り口に当たる。林道は、日原溪谷の左岸沿いに設置されているが、地盤が

弱いため常に地崩れを起こしている。ここから、巳ノ戸谷出会い、名栗沢橋、鍛冶小屋窪等を通り、林道の終点に至る。奥多摩の中心から17km、我が家から78kmの地点に実地調査の地点は広がっている。

まず、日原川本流、カラマツ谷、長沢谷、巳ノ戸谷、小川谷の調査から開始し、倉沢、川苔谷へと回っていく。奥多摩の渓谷や山々の懐は途轍もなく深い。油断すると命もろとも飲み込まれてしまう個所が随所に顔を覗かせている。体力と気力なしには源流に入ることは許されないし、短気を起こして事に当たると大変な目に会うので、情熱と忍耐との勝負の日々が続いた。

#### <日原川の実地調査と地元での聞き取り>

奥多摩町の日原川を中心とした実地調査に取り組み、地元の方々の聞き取りをもとに渓谷に向いて淵や滝の名称の確認作業を丹念に行った。奥多摩町は自宅から遠く、悪路続きでしかも現場は険しい崖をよじ登ったり、深い淵を泳いだりと悪戦苦闘を余儀なくされた。しかし、どんな苦労も困難も忘れさせてくれる人との出会いがあったことが大きな励みになったことはいまでもない。特に奥多摩一の釣り名人である山崎進さんに出会えたことが最大の収穫であり、この方の存在なしには源流絵図奥多摩版はその人である。びっくりするほどの記憶力の持ち主で、日原川の上流から下流までの淵や滝に関する名称や由来を克明に教えていただいた。

また、日原川大沢周辺のごときは、天野信弘さん、倉沢谷は坂和連さん、川苔川は大野喜芳さん、海沢川は新和雄さん、大丹波川は加藤俊雄さん、峰谷川は原島勝男さん、惣岳渓谷は島崎重男さん、奥平道男さん、鳩ノ巣周辺は佐久間正好さんからそれぞれ丁寧なご指導をいただいた。さらに、日原川では、自治会長の小林操さんの呼びかけで山崎信三さん、原島源治さん、黒沢幸雄さん、原島寛さん、千島国光さん、小林孝さん、原島茂郎さん、大館真さん、山崎善さんらの協力をいただいた。奥多摩町役場の企画財政課の担当者をはじめ、多くの地元の地区精通者の方々の協力と指導を受けて源流絵図奥多摩版が平成16年10月1日に完成した。

#### <日原川本流で72箇所判明>

熊穴の谷は、人は滅多に踏みは入らないという。幻の「ゴケンノ滝」の話は聞いたが、日原川本流に関する地名は次の通り。熊穴の谷、幻の六間ノ滝、日向谷出会い、雲取の大滝、トチのクボ、キリドウシ、カジゴヤ淵、ゴンエイ尾根、ワタツパ、ゴンエイ出会い淵、ザンベイ滝、長沢出会い淵、昔鉄砲出し跡、コウオドメ滝、カラマツ谷、カラマツ出会い淵、キンザ小屋谷、キンザ小屋、オオウオドメ滝、カジゴヤ淵、ゼンダナ、ナグリ沢、ナグリ沢出会い淵、ヒカゲナグリ沢、ヒカリ石、ナカゴヤ沢出会い淵、岩清水、曲り尾根淵、ミノト谷出会い淵、昔梁跡、重郎次淵、昔鉄砲出し跡、キムラ淵、マレイダシ淵、八丁橋、孫惣出会い淵、ガニザワ、ガニザワ出会い淵、フタマタ川、オハラ小屋跡、ミツマタ出会い淵、ミズヒキアナ、オツボ滝、イセバシの大淵、茶坊淵

大川のカマアタマ、男釜、霧立ち姫の碑、女釜、ウバナギ尻の大淵、モチ小屋淵、バケモノ淵、サクガ淵、小川出会い淵、丸淵、鉄砲出し跡、イヤゴヤ淵、ネッコ滝、カナ小屋の大淵、ミノト橋、鷹の巣出会い淵、フルミノト橋、キンザ淵、ネズミ沢、バクチ岩、弁天、イモアライ滝、お花淵、平の沢、馬マワシナギ、アミハリドウ、昔大橋ナガシガワラ、イザエモン淵、ゴーロ、タル沢、メメズギャーラ、ウリの木淵、風穴の大淵、セベヤ沢、セベヤ、戸望岩など日原川本流は72個所に及んだ。

### <小川谷の興味ある地名>

また、小川谷は興味ある名称が幾つもあった。鳥居谷出会い、犬麦谷、犬麦谷出会い淵、キリ木小屋の大淵、材木小屋の大淵、滝上谷、滝上谷出会い、クラミの沢出会い、スズ坂谷、スズ坂出会い淵、伏木沢出会い淵、クエモンの大淵、イチザワ、イチザワ出会い、カロー沢、カローの出会い、オオグロム、トウタク、男滝、女滝、広河原、鍾乳洞など小川谷25個所が確認された。

また、カラマツ谷は、ブナ坂のワタツパ、イモリ出会い淵、大滝、セング滝、無名滝カラマツ出会いなど6個所が明らかになり、長沢谷は、無名滝、ヒナタ谷、ヒナタ谷出会い淵、イワタケ谷、イワタケ谷出会い淵、無名滝、ヒカゲ谷、キンタマクボ、オドリクボ、ナギの谷、オンマワシ、二軒小屋、ヤケバラの沢、長沢出会い淵など10個所が判明した。

山崎さんからの聞き取りや坂和山、大野さんなどから全体として、日原川72個所、小川谷25個所、カラマツ谷6個所、長沢谷10個所、孫惣谷12個所、倉沢10個所、川乗谷11個所、海沢4個所、峰谷川6個所、多摩川本流10個所の合計166個所の聞き取りが完了した。

### <熊穴の谷に幻の滝>

日原川の実踏調査は、2001年4月から開始した。最初は、足を踏み入れやすい日原川の釣り場周辺から、実踏調査を開始した。男釜、霧立ち姫の碑、女釜と続く一帯は、集落の近くでもあり、親しみの持てる場所であるが、淵は深く、崖は高く、段差は高いため、踏破することは難しいが、訪れる回数を増す毎に様々な表情を見せてくれる。

男釜から孫惣谷出会いまでは、迫力ある流れに抗しながら、遠うまきすることなく、溪谷沿いに進むことが出来るが、八丁橋から上流は、淵と崖が連続し、息を抜くことが出来ない場所が続く。ミノト谷、唐松谷も谷それ自体が深くて厳しい。また、最上流部の雲取谷に熊穴の谷が合流しているが、そこには、幻の「六間の滝」が、あるという。

山崎さんへの聞き取りは、順調にすすめられた。聞き取りし実踏調査を進めている内容は別紙の通りである。

続いて、倉沢は坂和連さんを訪ねて聞き取りを行った。そこには、不動滝から始ま

って、シチヶ淵、安穩淵、アマヶ淵、六本淵、箱淵、山王大淵、源五郎滝、魚止めの滝、地藏滝などの滝や淵が連なり、それぞれの由来や言い伝えを聞いていった。

さらに、川乗谷は、大野喜芳さんから聞き取りを行った。そこには、箱淵、檜の木淵、丸淵、聖滝、犬つるし滝、魚止めの滝、三筋ヶ滝、百畳滝、丸淵、下百尋の滝、百尋の滝などの滝や淵があり、それぞれに関して詳しい説明を受けた。

調査を開始して「源流絵図」奥多摩版の心臓部をしめる日原川の聞き取りと実踏調査が着実にすすめられてきた。80才を迎えようとしている山崎進さんと出会えなかったら、「源流絵図」奥多摩版は、仕上げる事が出来なかったであろう。最近の釣り人は、趣味と実益を兼ねてはいるものの、生活を釣りに依存している人は居ない。山崎さんは、戦前戦後、釣りの収入が生活を支えた。そのため、日原川は生活の場であり、恵みの川であった。お父さんが奥多摩の山のガイドをされていたこともあり、奥多摩に伝わる言い伝えや先人の教え等もお父さんから良く聞かされたという。こうした、山の主、川の主に出会えて本当に幸せであった。また、坂和連さんや大野喜芳さんなど、地元精通者の協力を得ることが出来た。

## □日原川本流の淵や滝の名前とその由来

### 日原川実踏調査

日原川の本流を遡っていくと、奥多摩工業の採石現場にぶつかる。大きな山がいたるところで削られ、白い山肌をみせている。日原は埼玉県秩父とならぶ石灰岩の宝庫になっている。その採石現場の真下に戸望と呼ばれる岩の回廊がある。戸望の下流部は比較的直線的な流れになっているが、登り詰めていくと、兩岸から岩が迫り左に大きく曲がる。左岸は石灰岩の採掘場上空に昔の吊り橋の鉄塔が見える。

戸望の中流部に差し掛かる。それはそれは厳しいV字谷である。右岸は傾斜が厳しく大きな木は育たない地形である。兩岸が切り立った岩の回廊を進むと右に直角に曲がる、そこに無惨な鉄の工作物が横たわる。吊り橋だったのだろうか。それとも作業のための櫓。赤茶けた姿をさらしている。曲がり角の右岸は岩盤が二段になっている。直角に曲がる上流域は流れが直線的であるが、河床は今より高かったころ、浸食されて、段がつくられたのであろう。岩盤はほぼ垂直に近い傾きを持っていて、谷は流れが速くしかも深くて通過することはできないが、流れ正面のその階段状の岩盤のおかげで往来が可能になっている。段は、水面から4～5mの高さでほぼ水平に伸びている。

戸望の上流部は最も狭い場所で、絶壁と絶壁の間が6～7メートルに迫っている。右岸も左岸も垂直の岩壁で その迫力は言葉に表せないほどだ。よく見ると左岸は垂直というより、オーバーハングの状態、草木は生えないほどの厳しい自然である。真上を覗くと空が帯状に広がっていた。右岸と左岸を比較して、河床の近い部分の特徴をさぐると、左岸の方が河床に近い方がえぐられている。4メートルの高さまで真っ白な山肌を見せている。繰り返し、洪水に洗われた痕跡であろうか。その上は灰暗色の色をして、少し離れたところからみると、上流から下流にかけて明暗のはっきりした帯が続いてい

る。洪水の際の水位を観察することができる。

右岸は至る所から水が浸みだしている。削られた岩盤は左岸と異なり、波状の突起をいくつも備えている。左岸は比較的滑らかなのに、右岸はごつごつしている。右岸の中頃に美しく苔が生えた湧水が流れ出している。もし、真冬にすれば、ツララはさぞかし綺麗であろう。岩の回廊を抜ける辺りは川幅が15～16メートルに広がっている。その場所から30㍍～40㍍くだると幅はぐっと狭くなり、もっとも狭いところでは6㍍暗いになる。日原川の流れは、戸望左岸の岩盤をなめるようにして流れ、ごうごうとうなりながら、白い流身をくねらせている。

出口付近は川の真ん中に石があり、流れが左右に分かれているが、石を抱きながら進み。腰の高さまで浸かりながら、石の上流に来ると左岸へ徒渉する。早瀬の水圧との力比べである。川底に足を固定しながら、一步一步進んでいく。油断すると足が流れにすくわれ、ズボンがずぶぬれになってしまう。左岸から大きな滝が流れ落ちていた。

約200㍍位上流に右岸にセベヤ沢出合いがある。セベヤ沢出合いは川の流れが左右に曲がっている。セベヤ出合いに岩が迫り出し、小さい淵が存在する。早瀬と早瀬に挟まれている。セベヤ沢は左岸から流れ出しているが、その上流から3箇所から湧き水が出ている。苔蒸した景観は見事である。迫り出したセベヤ沢自身は水量が少なく、沢も幅は40㍍～50㍍足らずだ。広くなった川を150㍍くらい進むと風穴の大淵に着く。左岸に岩が飛び出していて、絶えず水に洗われている。岩肌がと0でも滑らかである。流れは激しく、うなりながら瀬音を高めて下っている。兩岸に大きな石がある。二段になって流れ落ちており下の段の淵は深い。周辺は石灰岩なので、あちこちに風穴がある。左岸の絶壁に直径3㍍くらいの大口をあけた風穴が見える。

ウリの木淵は、昔、近くに大きなウリハダカエデがあったことからこの名前が付いた。右岸に岩がせり出してきているが、いくたびかの洪水の影響を受けたらしく、下流に向かって、階段状にでこぼこになっている。淵頭から淵尻まで長さは130㍍。中心部は3～4㍍の深さである。

めめずぎゃーらという面白い名前に出くわす。ぎゃーらとは、河原のことで、みみずがのったくったような平坦な河原である。タル沢出合いからすぐ下流域に広まる。

タル沢出合いから沢を見上げると、水量は多く沢の両岸が川底から20から30㍍の高さまで岩がむき出しになっている。この沢は奥行きが深く、暴れ川であるのだろうか。出合い付近に二段の滝がある。二段目の滝は布状、本流と出会う一段目の滝は銚子状になっている。

大きな石が両岸に転がっている。石がゴロゴロと転がっていることからゴーロという名が付いた。ゴーロは100㍍の長さに渡るが、その中央部に落差は小さいが見応えがある三本滝がある。三本滝下流の細長い淵は青々と深い単なるゴーロだけではもったいない気がする。

ゴーロを過ぎるとイザエモン淵に着く。巨石をぬうようにして、流れ下るが、その中にいくつもの淵を備えている。一段と大きくて深い淵がイザエモン淵だ。イザエモンが落ちて、命をなくしたという激しい流れに淵は泡を吹き上げ、ここで落ちれば助かるまいと思ってしまう。巨石を過ぎて、しばらくいくとナガシ河原に着く。台所のナガシのように緩やかに流れていることから、この名が付いた。ナガシ河原の中央部に登竜沢があ

る。垂直の岩肌を三段、四段になって下る、まさに竜が登る姿をなしている。

ナガシ河原の先端に昔大橋がかかっている。今は立派な道がついているが、ここは昔道の吊り橋である。吊り橋の上流下流とも緩やかな河原になっているが、たまたま兩岸から岩が迫り出して川幅がせまいところに吊り橋が架かっている。昔の人はうまいところに橋をかけたものだ。

昔大橋を過ぎて、対岸に渡ると砂と小石の河原が広がる。特に右岸は2から3㍎の高さまで堆積した河原が広がり昨年から今年にかけての台風による浸食の後が2～3㍎の高さのところに見受けられる。申し合わせたように兩岸から岩が迫り出す場所が訪れ、暫く行くとアミハリ洞に着く。川岸の深くえぐられた岩に網をしかけ、魚を追い込んで捕った場所であることから、この名が付いた。蛇行する流れは転々とエゴの淵をつくる。エゴはアミハリの絶好のポイントだった。

アミハリ洞を過ぎて、2、3回徒渉を繰り返すと、馬回しナギに着く。右岸にぶつかった流れは跳ね返されて、逆流する形でゆっくりと回っている。昔この辺りで、死んだ馬が捨てられたという。この淵で流れることなく、何度も回されていたのであろうか。この淵だけが、上流に向かって流れる大きな渦巻きを持っている。

しばらく進むと平の沢出合いにぶつかる。左岸から滝が流れ込んでいる。この滝の上流部は平で畑も作られていたので、平の沢という。出合いだけを見るととても平の沢という名前は浮かばない。平の沢の上流部はやや開けた河原が続く。少し遡ると高い岩陰と大きな石がゴロゴロする谷にぶつかる。そこにお花淵がある。左岸は高く大きい岩があり、右岸には大きな石がゴロゴロしている。日原川は左岸の岩盤をナメながら、激しい音をたてて、左右にうねりながら下る。下流のゴーロと同様、素晴らしい眺めである。

右岸の大きい石をふうふう言いながら登り詰めていくと、芋洗い滝に出会う。お花淵の上流にあたるが、落差は3～4㍎、3、4本の流れが一個所に集まり、流れがモクモクと盛り上がっている。お互いにもみあう姿からこの名が生まれたのであろうか。芋洗い滝の左側に水道がある。大水の時はこの道もうまるのであろう。

少しならかな流れに出会う。左岸には渡ると河原にぽつんと石が突っ立っている。4～5㍎の高さで頭でっかちで、足下に来るほど、流れに削られて細くなっている。ろうそくの炎のようだ。名前をつけるとすれば、ろうそく岩とでも呼ぼうか。そのかわらの左岸に大きな大きな岩があり、昔から弁天岩と呼ばれている。その下に淵がある。淵の右岸はでこぼこと激しく削られた跡が岩にくっきり残っている。少し登ると左岸にバクチ岩がある。河原から50㍎登ったところに、岩陰にバクチ小屋があったことからその名がついたという。バクチ岩下の口は幅が広くてゆっくりと流れている。深さは2～3㍎くらい。淵頭は早瀬で瀬音は強い。稲村岩が正面間近に見える。

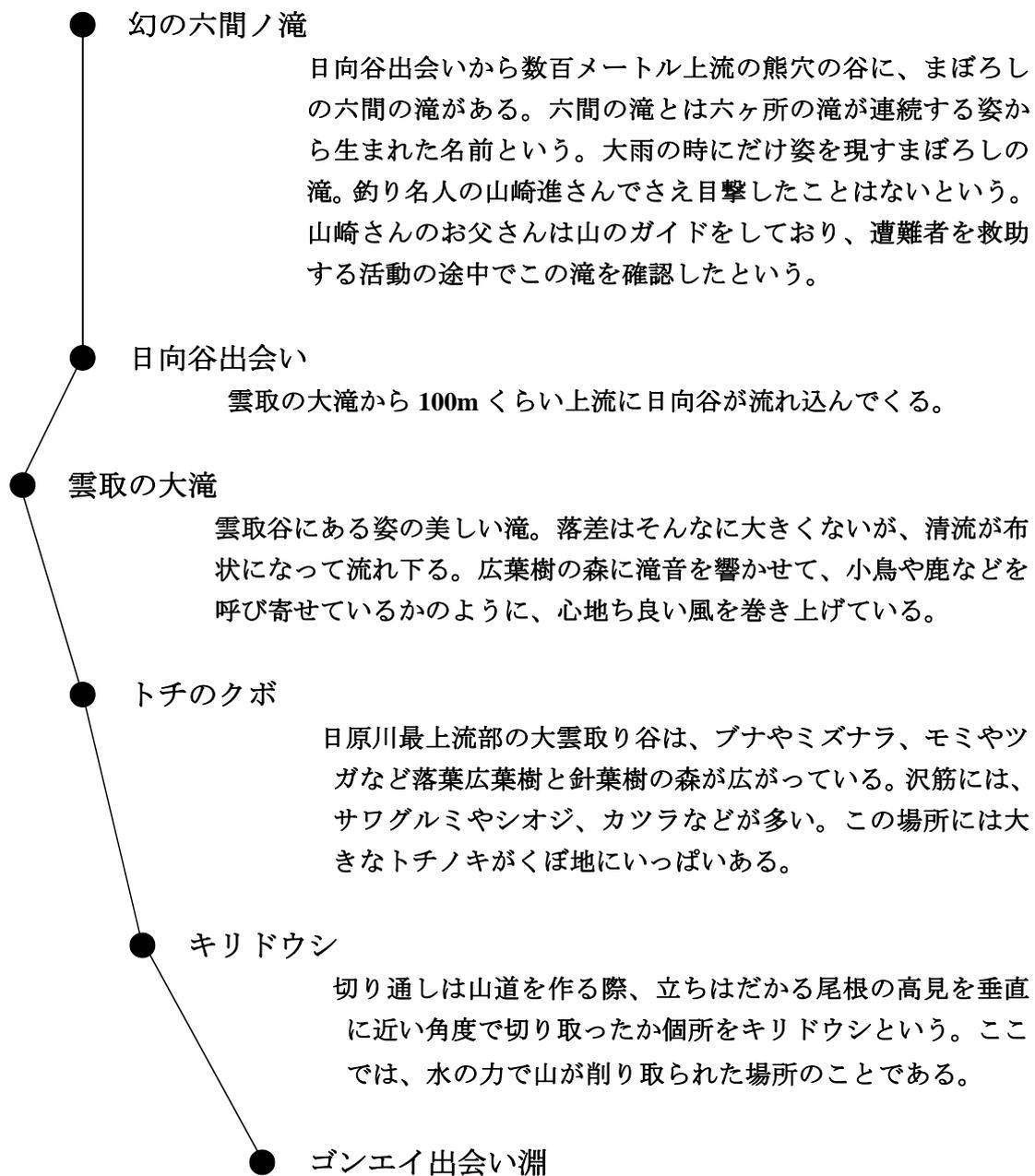
少し登ると右岸に六段の滝が落ちてくる。一段目は銚子滝、二段目は掘り割り滝で姿を隠す。三段目はゆるやかなV字滝。四段目は幅はせまいが布滝。五段目は二本滝、六段目は高く、幅広の布滝。滝全体がなかなか見応えがある滝である。六段の滝のすぐ上に無名淵（泡淵）がある。左岸に白くて大きな石を配し、淵頭の落ち込みは1㍎足らずだが、流れは早く、水量が多いので深く潜り込んで、一面を真っ白い泡状にする。

しばらく進むとねずみ沢出合いに着く。流れは細いがワサビ田が兩岸を埋めている。出合い付近は大きな石がごろごろしている。しばらく登るとキンザ淵に出会う。左岸に大

きな石があり、淵頭が滝のように激しく流れ込む。キンザがここに落ちてケガをしたというが、この激しい流れならケガではすまないところだ。ねずみ沢出合いの上流にあたる。

キンザ淵を過ぎて、左岸の岩をへつる登っていくと、川の真ん中にひときわ大きい石がある。昔ここにミノトへ渡る橋がかかり、深くて大きな淵があったという。洪水の度に埋まり、今では昔の面影はない。

フルミノト橋から200～300m遡ると右岸から鷹巣沢が流れ下る。この沢の出合い付近に水車があり、アワやヒエをついていたという。出合いのやや上流に出合い淵がある。左岸に大きな石をしたがえ、長さはさほどでもないが、幅も広い深い淵がある。



淵自身はさほど大きくないが、近くにゴンエイワタツパ(千人尾根)があり、明治初期にここで軍隊が訓練をしたという。ワタツパとは渡り場のこと。

#### ● ゼンベイ滝

ゼンベイさんが落ちて亡くなったことからこの名が付いた。手前の右岸が大きく崩壊している。

#### ● 長沢出会い淵

左岸から長沢が流れ込んできている。長沢は谷全体に太陽がさし込み、明るい谷になっている。明るい谷のヤマメは丸々としていて、いい値で売れた。

#### ● 昔鉄砲出し跡

一番上流にあった鉄砲出しの跡。切り倒した材木を谷からひいて一定量貯まると川をせき止めて小さな堰を作り水と一緒に材木を流した。

#### ● コウオドメ滝

魚はこの滝より上流にはすんでいなかった。落差は5～6メートルで、下のウオドメに比べてこぶりなのでこの名が付いた。

#### ● カラマツ出会い淵

雲取山に登る登山道の橋がかかっている。カラマツ谷は大きな谷で、大小無数の滝が連続する。

#### ● キンザ小屋淵

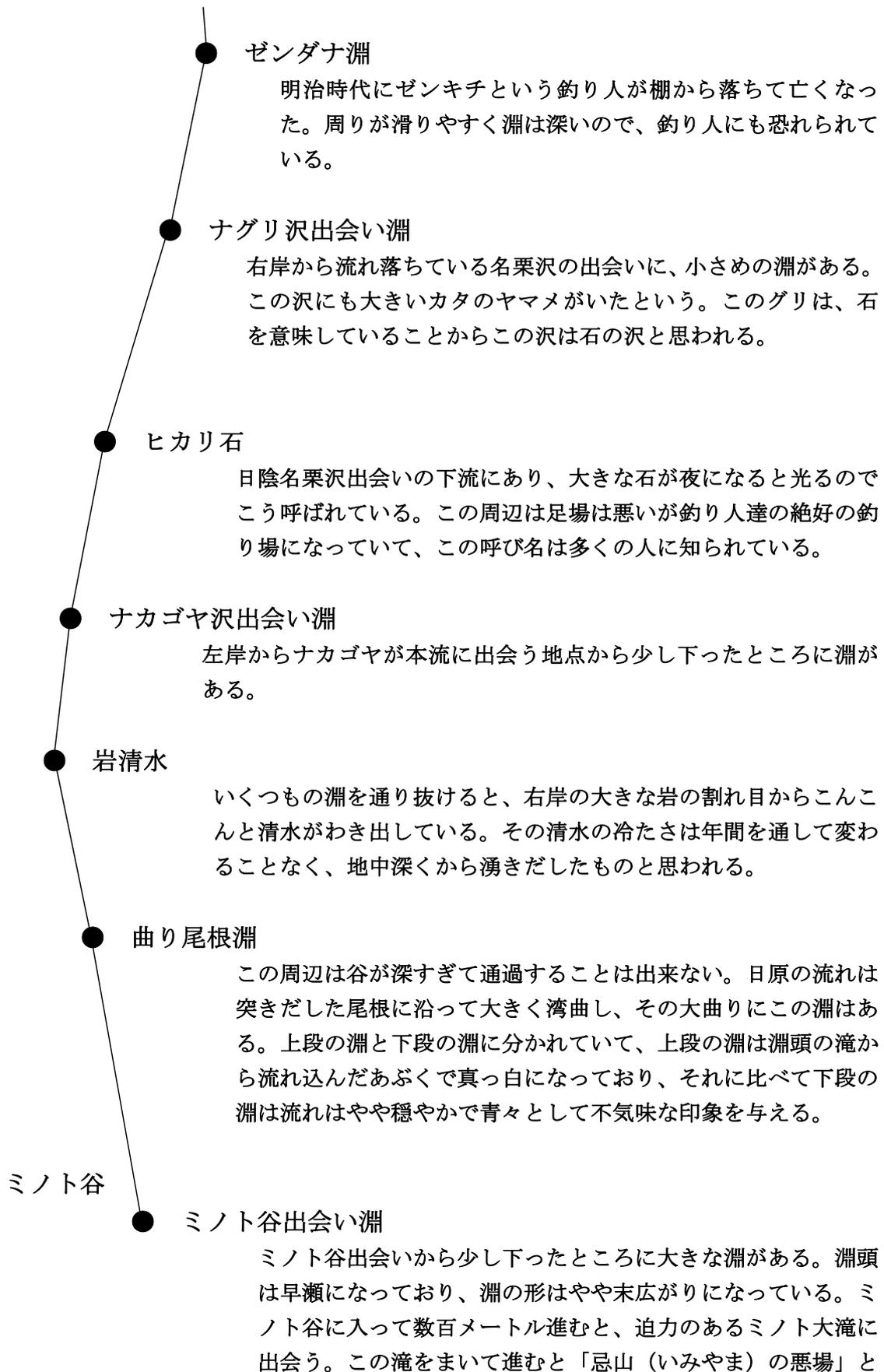
沢にワサビ田のための小屋が建てられたことからこの名がついた。キンザはたぶん人名であろう。

#### ● オオウオドメ滝

20m位の落差の滝で、この滝を上れる魚はいなかったことからこの名前が付いた。今では白滝と呼ばれている。

#### ● カジ小屋淵

左岸に岡部さんのところのいいワサビドウ(ワサビ畑)があった。そのワサビドウのシりに小屋があったことからこの名が付いたといわれているが、その小屋がなぜカジゴヤと呼ばれたのかは不明。



呼ばれる深い谷がある。

#### ● 昔梁跡

昔、ここでヤナをしかけてヤマメやイワナを捕った。川幅が広く流れは緩やかである。

#### ● 重郎次淵

釣り人の重郎次がここに落ちてひどい目にあった場所。

#### ● 昔鉄砲出し跡

日原川では材木流しの方法として鉄砲出しが三ヶ所で行われていた。鉄砲流しとは、川をせき止めてためた大量の水とともに材木を流すやり方である。ここは下流から二番目の場所で、鉄砲流しをした後はヤマメの姿が消えたという。

#### ● キムラ淵

この辺りには昔からたくさんの釣り人が通いつめた。キムラと名乗る釣り人がこの大きな淵に落っこちたことからこの名が付いた。明治時代のことである。左岸は垂直に切り立った岩壁で右岸はやや傾斜があるが日の当たらない湿った岩肌をしている。

#### ● マラダシ淵

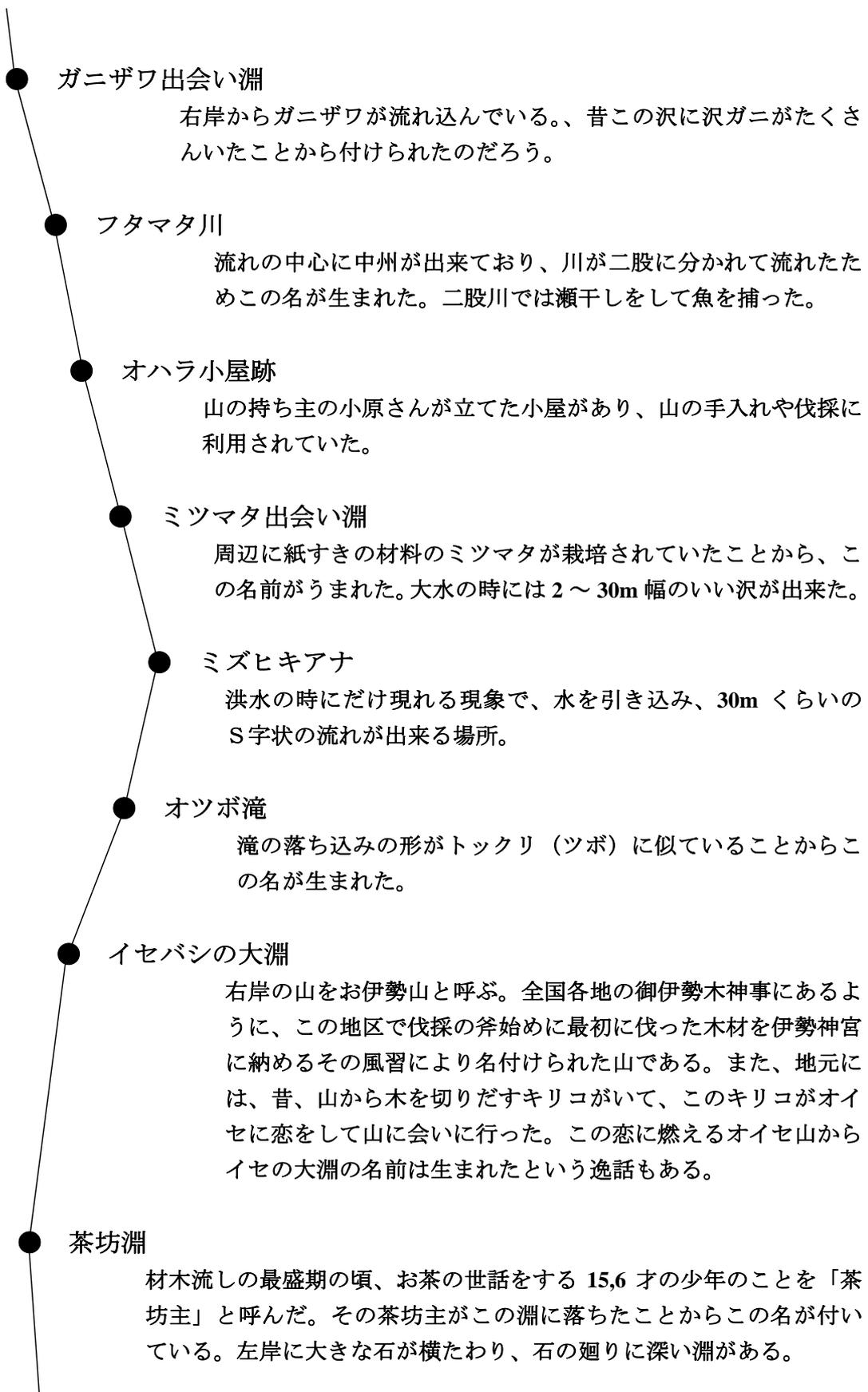
もともとは釣り仲間ではマラダシ淵と呼ばれている。マラとは男のシンボルのことで、深い淵を渡るためにふんどしをまくり上げる際マラが飛び出した光景からこの名が生まれたと思われる。あまりに直接的な表現を和らげるため、マレイダシと変化したという。

#### ● 八丁橋

日原川はこの八丁橋を境に厳しさを増す。この橋は上流に向かう起点となり、多くの登山者の目印になっている。八丁という名は近くの高い山の名からとられている。

#### ● 孫惣出合い淵

孫惣谷は日原一の石灰岩の産出量を誇る。昔この出合いから天祖神社に参る信者の姿が多く見られた。現在この淵は橋のふもとにある。左岸は大きな岩壁になっていて、この岩に水があたり底を深く掘っている。



- **大川のカマアタマ**  
男釜の上に緩やかな流れが続くが、そこを大川のカマアタマと呼んだ。
- **男釜**  
人を寄せ付けぬ岸壁が続き、男釜の全体をのぞき見ることは出来ないほど深く刻まれた谷に男釜がある。昼なお暗く、ごうごうとうなり声をあげた滝の音は絶えることがない。
- **霧立ち姫の碑**  
女釜と男釜の間に伝説の碑・霧立ち姫の碑がある。
- **女釜**  
女釜・男釜と二段の連続した滝を形成している。女釜は青々とした大淵を備えた滝で、その上段にある男釜に落ち込む滝壺から絶え間なく水しぶきが立ち上っている。右岸に霧立ち姫の命（ミコト）の石碑がある。
- **ウバナギ尻の大淵**  
ナギは緩やかな流れにを表すが、ウバに関してははっきりしたことは分からない。ナギに人が足を滑らせて落ち、淵尻で引き上げられたという。
- **モチ小屋淵**  
川ながしの仕事場の小屋があり、川ながしの連中のための炊き出しと、弁当を届けるモチコがいて、材木を切り出している現場に届けた。
- **バケモノ淵**  
岩や木に覆われた場所でいかにもバケモノでもでそうな程、暗くて怖い淵。今は、釣り場になり昔の面影はない。
- **サクガ淵**  
明治時代にサクエモンという人が飛び込んだところ。
- **小川出会い淵**  
小川谷との出会いにある淵。本流と変わらないくらいの水量を持

つ小川谷は、奇岩、奇蹟を多く抱いている。

● 丸淵

大きな岩の近くに大きな淵があり、大物のヤマメのあがる場所だった。

● 鉄砲出し跡

日原川では、多くの材木が川を利用して下流に運ばれていた。一本流しとか筒流しとか呼ばれていたが、水量が少ないときは鉄砲出しが行われた。三ヶ所あるうちの一番下流。

● イヤゴヤ淵（岩小屋淵）

地元ではイヤゴヤと呼ばれている。昔、材木を流すための小屋をたてた大きな岩があった。今はガクレク岩と呼ばれ、岩登りに利用されている。日原山荘下にある。

● ネットコ滝

大きな木の根が岩にはさまり、雑木がたまって滝をつくっている。

● カナ小屋の大淵

ここで昔鉄を掘った。今でも赤さびた水がたまる。ここに大きな淵があり、よく魚が釣れた。

● ミノト橋

「オタビショノ下」・・・天祖のたて岩さんが秩父の妙見山に旅に出るとき、ここで身支度をしたという。巳ノ戸に通じる橋。

● 鷹ノ巣出合い淵

鷹ノ巣（1736m）より流れ下る鷹ノ巣谷との出合いに大きな淵がある。昔鷹ノ巣沢に水車があり、村人がここでアワやヒエをついたという。

● 古ミノト橋

昔、巳ノ戸の集落（3～4軒）に通じる橋がかかっていた、そのすぐ近くに大きな淵があった。洪水の度に埋まり、今は昔の面影はない。左岸からさほど離れていないところに大きな石があり、ここに橋が架けられていたという。

● キンザ淵

昔、キンザという名の男がこの淵に流され怪我をしたことから、キンザ淵と呼ばれている。左岸に大きな岩があり、淵頭は滝のように激しく流れ込んでいる。ネズミ沢出合いにある。

#### ● 六段の滝（無名滝）

右岸から流れ込んでいる。一段目は、落差が大きくて幅広の布滝、二段目は2本滝、三段目は、幅は狭いが布滝、四段目は、緩やかなV字谷、五段目は堀割になっていて姿は見えない、六段目は銚子滝。水量は少ないが、見栄えの良い滝である。

#### ● バクチ岩

50m くらい登ったところに、昔バクチ小屋があり、人の出入りが多かったことからこの名が付いた。今はトシハシ場とも呼ぶ。この淵は幅が広くてゆっくりと流れる。淵頭は、早瀬で瀬音は強い。正面に稲村岩がそびえている。

#### ● 弁天

左岸に 15m を越える大きな弁天岩があることから、この一帯を弁天と呼んだ。その岩の下に淵があるが、右岸の岩壁に激しく削られた凹凸が残されている。

#### ● イモアライ滝

お花淵のすぐ上流にある。落差は3、4本の滝だが、3本、4本の流れが一個所に集まりモクモクと盛り上がっている。お互いにもみ合う姿からこの名が生まれたのであろう。イモアライ滝の左の肩に幅の広い水道がある。増水時には、この道も水に埋まるのであろう。

#### ● お花淵

お花という人がここに飛び込んで亡くなったことからこう呼ばれている。左岸は高くて大きい岩があり、右岸は大きな石がゴロゴロしている。左の岩盤をなめながら激しい音を立て、左右にうねりながら流れる。ゴーロ同様素晴らしい眺めである。

#### ● 平の沢出合い滝

左岸から滝が流れ込んでいる。この沢の筋に平らなところがあり、畑が作られていたことから平の沢と呼ばれた。

#### ● 馬マワシナギ

右岸にぶつかった流れは跳ね返され、ゆったりと廻っている。昔この辺りで死んだ馬が捨てられこの淵で何度も廻ったという。街道筋に馬頭観音が祀られており、その近くにあるナギ。ナギとは、緩やかな流れのところ。

#### ● アミハリドウ

川岸の深く剔られた岩の洞にアミを仕掛け、魚を追い込んでとったところ。蛇行する流れは、彼方此方（あちこち）にエゴの淵をつくる。エゴができるためには、河道の勾配のきつい、流速の大きな谷でないと駄目である。エゴはアミハリの絶好のポイントだった。

#### ● 昔大橋

旧道の吊り橋が、昔大橋と呼ばれている。吊り橋の上流も下流も幅の広い河原だが、たまたま兩岸から岩が迫り出して川幅が狭いところに釣り橋が架かっている。昔の人は、うまいところに道をつくり橋を架けたものだ。

#### ● ナガシガワラ

台所の流しのように、川の水がなめらかにゆったり流れる河原をナガシガワラという。長い河原の中間点に、左岸から見事な3段の滝が流れ下る。その沢にかかる橋は登竜橋。まさに竜が勢いよく登っている姿をしている。

#### ● イザエモン淵（イゼーモン淵）

昔、イザエモンと名乗る人が落ちて流され命を落としたことからこの名前が生まれた。巨石を縫うようにして流れ下る迫力のある眺めである。一段と大きくて深い淵がイザエモン淵だ。上流からの激しい流れが水中に潜り、淵一杯にアワを吹いている。ここに落ちたら水に回れて浮かばれないと思ってしまう。

#### ● ゴーロ

大きな岩が兩岸にころがっている。ゴロゴロと転がっていることからこの名が生まれた。中央部に落差は小さいが見応えのある3本滝がある。下流の細長い淵は青々と深い。単なるゴーロだけではもったいない場所である。。

#### ● タル沢出合い

タル沢は、右岸から滝となって合流する。一番目の滝は銚子滝、

二段目の滝は布状である。タル沢は両岸に供水のツメ跡を克明に残して流れ下る。かなり大きな土石流でも発生したのだろう。

#### ● メメズギャーラ

ミミズがメメズに訛ったものでミミズがのたくったような平坦な河原である。ギャーラは「河原」の訛ったもの。

#### ● ウリの木淵

大きなウリハダカエデがあったことからこの名前が付いた。右岸に大きな岩が迫り出している。幾たびかの洪水の直撃を受けたため、下流に向かって階段状にデコボコが刻まれている。淵頭から淵尻まで30mの長さがある。

#### ● 風穴の大淵

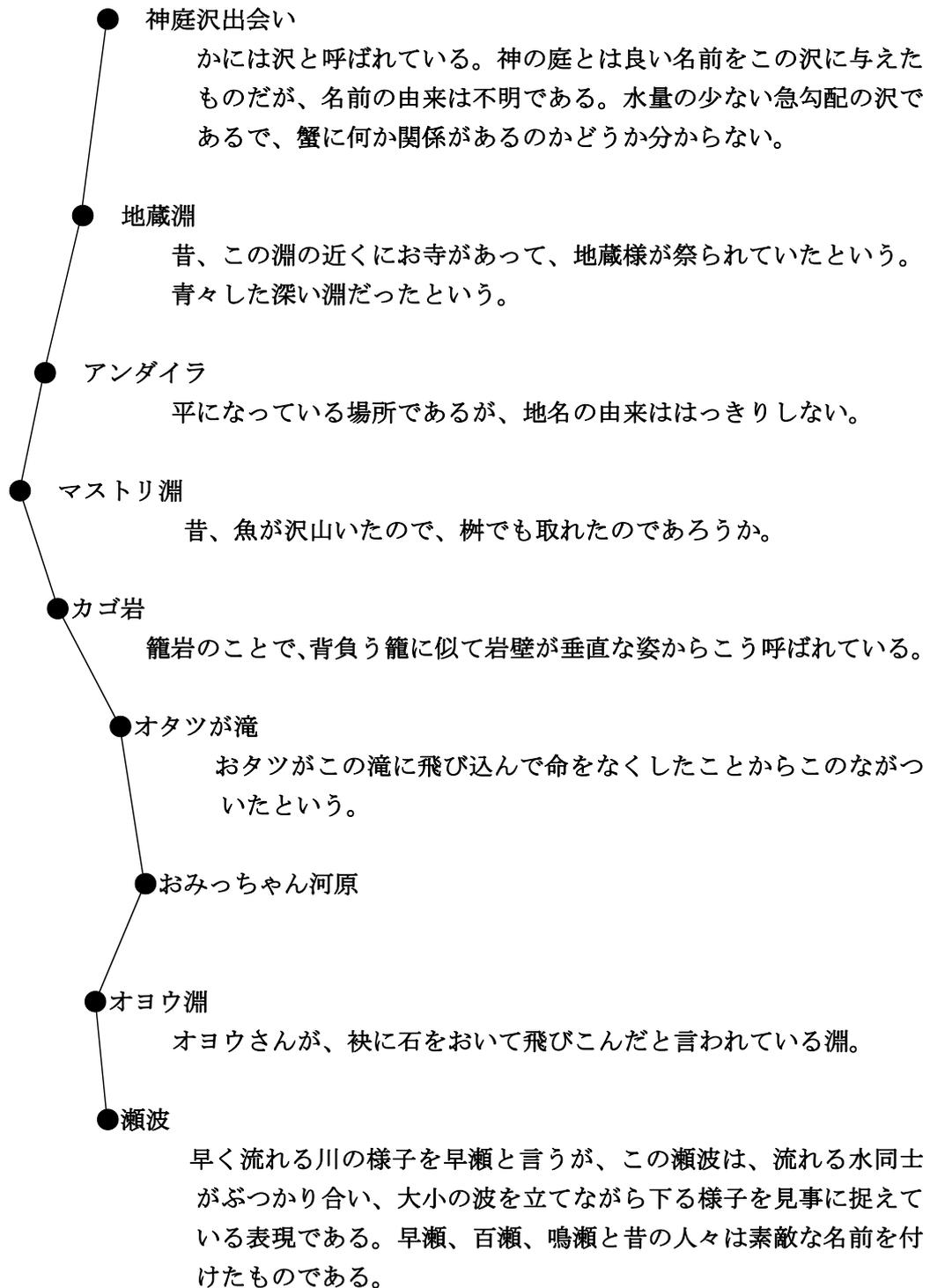
石灰岩が風雨に浸食されて絶壁に大きな穴が空いている。そこからは絶えず風が吹き出しているという。この風穴の近くに大きな淵がある。淵頭の流れは、激しくうねり流れ流れ下り、二段に分かれた淵に落ちていく。下流の淵は深い。

#### ● セベヤ出会い

本流が左右に蛇行した地点に右岸からセベヤ沢が流れ下る。地元からの聞き取りでは意味不明であったが、沢の地形からすると尾根と尾根の間隔が「狭い」が訛ったものと推測される。この出会いではヤマメがよく釣れたという。

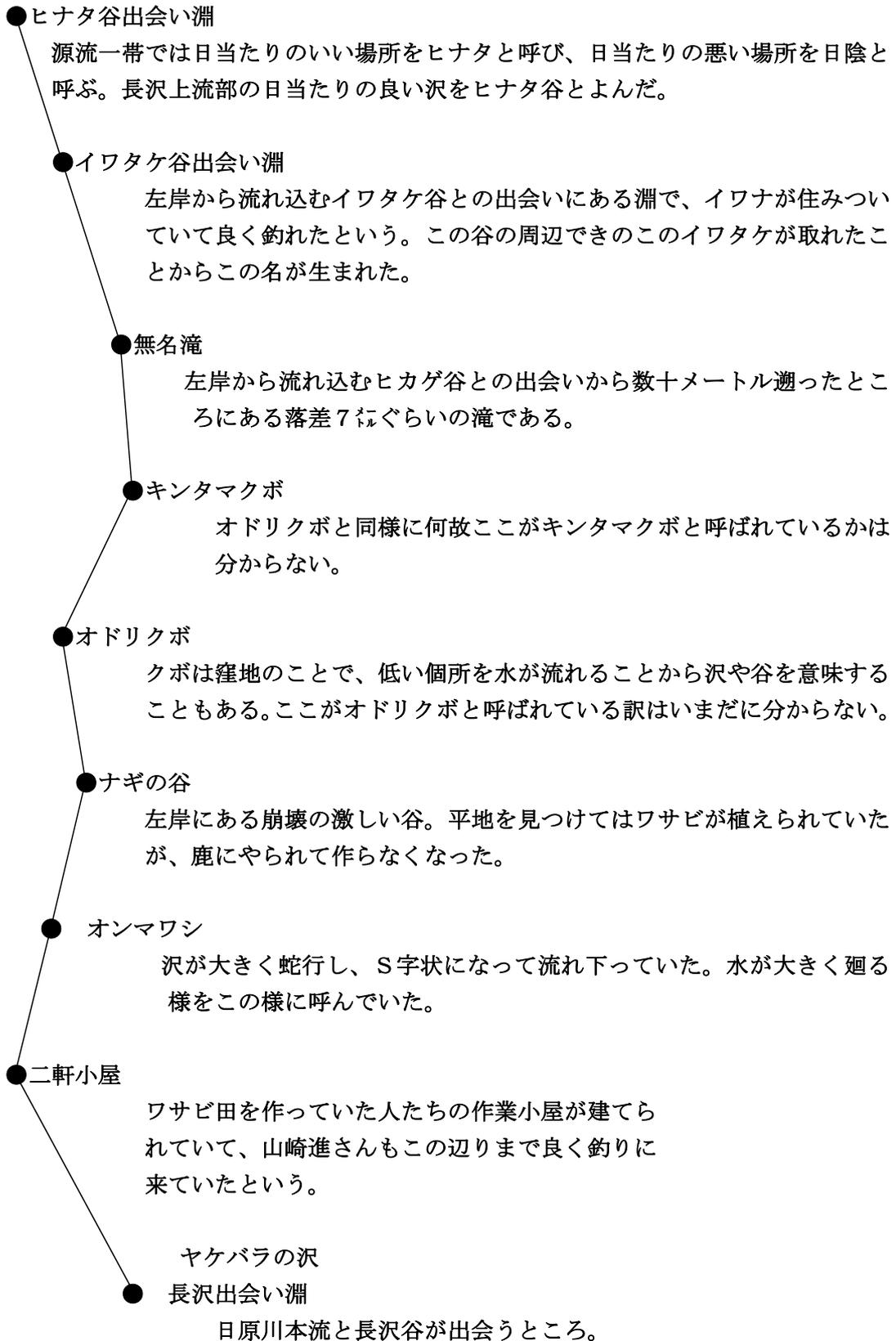
#### ● 戸望岩

ここでは、木戸のことをとぼうと呼ぶ。日原の入口を意味する戸望岩は、自然の美しさと厳しさの両方を備えている。日原川の流れが石灰岩を削り取り両岸に絶壁を形成している。流れは正面の硬い岩盤に激突し左に直角に曲がっている。深くて不気味な大きな淵が続くため進入するのがためらわれる。その正面の岩盤に5, 6mの高さに段差があり、そのお陰で何とかこの谷を通過できるが、最も狭いところは10mくらいまで絶壁が迫っている。

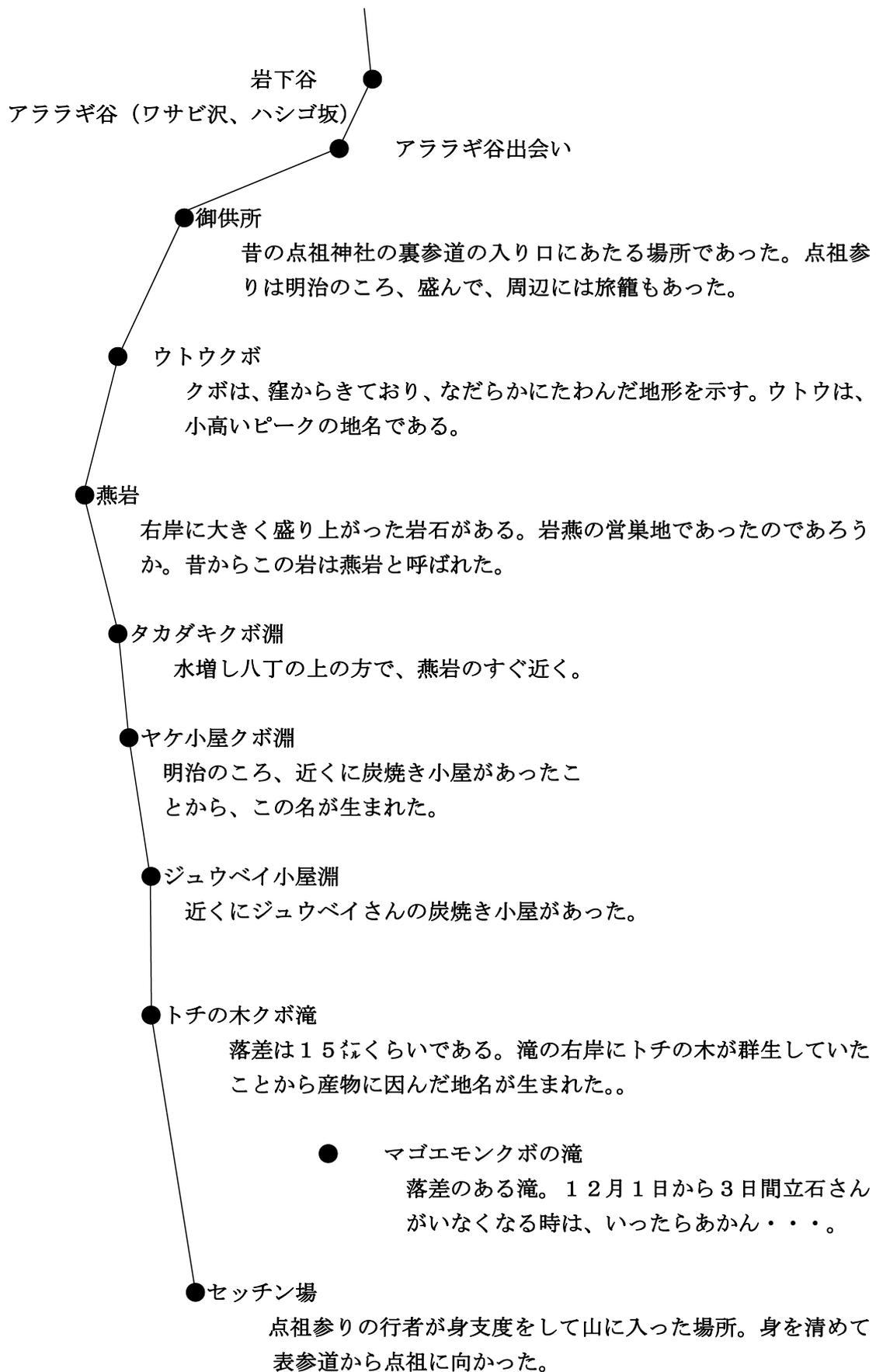


□ 日原川・長沢谷実踏調査





□ 日原川・孫惣谷実踏調査



●孫惣谷出合い

孫惣谷が日原川本流と出会うところである。出合いの直ぐ下流に淵が横たわっていて、ヤマメが良く釣れたという。

□ 小川谷の滝や淵の名称と由来

●酉谷出合い

小川谷の最上流部に位置する。トリはトオリ通じており、昔、修験者はここから秩父に抜けたという。右岸からコツ谷が合流する。今から10年ほど前まで、ここにワサビドーがあったという。

●キエモン小屋

酉谷出合いと三又（ミマタ）の大淵の間に、キエモンのワサビ田があり、ワサビ田や山作業のために小屋が建てられていた。

●悪谷出合い

出合いから150m近く兩岸が絶壁の谷が続く。滝有り淵有りの悪場から、この名前が付いた。別名は割谷（ワレタニ）。大地が真っ二つに割れたような地形からそう呼ばれた。

●大京谷（上滝、下滝）

地元では、大京谷と呼ばれている。大小無数の滝が続くことから、滝谷とも呼ばれる。下滝は、落差15m、上滝は落差50mの見事な滝である。

●三又の大淵

三又とは、大京谷、酉谷（中沢）、悪谷の三つの谷を意味するが、この三つの谷の合流地点に近いことからこの名前が付いた。この大淵は、小川谷で一番大きな淵であることからこの名が生まれた。

●小さい淵が連続する

魚止めの滝から三又の大淵までの約300mにわたって、小さな滝と淵が連なり、美しい景観を見せる。

●魚止めの滝（ウオドメの滝）

落差は5㍍、滝壺は比較的小さい。登りあげてきたヤマメはこの淵に留まり絶好の釣り場だったという。

● シケン小屋淵

この淵の近くに作業小屋があった。ワサビ田で働く人々の休憩小屋にもなり、箸割りの作業やキリンボウの作業、コウラ割りの作業など、周辺の木材を利用した仕事場があった。多少水がでても大丈夫な位置につくられていた。その近くの淵にこの名がついた。

鳥居谷

● 鳥居谷出合い

右岸から鳥居谷が本流と出合うところに淵があった。鳥居谷には猟師が山鳥をとりによく通ったという。どこかの神社への鳥居があったのか、あるいは猟師の山鳥の標的をもってこいの場所であったのか。

犬麦谷

● 犬麦谷出合い淵

左岸から犬麦谷が流れ込み、伯母谷とも出合い、やや明るい小ぶりの淵がある。犬麦谷には終戦後まで5～6軒の家があった。日当たりのよい温かい場所で炭焼きやワサビづくり、箸づくり等が営まれていた。犬麦とは、植物の名前。

● キリ木小屋の大淵

大きくて深い淵で両岸に岩が迫っていたため、まかなければ通れない淵だった。

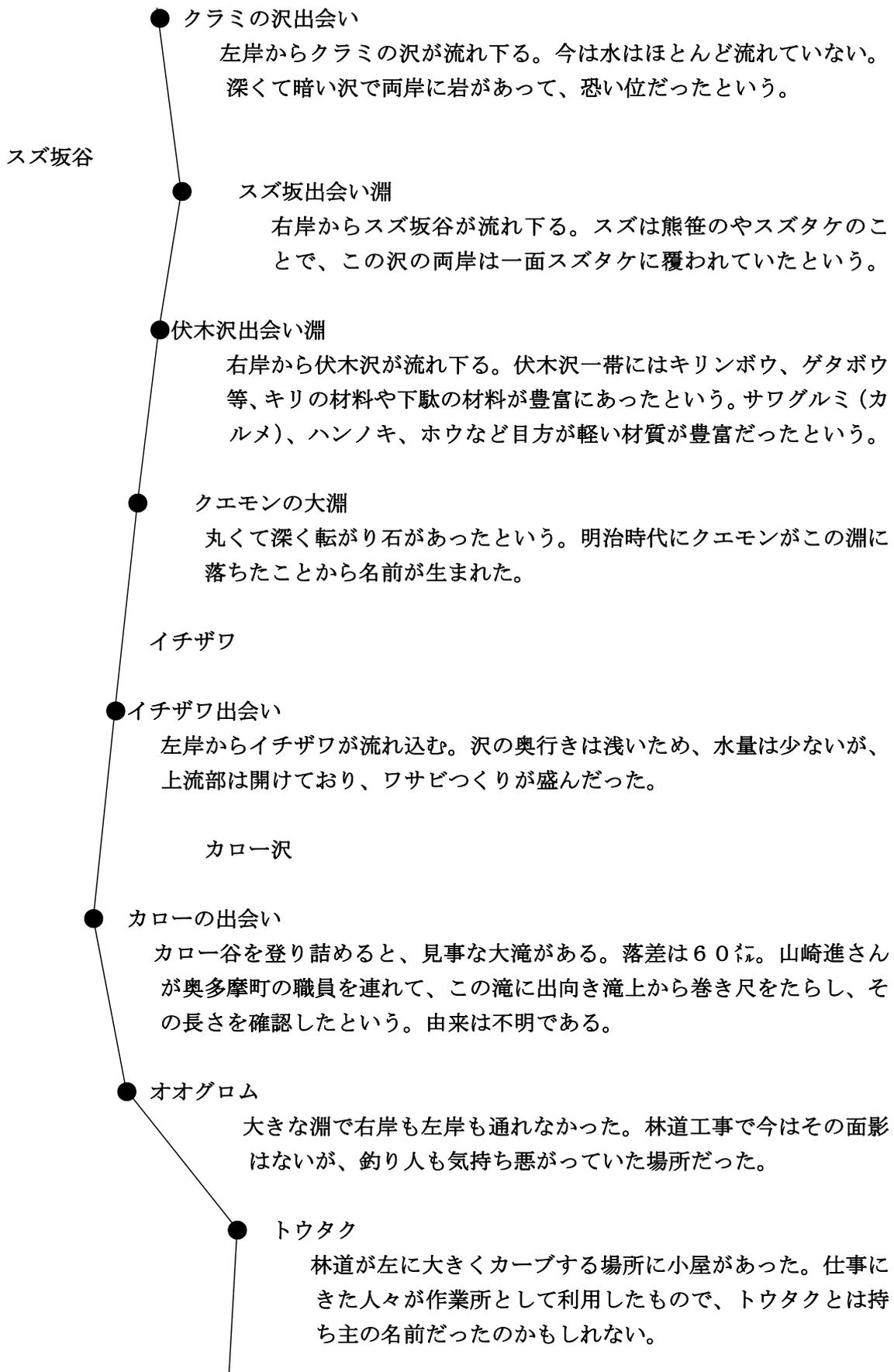
● 材木小屋の大淵

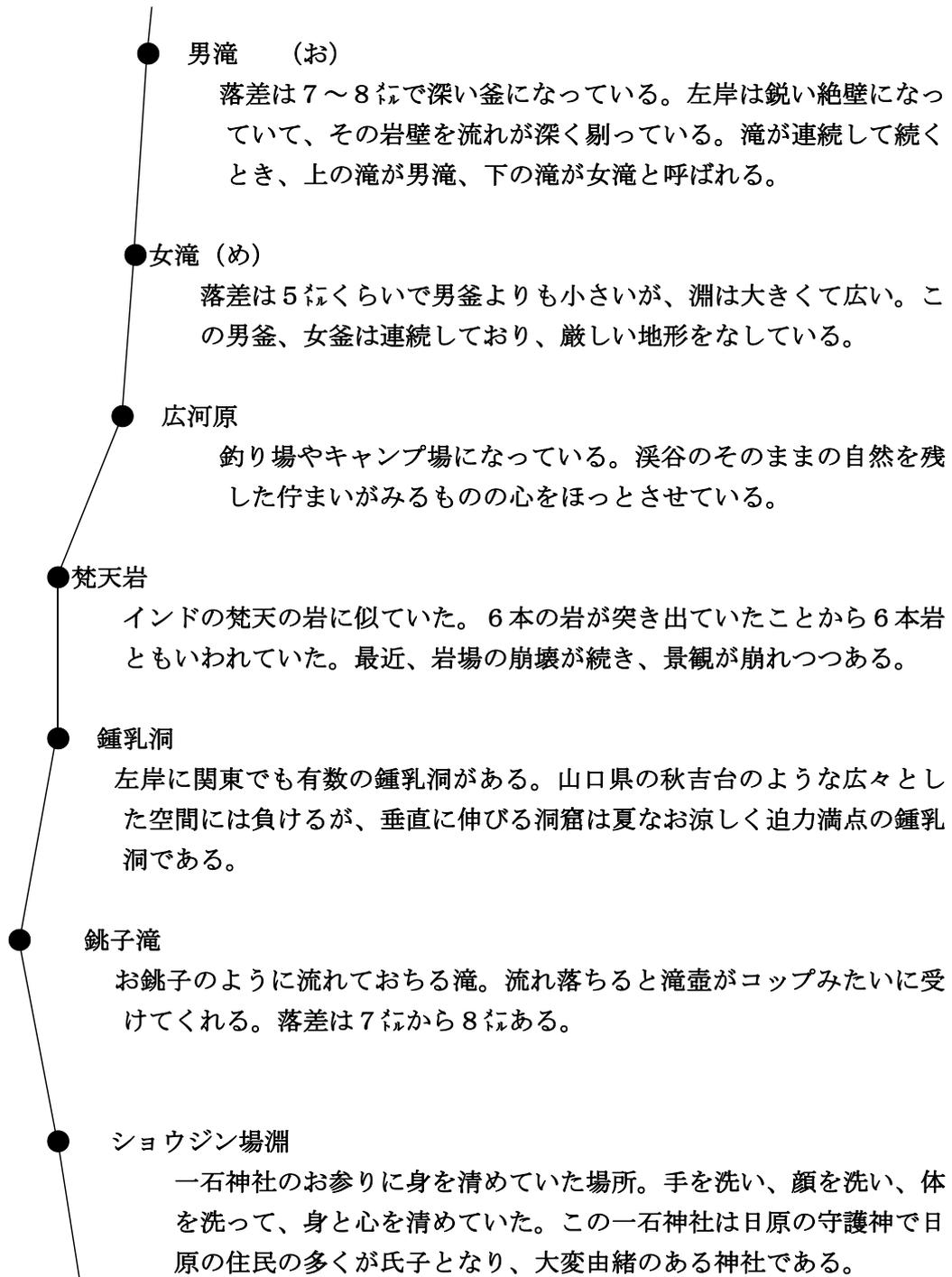
滝上谷出合いから150㍍くらい上流に大きな淵がある。淵から少し離れた場所に作業小屋があった。その小屋を目印にして、この淵の名が生まれた。

滝上谷

● 滝上谷出合い

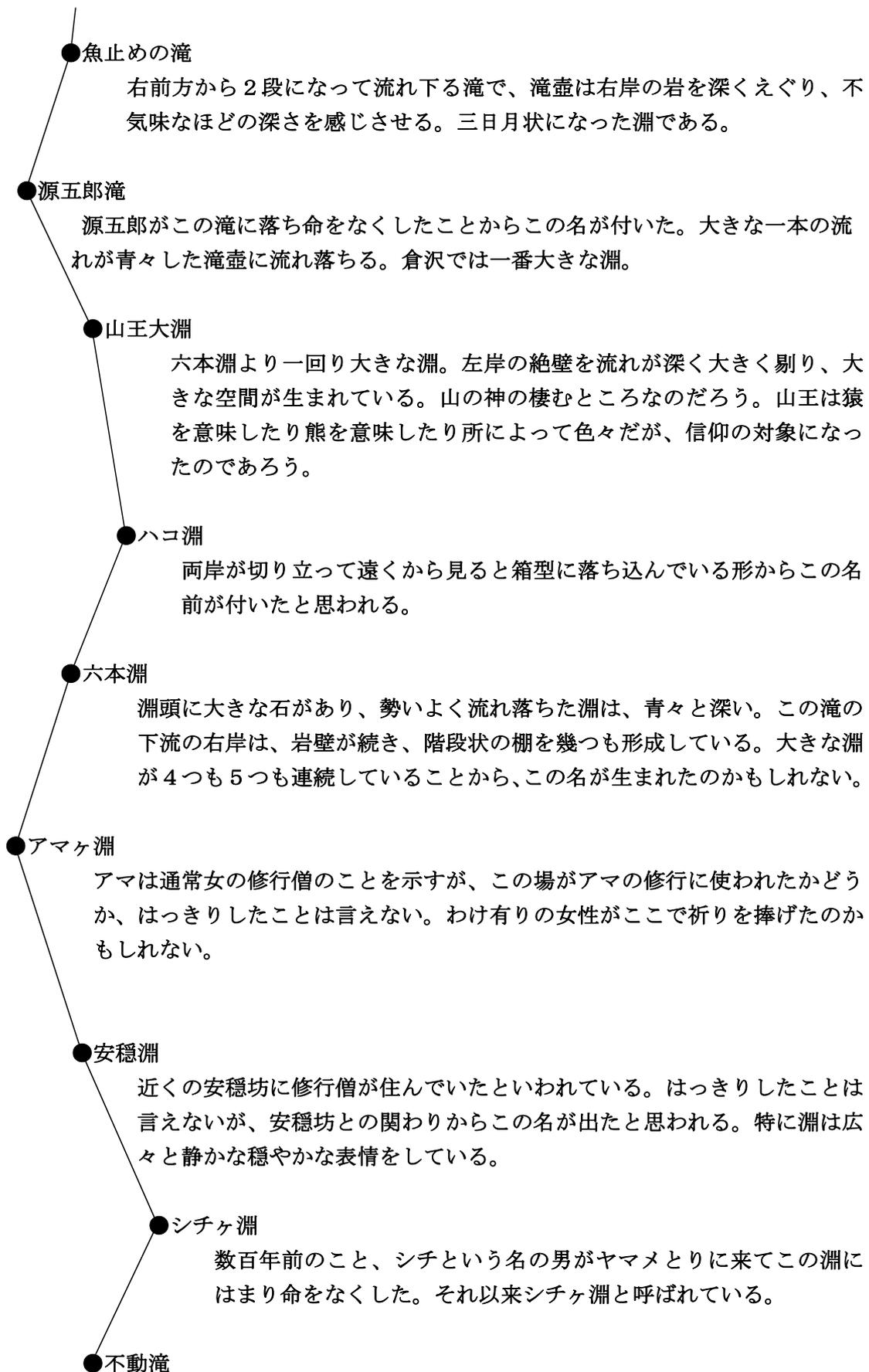
左岸から滝上谷が小川谷に流れ込む。この谷を遡るといくつかの滝があり、ヤマメの姿が目につく。日当たりのよい谷なので、味も型もいいという。ヤマメは茂みが深く、暗いところでは型もよくないし、色も黒いという。日当たりのよい場所のヤマメは白くて太くてきれいでおいしいという。





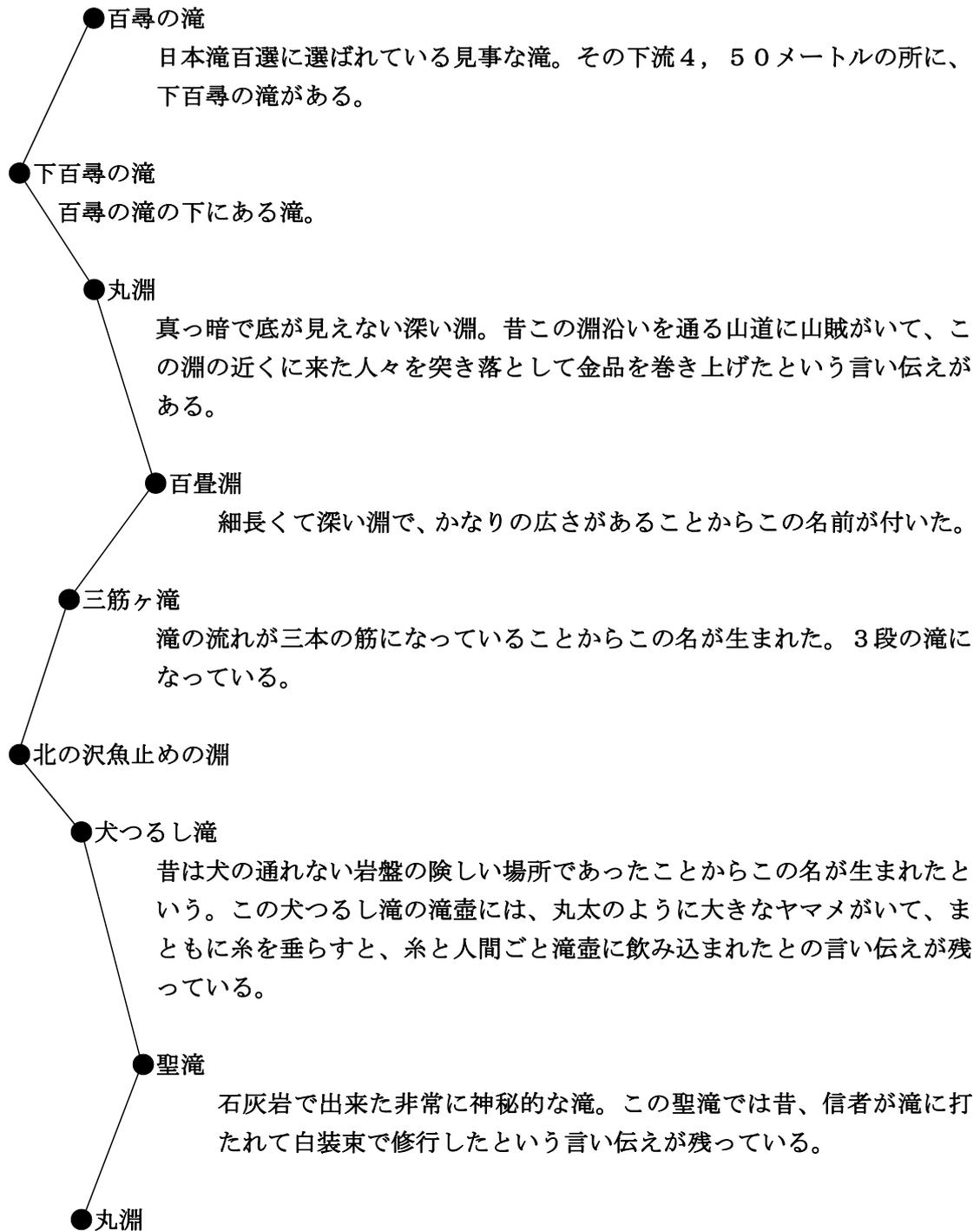
## □ 倉沢谷の淵や滝の名称と由来

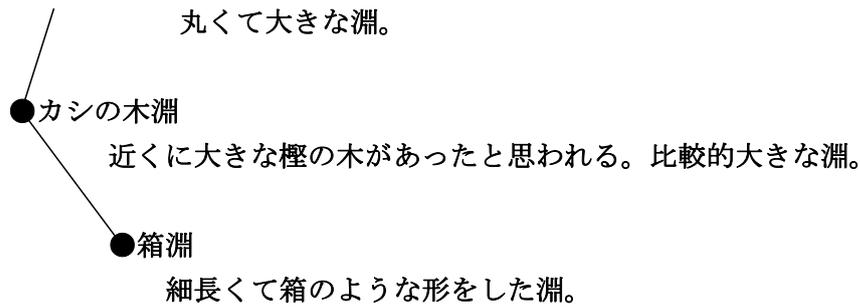
- 地藏滝  
倉沢を上り詰めていくとウオドメの滝の上流で長尾谷と塩地谷に分かれるが、地藏滝は、塩地谷にある。倉沢で一番大きい落差の滝。



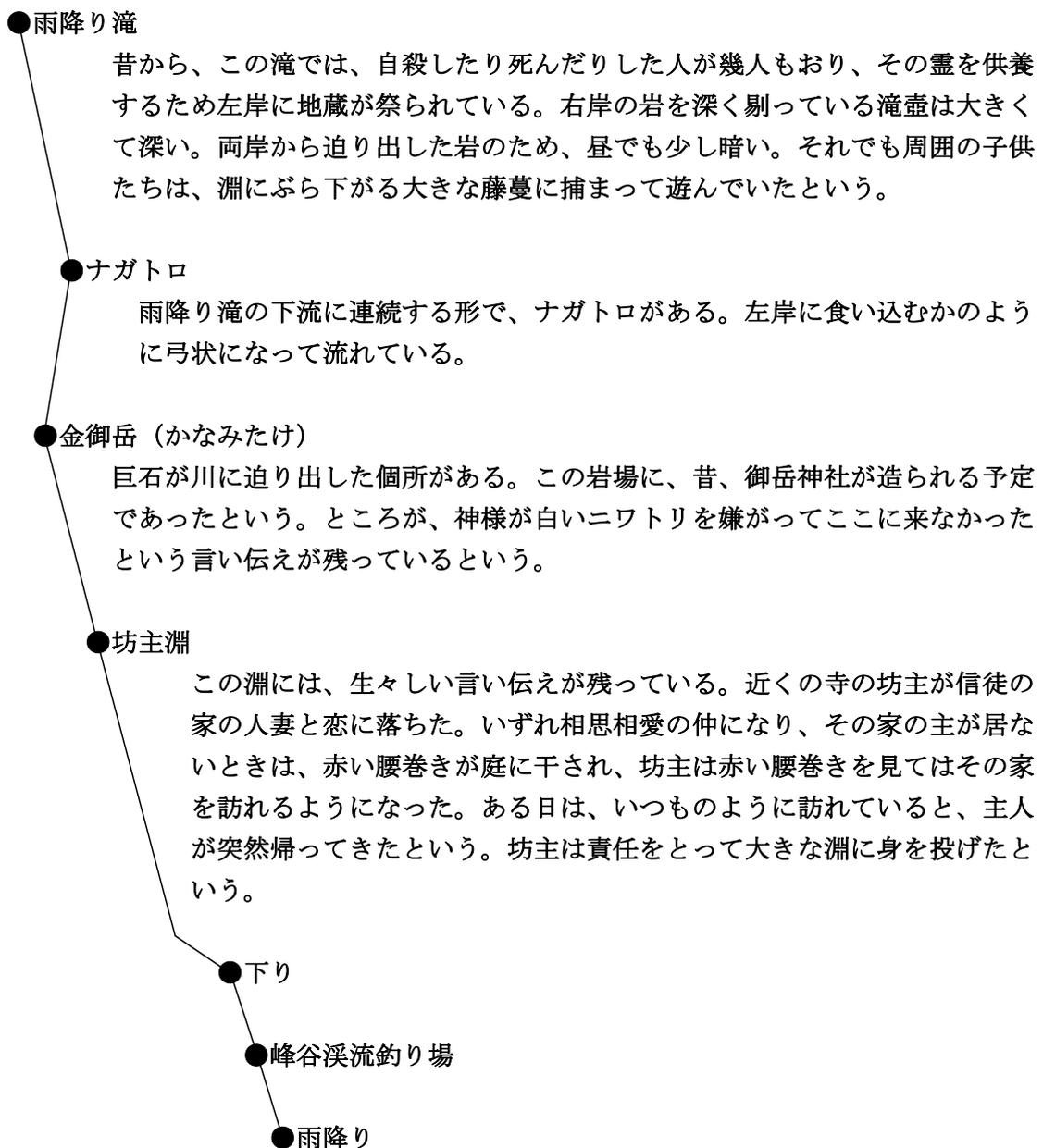
本流と倉沢出会いとの近くに不動滝がある。昔はまく道もなく、倉沢に登り始めてすぐ二段の滝が現れたので、手を合わせてお祈りをしたのであろう。

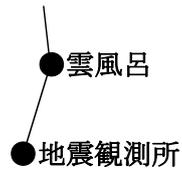
## □ 川乗り谷実踏調査





## □ 峰谷川実踏調査





## □ 海沢実踏調査

### ●不動滝

人間が容易に近づけない山奥に大きな絶壁から蕩々と流れ下る。この海沢で最も神秘的で存在感のある滝にこの名前が付けられた。山の守り神、水の守り神の願いが込められている。

### ●大滝

山道を上り詰めていると滝の音が迫りだし、目前に大滝の姿が現れてくる。滝の落差といい、滝壺の大きさといい、名前に相応しい形や姿をしている。大滝が巻き上げる飛沫のため、正面に立つと涼しい風が絶え間なく吹いてくる。

### ●ねじれ滝

深く削られた岸壁を激しく流れ下るこの滝は、今なお活発に浸食を続けている。何年後に新しい姿の滝がみられるかは計り知れないが、自然のエネルギーの大きさを実感させる滝である。大滝、ねじれ滝、三ツ釜の滝と続く海沢源流域の滝の中で最も迫力のある滝である。

### ●三ツ釜の滝

青々とした釜を覗くと、吸い込まれそうになって怖くなる。この釜には底がないのではと思わせるほど不気味な淵である。連続する釜を繋ぐように滝が流れている。

### ●ウオドメの滝

落差は3mぐらいの小さな滝であったが、ヤマメがよく釣れたという。戦時中、材木搬出のため、鉄砲流しがやられ、一時期魚が居なくなったという。鉄砲出しが終わり数年して、支流からの魚が戻りようやく釣れるようになったという。

### ●暗闇（くらやみ）淵

天地沢出会いの上流に、大きな木が生い茂っていて昼なお暗い淵が、暗闇淵と呼ばれていた。大きな石が横たわっていて近づきにくい淵だった。

● ショウジン淵

奥多摩は昔から御岳山信仰が盛んであったことから、この淵で身を清めて参拝したという。

● 瀬見の観音

新さん達の小さい頃まで、海沢は変化に富んだ厳しい地形が続いたという。そのため、魚釣りや川遊びで遊ぶのも瀬見の観音辺りまでだったという。

□ 大丹波川実踏調査

● 獅子の口

大丹波川の源頭にあたり、大きな穴から清らかな湧水が昏々と湧いている。大きく開いた岩を獅子の口に喩えている。

● 雨乞い滝

曲ヶ谷との合流付近にある小さな滝だが、雨乞い神事が行われたという。日照りが続くと、淵に石を投げ込み、石が出ないときは雨が降るとの言い伝えがあったという。

● 四十八滝

雨が降って水かさが増すと、石を巻いた流れがあちこちに生まれ、石畳に無数の滝が生まれることからこの名前が生まれた。

● 水くぐり

川の流れが大きな岩の下をくぐる場所。

● ウオドメの滝

落差は大きくないが、滝のため、魚たちがこれ以上、上流に上れないため、ウオドメの滝と呼ばれている。

● ナガトロ

百軒茶屋の直ぐしたにある青々とした綺麗な淵。緩やかな流れの比較的大きな淵にこの名前は使われる。

● 馬淵

昔、牛や馬は重要な労働力であり、交通手段であったが、暑いときには馬をこの淵に連れて行き体を洗ってあげたという。

● キャーロ淵

帰ろ淵、カエル淵、キャーロ淵とかいろいろな発音で呼ばれていた。子供たちもこの淵で良く泳いだという。遊ぶ範囲はこの淵まで、この淵で帰る目印になっていたという。

● キョウエモン淵

昔は水の流れが止まっていて、赤くて気持ちの悪い淵だったという。ここで、キョウエモンさんが亡くなったことからこの名前が生まれた。

● ショユの木淵

大きなカツラの木が近くにあり、秋になるとカルメやきのいい匂いが漂う。醤油を焼いたときの香りに似ていることから、この名前が生まれた。

## □ 惣岳溪谷とむかしみち

国道401号線青梅街道は、東京の都心から青梅、奥多摩、丹波、塩山一ノ瀬を抜けて甲府盆地に通じる主要な街道である。明治11年に柳沢峠越えの青梅街道が開通して以来、多摩川源流域の暮らしと経済に大きく貢献したのが青梅街道である。時代の発展とともに、道路が拡幅されたり近道ができたりと道としての規格があがってきているが、奥多摩の小河内方面には数<sup>々</sup>にわたって、今なお旧青梅街道が保存されている。溪谷沿いのこのむかしみちは絶好のハイキングコースとなり、新緑や紅葉の時期には観光客で混雑し、ゆっくり景観を楽しむ余裕がないほどである。

### ● 白髭大神

多摩川にかかる堺橋左岸の30<sup>分</sup>登り詰めたところにむかしみちが通っている。幅2～3<sup>分</sup>の狭い街道を5、6分歩くと白髭神社に着く。この神社は白髭大神信仰の文化が下流から多摩川を遡り、古代人の思想に一致した神宿る聖地として、巨岩のあるこの地に巨岩をご神体として祭祀が営まれた。神社の正面にみて右側に大岩が迫り出している。これは秩父古成層の石灰岩層の断層が露頭したものだそうだ。この神社はたいそう古く言い伝えによれば、神武天皇の御東征の際、海上の水先案内した神様が祀られているとのこと。

### ●弁慶の腕抜き岩

白髭神社の階段を下りて、300ほど歩くと、弁慶の腕抜き岩に着く。高さ3mの自然石、石の下の方に腕が入る程の穴があることから、旧道往来の人々に親しまれ、誰言うことなく弁慶の腕抜き岩と呼ばれるようになったという。

### ●耳神様

平坦な道を一步、一歩歩いていると右側の岩の下に耳神様が祀られている。耳に病気を患う方々が、穴のあいた小石を見つけて、お供えし、御利益を一心に祈るといふ。

### ●イロハカエデ

少し谷の開けた道すじに溪谷に大きな枝を伸ばしたイロハカエデが目に入る。樹齢100年から150年はたっているのであろうか。新緑と紅葉は特に素晴らしい。

### ●惣岳の不動山

800から900くらいむかしみちを歩いていくと、集落の外れに惣岳の不動山がある。明治時代信仰心の厚い惣岳の奥平庄助によって、成田不動を勧請し、現在のものは昭和10年再建したものだといふ。近くの村々から多くの人々がお参りにくるという。

### ●惣岳の荒

惣岳の不動山のすぐしたから惣岳溪谷が上流に向けて続く。惣岳溪谷は太古以来の大洪水によってつくられたといふ。近くは江戸時代、寛保2年(1742)と明治40年(1907)の奥多摩一帯を襲った未曾有の大洪水によって多摩川の南岸、シダクラ谷より押し出された巨岩、怪岩が累々として「惣岳の荒」と呼ばれる溪谷美をなしている。

### ●ガンドウの馬頭

惣岳の不動山から300ほど登ると「ガンドウの馬頭」がある。昔、「一人ひきから可なる細道」と恐れられた細い道がこの溪谷にはあちこちにあつて、足を踏み外した多くの馬が谷底に落ちて死んでいる。その供養のためにたくさんの馬頭さまが建立されている。この細道は現旧道以前の旧道にあたる。

### ●惣岳溪谷の奇岩景勝

ガンドウの馬頭さまを過ぎると、左手にシダクラ橋が架かる。シダクラ橋から見る景観は素晴らしい。「惣岳の荒」と呼ばれる多くの巨岩が見事な溪谷美を見せている。昔、シ

ダクラの吊り橋がなかった頃が、巨岩から巨岩をつなぐように、約20㍍の杉丸太を4m5本ほど藤カズラで結び、架橋にし、人々はそこを往来したという。惣岳溪谷の奇岩景勝は人々の目を楽しませてくれるが、昔は江戸時代から多摩川を利用した材木運搬が行われていて、この一帯は一番の難所といわれていた。材木流しの難所となったこの溪谷をソマ職人は木やり唄にも唄っている。

#### ●縁結びの地蔵

シダクラの吊り橋から100㍍ほど登ると、縁結びの地蔵さまがある。恋しい人と結ばれたい、愛しい方と添い遂げたいと思うのは、いつの時代も同じ。人知れずにこっそりと二股大根を添えて、一心に祈れば、血縁成就と言われている。

#### ●馬の水飲み場

細い道を進むと4軒の民家がある。その先に、馬の水飲み場がある。昔、ここで馬を休ませ、飼い葉を与えた。馬方衆はたてばとと呼ばれる茶店で、一服休憩したという。茶店はゴーロ、清水、大島屋があつて、駄菓子、うどん、まんじゅう、たばこが商われ、一杯酒もあつたという。

#### ●牛頭観音

現在、牛の水飲み場の水はわずかだ。そこから、100㍍進むと、牛頭観音がある。昔は馬より少数ではあるが、牛も使役されていた。しかし、牛頭観音さまは珍しい。観音さまは岩のくぼみに納められている。

#### ●虫歯観音

牛頭観音様から200㍍ほど歩くと、虫歯観音に着く。昔、村の人々は歯が痛くなるとどうすることもできなかった。煎った大豆をお地蔵さんに備えて、ひたすら一心に祈ると奇態にも痛みが治まったという。

#### ●道所の分校

虫歯地蔵さんから、50㍍遡ると左側に大きな空き地が見えてくる。そこには昔、道所の分校があつたという。道所下にエンドウ淵という深くて大きな淵がある。青緑色したその淵は長さ100㍍から150㍍緩やかに左にカーブしている。その下流に床屋淵と言われる淵があつたらしいが、土砂に埋まり、今は昔の面影はない。むかしみちの中間点に公衆トイレがあるが、その下流に山口と呼ばれる大きな淵があつた。兩岸を岩で覆われたこの淵は通らずになっている。

### (3) 小河内貯水池建設の経緯と意味について

奥多摩町で最も注目される小河内貯水池の建設の経過と意味について、奥多摩町史に基づいて簡単にその経過を記す。

#### <巨樹と水源の町・奥多摩>

奥多摩町は、多摩川の源流域に位置し、その広さは22,563<sup>㊦</sup>に及び、東京都全体の約9分の1を占める。昭和32年に完成した小河内ダムは、1億8千万立方メートルの水を湛え都民の命の水を供給している。町の面積の94<sup>㊦</sup>を山林が覆い、そこには都民の水源林7,816<sup>㊦</sup>が存在するなど巨樹と水源の町である。奥多摩の山々には、幹周り3メートルを超える巨木や同じく5メートルを越える巨樹が林立する。倉沢の千年のヒノキ、金袋山のミズナラなど、目を見張るほどの巨樹が至る所に根を張っている。巨樹の会の調査によれば奥多摩町には、891本の巨樹・巨木が確認され市町村では日本一の本数を誇っている。

また東京での最高峰・雲取山は、標高2,017<sup>㊦</sup>あり、雲海の彼方に富士山を臨むことが出来る。周辺には、コメツガやシラビソの原生林がひろがり、初夏にはシャクナゲやツツジ、夏にはヤナギラン、ヤマオダマキ、クガイソウ、シモツケソウ、タムラソウなどの姿を見ることが出来る。さらに、日原一帯に広がる奇岩や奇石、鍾乳洞はその昔奥多摩が珊瑚礁の海であったことを教えている。

多摩川をせき止めて造られた世界最大級の水道用ダム小河内貯水池は、昭和6年に建設計画が立てられてから、昭和32年に完成を見るまでに幾多の困難な試練に曝されてきた。地元の巨大貯水池建設反対、村の水没と大量の移転問題、多摩川下流の水利問題、第二次世界大戦による建設工事の中断、戦後の農地解放と土地賠償交渉の難航などなどこれら一つ一つが小河内貯水池建設の前途に立ちほだかったが、村を犠牲にしてまでも、都民の水を確保しようという地元の貴い使命感に支えられてこの小河内貯水池は実現されたものである。その苦難の歴史を繰り返しひもとき、様々な角度からその取り組みを検証し、後世に伝えていくのは、我々の責務といえよう。ここで、小河内郷土資料館に保存されている資料を基に巨大貯水池である小河内貯水池の経過と意味を探っていく。

#### <徳川家康の着眼点>

奥多摩町にとって小河内貯水池は特別の意味を持った。それは東京都民の水源としての役割と水道水の確保の仕事を一心に担わされたからである。ご承知のように徳川家康は1590年江戸に入府した際、江戸の庶民の生活を支える水の確保にいち早く着手した。江戸へ辿り着き、城下町づくりに当たってまず徳川家康は水の確保に着眼したのである。始めに井の頭池を水源とする神田上水の開発を手始めに、江戸幕府は玉川上水、千川上水、三田上水、青山上水、亀有上水等この6つの上水をつかって江戸の隅々まで水路を普及し

庶民へ水を提供した。

### <上水施設から水道施設へ>

明治になり東京の人口が急速に増加したことを背景に在来の上水施設では人々の飲み水を確保しきれず、水道施設の創設が重要な課題となった。上水の汚濁や病気の蔓延などを解決し保健衛生思想を向上するうえでも水道施設への改良は時代の流れであった。

東京市当局は明治26年、創設水道の工事に着手し併せて三多摩郡の神奈川から東京への管轄替をも実施し多摩川の上流域と中流域とを立体的に把握して水道事業の一括管理体制を確立した。

### <明治に多摩川水系給水システムを確立>

明治30年代は給水要量を一日16万立方メートルと予測し、人口150万から200万を想定して給水計画が立てられたが、明治44年には人口が138万人の水準にとどまったにもかかわらず、一日の必要給水量は予測の1.5倍の24万立方メートルに達した。そのため東京市当局は今後の1日の給水要量を48万立方メートルと予測し、大正5年に水道拡張工事に着手した。

それは羽村取水口から羽村村山線を経て多摩川の水を村山貯水池に一旦溜め、そこから村山境線を通して境浄水場に導きそこで水道水に変えて後、境和田堀線によって市内配管と連結させ各戸へ給水するシステムであった。この工事は昭和2年に完成したが多摩川の異常渇水時には1日給水要量の48万立方メートルを確保することが出来ないことが判明、新たな対策が求められた。

### <第一次水道拡張計画による山口貯水池>

東京市当局は今後の人口の増加と東京市域の拡張等を視野にいれて、村山貯水池の隣接地に山口貯水池を設ける第一次水道拡張計画を立案し、昭和4年に工事を開始し、同貯水池は昭和七年に竣工した。ところが予測を越えた首都圏への人口の増加が続き、多摩川の異常渇水など気象の異状にも左右されない安定的な水道水の確保が重要な課題として浮かび上がってきた。

こうした事情を背景に東京市の全域を網羅した安定的な給水量を確保保証するため、東京市当局は第二次水道拡張工事に着手した。第二次水道拡張計画は多摩川にとらわれず江戸川、利根川、相模川なども視野に入れ給水100年の計を成し遂げようという壮大な展望のもとに計画されたものであった。

### <難航した第二次水道拡張計画>

まず、第一に江戸川及び利根川を水源とする水道拡張工事は、利根川の水利上に支障あ

るとの理由で主務官長から事業認可を得られず、この計画はとん挫した。

続いて第二の候補地である相模川を水源とする水道拡張計画に関して神奈川県当局に打診したところ、同県自身が水道拡張計画を予定しており交渉は不調に終わった。

最後に残されたのは多摩川水系のみとなった。ご承知のように多摩川の水はすでに玉川上水やその他の水道及び灌漑用水として広く利用されていた。当時、羽村の水道水取り入れ口の流量利用率は多摩川流量平均の6割に達しており、ここにあらたな第二次水道拡張計画の水源として所要給水量を得ようとするには思い切った大容量の貯水池を設けなければならないとの結論に達した。

### <多摩川本流へ大貯水池建設案が浮上>

そこで、多摩川本流へ大貯水池建設案が浮上した。この種の貯水池の建設には当時として世界的にも稀な高堰堤を築造しなければ流量調節が不可能であることが判明した。これには予想外の工事費と用地内住民の移転など事業遂行に多くの困難を伴うことは目に見えているが、これ以外に取るべく方途がないためあらゆる困難を克服する決意のもとに多摩川本流に大貯水池建設案、すなわち小河内貯水池案を採択することとなった。時昭和七年7月13日東京市議会においてなされた決定である。

この多摩川本流に大貯水池を建設する案が地元へ伝えられたのは東京市議会採択の1年数ヶ月前の出来事であった。

### <東京市水道局長原全路が小河内村へ>

昭和6年5月、東京市水道局長原全路と水道局拡張課長の両名が小河内村鶴屋温泉に向いて小河内村の小沢市平村長に面会し、ことの顛末を伝えたことが小河内貯水池建設問題の発端となった。席上原水道局長は「東京市は水に困難しているがどうであろう、この際是非ともこの村に貯水池を造らせてもらいたい」と申し入れた。小沢村長にとっては青天の霹靂であった。申し入れに対し小沢村長は「話の趣旨はよく分かるが自分一人の独断で決めることは出来ない。村の公議を決しなければなんとも返事ができない。村会議員の集まりを願うのでしばらく待つてほしい。」とのべ二人を鶴屋支店に休息させ一方、飛脚二人を各部落に飛ばし、村会議員を鶴屋に召集した。こうして運命の鶴屋会議が開催されることになった。

### <小河内村の運命を決定づけた鶴屋会議>

小沢村長は村会議員を前に両氏来訪の経緯を伝え、大貯水池造営の打診をしてきたことを報告した。村長の話を聞いた村会議員は異口同音に小河内貯水池建設案に即座に反対の声をあげた。「村長は下流の古里村で東京市の交渉に対し村民の連署に調印し挙げて貯水池案に反対したためその結果として市当局が本村にやって来られたのだ。本村も反対である。村長は再びこの問題を取り上げないよう強く切望する」と剣もほろろにあいてにせず

という見幕であった。

村長は村会議員の強い反対の雰囲気をなんとか和らげたいと思案し「諸君の言うところも至極もつとも然りである。つまり墳墓の地を犠牲にするということに反対するは誰もかれも古今を通して皆人の言うことだ。だがまあ湯にでもつかってからにすることよ」と提案し議員一同入浴した。入浴後お茶をすすりながら協議を再開した席上で小沢村長は次のように小河内貯水池建設の意味を語った。

小沢村長は「諸君は軍役に服して敵弾を噛み、天皇陛下万歳を叫んで名誉の戦死を遂げるのも国のためだ。人生片時も空しきを許さない水の問題で然も輦轂の下たる東京市が要する水だ。幾百万の大市民の生命を護る水だ。これが為に、犠牲になろうとするのだ。将兵の国に尽くすも、我々の社会公共に尽くすのも、道は異なるが、国に尽くし、世を救うのは道皆一なりである。社会は共存共栄だ。出来ることは誰でもやる。出来ないことを世の中の為にするのが、本当に社会に尽くすということになる。一村が墳墓もろとも湖底に沈むということは古今類例がない。しかしながら帝都のご用水のため我らが犠牲となるのは最も意義深い光栄あるもの。我ら一代にも二代にもかかる幸せは再び起こるはずがない。我らがこの大事を決して範を将来に示すことは最も愉快にして、最も人生の美挙だと信ずる。」と自らの真意を伝えた。

鶴屋会議では小沢村長の報告を受けて3時間議員諸君と村長との意見の応酬が続いた。時間の経緯とともに一同の意見は漸次一致をみるにいたり遂に小河内村を犠牲に供するとの決心覚悟を定め、その意をかいして村長は原水道局長、小野拡張課長の両氏に鶴屋会議の結論を報告し小河内貯水池建設に意義なきことを伝えた。こうして小河内貯水池建設の物語が開始された。仮にこの事業の趣旨に賛同しかねる村長であったならば小河内村は違った運命をたどったであろう。まさに鶴屋会議は小河内村の運命を決定づける歴史的な出来事となった。

### <大貯水池の堰堤地点の選定へ>

東京市議会の第二次水道拡張計画の決定を受けて小河内貯水池の建設計画が具体化されることとなった。先ず、その小河内貯水池の規模は1億8000万立方メートルから2億立方メートルの要量を備えた大貯水池が予定されておりその堰堤の高さは150メートル内外のものとなるの見通しがしめされた。この条件似合う大貯水池の堰堤地点の選定が開始された。先ず、大貯水池築造の候補地点として次の9つの候補地が選ばれた。

候補地点	標高
① 丹波山地点	590～751m
② 川野地点	464～605
③ 麦山地点	455～549
④ 河内地点	431～565
⑤ 水根地点	381～530
⑥ 中山地点	374～524
⑦ 梅久保地点	354～509

- |        |         |
|--------|---------|
| ⑧ 数馬地点 | 280～415 |
| ⑨ 古里地点 | 211～330 |

これらの候補地の中から地形並びに地質の適否、地方的事情及び経済的事情を勘案して不相当と思われる地点から逐次削除されていき7地点がはずされていった。その理由としては上流すぎて流域面積が狭く大貯水池の建設に適さない場合、あるいは予定地に大断層が存在するなどの事情があり結局河内と水根の両地点のみが残された。

残された2地点のうち当初地形上河内地点を適当として申請したが地質調査が進行するに従って水根地点の方が優れていることが判明し、水根地点に建設されることになった。昭和8年12月13日のことである。この堰堤こそ小河内貯水池堰堤と呼ばれているものである。

### <各方面から注視された湖底に沈む悲劇の村>

小河内貯水池建設で最も難航したのは建設用地内からの移転問題であった。小河内村の移転問題は昭和8年から始まった。村の議会では、移住地物色に要する費用を議決し、村民は遠近各地に渡って目的地を探し、土地売買などの手付け金を渡していた。ところが、貯水池着工問題が、一頓挫したため、手付け金流れがおこり、泣くに泣けない悲劇が起こった。その後、工事の進捗は明確になり、村民は移住に当たり、永年に渡り親しみ会った近親や近隣との集団移住を希望したが、好適地は見つからず集団移住は出来ないことになった。小河内村と丹波山村鳴沢から立ち退きを余儀なくされた510世帯は都内各地や小河内村、丹波山村、小菅村などに次々に移転していった。

この間多くの新聞が「帝都600万市民の水飢饉を救う貴い犠牲となって湖底に沈む運命の村」小河内村で、貯水池建設にともなう移転賠償金を巡るいつ果てるともない紛争のことや田も畑も荒れるに任せ生気を失っている村の様子、滅び行く悲しい村のいくえを様々な角度から報道した。巨大貯水池建設の犠牲になり、永年住み慣れた故郷を捨てて異郷に移住せねばならぬ小河内村3,400名の村民の運命は、湖底に沈む悲劇の村としてその成り行きを各方面から注視された。

### <多摩川下流水利問題の解決に手間取る>

昭和9年小河内貯水池用地に関する地積実測工事が開始された矢先に多摩川下流域の右岸」の神奈川県川崎市二ヶ領の水利上の問題が発生し神奈川県からの新たな問題が提起された。昭和10年6月、多摩川下流水利問題に関し東京府と神奈川県との交渉が行われたが不調に終わり、小河内貯水池建設計画は宙に浮いたまま時間のみが推移した。昭和11年に入り、国の内務省裁定案が両府県知事へ示され東京府と神奈川県の知事各部長等が多摩川下流水利問題に関する協定について協議しようやく2月26日両知事が申し合わせ書に調印し多摩川下流水利問題の解決が図られた。

昭和6年5月の鶴屋会議の申し合わせにより小河内貯水池建設に協力してきた地元では下流の水利問題が浮上して土地の買収交渉等が中断し生活に困窮する事態を迎え、東京市

当局にその間の生活保障の対策を求めたが冷淡な態度に村民が憤激し小河内村、丹波山村、小菅村の数百名の村民が東京府、東京市へ殺到し大陳情事件がおこるなど苦難な道のりが続いた。

### <我ら村民救済方」の請願を貴族院へ>

多摩川下流水利問題が解決をみて第二次水道拡張事業の認可が昭和11年7月23日に降りたことにより工事は急速に進展し始めた。6日後の7月29日には小河内貯水池建設事務所が開設され、年が明けて昭和12年1月20日には小河内土地買収案が東京市参事会に提出されるなど事業計画は大きく進展し始めた。ただ、東京市から示された土地買収価格の提示が極度に低廉であったため村民大会を開き東京府及び国に対して救済措置を申し出た。昭和13年2月15日、小河内村村長は「我ら村民救済方」の請願を貴族院へ行い満場一致で採択される。2月28日には同じく衆議院へ「村民の窮状を訴える」請願書を提出し満場一致で採決され東京市の善処を要望する機運が盛り上がった。こうした地元の血のにじむような努力と国からの要望を受けて同年6月6日小河内村と東京市の交渉が成立しそれぞれの代表者によって覚え書きが取り交わされ事態は大きく解決の方向に動き出した。

### <地鎮祭が厳粛に挙行され工事が開始>

顧みれば昭和6年5月の鶴屋会議から昭和13年の小河内村と東京市の覚え書き調印に至る7年にわたる交渉の経過は苦難の道の連続であったといえよう。交渉の妥結によりしょうわ13年11月12日小河内貯水池総合起工式及び地鎮祭が厳粛に挙行され工事が開始された。

然るに本体工事は第2次世界大戦の激化により昭和18年10月5日小河内貯水池工事は中止のやむなきに至る。戦後になり幾多の経過を経て昭和23年9月10日小河内貯水池建設事務所は再開されたが、土地の買収と移転に手間取り工事着工は遅れようやく昭和26年8月17日、東京都代表者と小河内村代表者との解決に向けての歴史的調印式が行われこれを受けて昭和26年9月26日小河内村の開村式が行われ、村に歴史に終止符がうたれた。

この間、「資材輸送専用鉄道の建設、ダム基盤堀削、骨材製造その他の準備工事が進展していたが昭和28年3月19日小河内ダムのコンクリート打ち込み工事が開始され昭和32年11月26日小河内ダム竣工式が挙行され小河内貯水池建設がここに完了した。

時代の推移とともに、巨大貯水池建設の犠牲となって家やお墓やお寺や神社や学校などふる里の全てが湖底に消えた小河内村の悲劇の物語は、忘れ去られようとしている。しかし、どんなに時代が変わろうとも、都民の水道水を確保するために、我が家のみならずふる里をも犠牲にした小河内村の村民の貴い使命感を繰り返し繰り返し伝えていかなければならないだろう。

#### (4) 「源流絵図」 塩山版の特徴について

##### <多摩川の最初の一滴・水干>

我々のフィールドは、多摩川の源流域であるが、多摩川は東京を流れる典型的な都市河川で、この川の源を辿ると山梨県塩山市の笠取山（標高1953m）南懐にある水干（みずひ）に至る。山頂から少し下ったところに大きな花崗岩が現れ、この岩肌から、多摩川の最初の一滴がしたたり落ちる。清く冷たい水滴を掌に受けて飲み干すと甘い香りの余韻とともに、多摩川の誕生に立ち会えた感動が体中を駆けめぐる。ここは、川の誕生のドラマを誰でも目撃できる日本でも珍しいスポットなのである。

##### <源流の自然は流域全体の貴重な宝>

ところで、この源流部一帯は東京都の水道水源林として都の管理下にある。明治34年以来、一世紀に渡り水源林として大切に維持管理されてきたため、手つかずの自然が広範に残されている。この手つかずの自然環境と美しい景観は、多摩川流域全体の貴重な宝であり共有の財産といえよう。

多摩川源流に魅せられ、源流の渓谷や山々を歩き始めて9年になる。大小13の滝が連続する竜喰谷に最初に足を踏み入れた。続いて人間の進入を拒み続ける大常木谷、清流を湛える泉水谷、妙見五段の滝や天狗棚沢など怪しい美しさに彩られた小菅川、牛金淵などロマンを秘める丹波溪谷、奇岩と鍾乳洞を抱く日原溪谷等に足を向けすっかり源流の虜になってしまった。

##### <地名に刻まれた源流への感謝や畏敬の念>

源流に興味を持ち地図や釣りの本を手に入れて調べているうちに、地元で聞いた滝や淵の名前が殆ど市販の地図や本に書き込まれていないことに気が付いた。最初に入谷した竜喰谷は、山里に生きた人々の生活が深く絡んでいた。青々とした見事な滝壺を従えるヤソウ小屋の滝は、昔この周辺で良質のヒノキが多く産出し、樵達は小屋を建て住み込みながら山仕事に精を出したが、この滝の肩に立てられた小屋の持ち主が「ヤソウ爺」だったことからその名が付いた。キコリの名前が滝の名前になったのだった。

多摩川源流で一番恐れられている谷が大常木谷である。ここに「セングの滝」があるが、千の苦しみを味わうことなしにはこの滝には出会えないことから「千苦の滝」と確信していたが、地元の古老の話によれば、実際は木を切り出すのにこの谷に「修羅」を張った、その仕事に千人を超える工（たくみ）を必要としたことから「千工の滝」と呼ばれていたのだ。こうした深い谷に無数の滝や淵がありそれぞれに名前と由来があったが、記録されているものはほんの僅かだった。源流に生きた人々の自然の恵みに対する感謝や愛着、畏敬の念や思いが色濃く反映した名称やその由来を記録し、保存し、次の世代に伝えたいとの一心で「多摩川源流絵図」の作成に取り組み「源流絵図」塩山丹波版を1999年に、

に完成させた。

## (5) 「源流絵図」小菅版の特徴について

### <山林面積が95パーセントの山村>

初めに小菅村の位置と概況に関して紹介する。小菅村は、山梨県の東北部、大菩薩嶺の山岳地帯に位置し、北は丹波山村、西は塩山市、南は大月市と上野原町、東は東京都奥多摩町に接し、東経139° 北緯35° 48′ で標高660m、四方を1,300m～2,000mの高山で囲まれている。

村の総面積は52.65km<sup>2</sup>で、その95%を山林が占め、農耕地は1.2%、居住地域0.3%と極めて少なく、地形も平均勾配40°の急傾斜地であり、大菩薩嶺に源を発する多摩川水系の小菅川に7集落、鶴峠を越えた相模川水系の最上流の鶴川沿いに1集落が点在している。小菅川をはさむ急峻な秩父多摩山系の山々に囲まれているため、最寄り駅のJR青梅線奥多摩駅まで21kmという、僻地で峡谷型の山村である。

集落は、主として小菅川流域にわずかに開けた平坦地を中心に展開しており、農耕地は緩傾斜地に集中し、こんにゃく、そば等の栽培に適している。また、峡谷より湧出する清流を利用して、古くからわさび栽培や溪流魚の養殖が盛んである。

### <鎌倉時代の国の重要文化財・長作観音堂>

村の歴史的な推移をたどってみると、すでに縄文中期に生活が営まれていたと思われる跡が認められている。奈良時代(710～784)には文化も栄えたらしく、藤原重清により宝生寺が建てられ、その子孫小菅遠江守が天神山に築城し、ここを中心に村づくりがなされ今日に至っている。また、国の重要文化財に指定されている「長作観音堂」は、繊細で優雅な鎌倉時代の建築様式をしており、同様の建築は全国にも愛知県吉良町にあるだけでその存在は貴重である。

本村は、東京都に隣接しているため、生活は東京都との結びつきが非常に強く、生活物資の大半が東京都から流入し、東京への通勤者も多い。また、明治34年以来、村内に都水源涵養林が広範に広がっている関係から、東京都民の水源の村として清い水を守り続けられるよう東京都の援助をいただき、昭和57年に下水道事業に着手し、平成6年度末には、村内下水普及率は100%となっている。

基幹産業は農林水産業であるが、内水面漁業を除いては小規模経営で、高齢化、後継者不足により経営環境は厳しさを増し、従事者、生産者共に漸減傾向にある。今後、村の自立と発展の核は、首都圏に隣接し、豊かな自然に恵まれている当村の有利さと、山村としての特性を生かした農林水産業とが連携した観光振興にあると考えている。

### <平成13年に多摩川源流研究所を設立>

そのため、平成13年4月、小菅村は源流にこだわった村づくりを推進していく目的で多摩川源流研究所を設立した。源流研究所は、源流と流域との交流を活発化させることを通して村の活性化を図ろうと、「多摩川源流体験教室」「源流・大菩薩探訪の旅」「源流古道・水源林体験の旅」などを企画し、流域の市民を小菅村をはじめ源流域へに迎える体制を整えている。さらに、源流の自然、歴史、文化などの資源に着目し、その資源の調査・研究、データの蓄積を図るとともに、その成果と源流に関する情報を流域に発信して、源流に対する流域の市民の関心を惹起している。源流に調査研究の拠点、情報発信と交流の拠点が築かれたことは、源流の歴史に新しい扉を開きつつある。

### <村の全ての小字の聞き取りを実施>

「源流絵図」小菅版の特徴は、小菅村の8地区にある114の小字に関する地名とその由来に注目したことである。小菅村の東部（12）、白沢（9）、小永田（18）、中組（13）、田元（12）、川池（12）、橋立（18）、長作（20）の各地区を回り、長老や地区精通者に地名に関する由来を聞いた。今回の調査で、村にあるすべての小字に関して調査・研究できたことは、これからの本格的な地名研究の基礎を築く大きな成果だった。

もちろん、調査の期間も限られており、また専門的知識に乏しいなかで不十分や不正確さをあえて承知の上で、地区精通者への聞き取りを基本に、自らの判断でいくつかの地名の謎解きに挑戦した。その特徴的な地名を幾つか紹介する。

東部地区・余沢に「大成」と呼ばれる地名がある。大成は昔富士講の通り道にあたり賑わいを見せていた。大寺、小寺、比丘尼寺と小さな集落に三つの寺が建ち並んだ。ここは山間の緩やかな傾斜地にあたることから、ナルい傾斜の土地という意味で大成と名付けられたのであろう。

### <村と村の堺を牛に託す>

長作地区に「牛飼」という面白い地名がある。ここで地元の方が牛でも飼っていたのであろうかと思い、地元の長老に聞いた。その長老はその土地を「牛会」と表記していた。言い伝えによれば、小菅村と隣の西原村との境を決めるのに、双方の村から牛を歩かせ、その牛が出会ったところを境にするという取り決めが成立し、その結果現在の境界が出来たという。牛が出会ったところ、「牛会」が「牛飼」に変化したのであろう。地元では、「ウシゲエシ」・牛返し、つまり牛が出会って引き返したところという別名で呼ぶ人もいるように、もともとは、「牛会」が正解であったと思われる。

中組地区・山沢に「タノモクリ」とよばれる小高い土地がある。地元の人に聞いてもその意味が不明であった場所である。この調査が終わりに近づいた頃、村の長老に聞きに行った。長老も「タノモクリ」の意味を図りかねていたが、長老はその場所を「タナモックリ」と呼んでいた。この大地は三段の棚から成り立っており、上の二段に集落が形成されている。近くで見ても読みとれない地形の特徴をどこか高い場所から判断して、段々と続く高地の一番上に盛り上がったところがある様子を「タナモックリ」と呼んだのであろう。

その「タナモックリ」が、いつの間にか「タノモクリ」に変化したのであろう。

### <江戸の昔の富士講の足跡>

白沢地区に「降矢戸」という地名が残されている。一見すると矢が降るという印象から昔の合戦場の近くではないかと想像をかき立てられたが、地元の人々は、「フリヤード」と呼んでいた。昔ここは富士講の通り道として賑わっていた。旅人がくつろぐ宿屋や酒屋もあった。旅人が利用した「古宿」があり、そのフルヤドが「フリヤード」に訛り、「降矢戸」の漢字が当てられたのであろう。

同じく長作地区に「秋切」という地名がある。昔山仕事といえば、材木の切り出し、炭焼き、焼き畑などが主であったが、この土地を流れる秋切沢の周辺は日陰の場所も多く、炭焼きなどの山仕事を秋までに切り上げて一段落を付けることから、この名前が生まれたのであろう。源流域の冬は厳しく、日陰での仕事は、体の芯まで冷えて体を痛めることから次の世代へのメッセージを地名に刻んだのであろう。

### <峠より低い身近な尾根にどどここ越え>

同じく長作地区に「打越」という地名がある。村の中の小高い峠になっていて十文字に向かう人々の一休みする小さな平地を形成している。ここに面白い逸話がある。昔、タバコの火を付けるのに火打ち石を利用する人がいた。その火打ち石は、この地区のコヤケ谷の赤石が使われた。この赤石は固くて強かったので、この赤石を打ってたばこに火を付け、一服し峠を越えたという。打ち腰しにひっかけてこの地を偲ぶ人の優しさがにじむ地名である。

田元地区に「腰越」という地名がある。川を越すのに橋が架かっていない時代に腰まで浸かって対岸に渡ったことからこの名前が生まれたのであろう。全国的には、山の麓から少し離れた場所に、腰を低くした様子の低いところを越えていくことから「腰越」と呼ばれる地名が残っているが、この地はこのケースに当てはまらない。

川池地区に「獅子倉」という地名がある。この地区には、伝統的に獅子舞が継承されているので、これにちなんだものかと思ったが、部落の周辺の危険な場所に「しし」という地名がつけられたようだ。この山の中腹には、アラクラという沢があるなど、地崩れしやすい土地柄を示している。古代人は、地名に様々なメッセージを託している。

### <滝の名前の由来に法則が>

「源流絵図」小菅版の特徴の一つは、この絵図を作成するための実踏調査の過程で小菅村の新しい宝物である妙見五段の滝に出会えたことである。一昨年春、小菅村の嶋崎新吾さんと小菅川の実踏調査に出かけた折りにこの滝と遭遇した。新吾さんの話によれば、「地元のもの滅多にここまで足を踏み入れることはない。ここを通る猟師や釣り人は、上流に向かう際、右岸の岩をへつりながら登るので滝全体を眺めることはなかった」という。

そのため、この五段の滝はその存在を知られることなく現在に至った。こんな素晴らしい滝に名前がないとは信じられなかったが、繰り返し長老を訪ねその名前を調査したが、やはり名前はなかった。廣瀬村長や古家助役から、「この滝にふさわしい名称を考えて欲しい」と頼まれたので、「妙見五段の滝ではいいがですか」と提案し了承された。最も存在感のある滝の名前の付け方に三つある。一つは、その谷の代表する優れた滝との意味合いからその谷の名前を付ける場合がある。二つ目は、その滝がいかにも神秘的で神々が宿る雰囲気を漂わせている場合、不動滝と名付けられる。三つ目は、その川の源頭が由緒ある場所である場合、その源頭の名前を滝に付ける。小菅川の場合、その源頭は、大菩薩嶺の妙見の頭（標高1975m）である。ここには、「北斗妙見大菩薩」の碑が建立されており、大菩薩という山の名前の由来にも関わる由緒ある場所である。こうした経緯から、この「妙見五段の滝」は、小菅川の源頭である大菩薩嶺の「妙見の頭」の「妙見」を頂き、この名前が生まれたわけである。

### <地名は貴重な無形文化財>

今回の小菅村における地名の調査に取り組んで、地名の生まれてきた背景、地名の変遷、地元の方々の地名への思いなどに直接触れる機会を得た。とりわけ、故郷の地名は、人間が生まれ育つ生活環境そのものであり、人間は成長とともに地名との新たな出合いを広げていく。地名もまた、人間の生活と暮らしの広がりに合わせてその量を拡大していったのだろう。人間の歴史はそのまま地名の歴史と重なる関係にある様に思える。身近な地名の一つ一つに人間の生活や暮らし、文化や歴史が織り込まれており、地名は無形文化財として重要な価値があるように思えてならない。この源流域における地名とその由来の研究を通して、古代から生きてきた人間の生活体験の原点がここに色濃く残されている想いを益々深くした。

## □ 謝 辞

山崎進さん達の協力で源流絵図奥多摩版が2004年10月に完成した。遂に出来たと感慨無量である。多摩川源流の魅力に取り憑かれ、竜喰谷に最初に足を踏み入れたあの日（1994年7月18日）以来、早いもので10年の歳月が流れたが、この10年間で、多摩川源流絵図塩山・丹波山版、源流絵図小菅版、源流絵図奥多摩版の三部作を完成させることができた。

物心両面から支えていただいたとうきゅう環境浄化財団の助成に心から感謝している。また、絵図を担当してくれた石川重人さん、相談に乗ってくれた鷹野忠彦さん、雨宮清貴さんを始め危険を顧みず、苦楽をともにしながらこの源流絵図作成に協力した多摩川源流観察会の仲間達や、山崎進さん、守男只さんなど大勢の方々の心暖かいご支援とご指導にこの場を借りてあらためて感謝の意を表す。また、小菅村や丹波山村、奥多摩町の職員の方々は、多忙にも関わらずこの源流絵図作成に協力を頂いた。改めて心から感謝する。

そして何よりも、私の心と体を支えてくれた中村真里、中村亜希、末田沙緒里、深沢純子など家族へこの場を借りて感謝のメッセージを送りたい。

この取り組みを通して、日本人と自然との係わりがどれほど深く、どれほど広がりが分かった。唯ひたすらに地元の長老から源流部に存在する淵や滝、沢や尾根の名称とその由来を聞き取り、記録してきた。沢や尾根に関してはまだまだ勉強不足のため、解説不明の個所が多く今後への課題も数多く見つかった。源流に踏み入れば踏み入るほどその価値と役割の大きさやくみつくせぬ魅力と可能性にただただ圧倒される日々であった。この魅力と可能性を次の世代を担う子供たちへ伝えたいと思った。日本人の祖先達が大地に刻んだ地名と由来を有りのままに多くの人々に伝えたい。これまで939回、源流へ足を向けてきたが、源流行3000回を目指し、これからも一步一步源流を歩み続けたい。

2004年3月30日

多摩川源流研究所

所長 中村文明

資 料 編  
写 真 集

奥多摩実踏調査（倉沢・04.2.11）



倉沢（04.2.11）



倉沢（04.2.11）

奥多摩実踏調査



(倉沢・魚留橋)



(倉沢・魚留橋)

実踏調査



倉沢谷



倉沢谷

奥多摩ヒヤリング

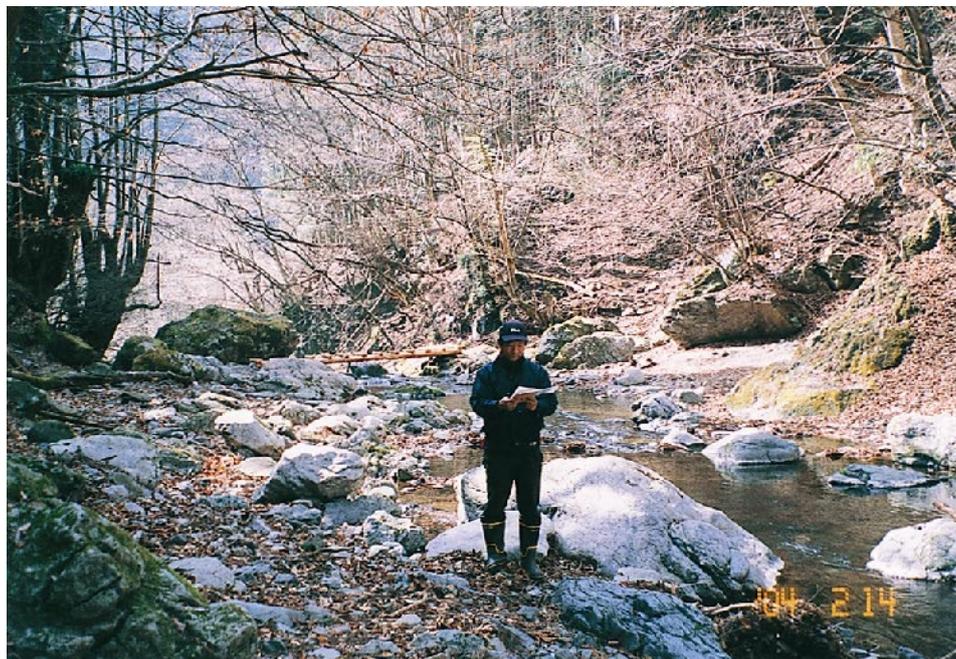


海沢の新さん (04. 2. 11)

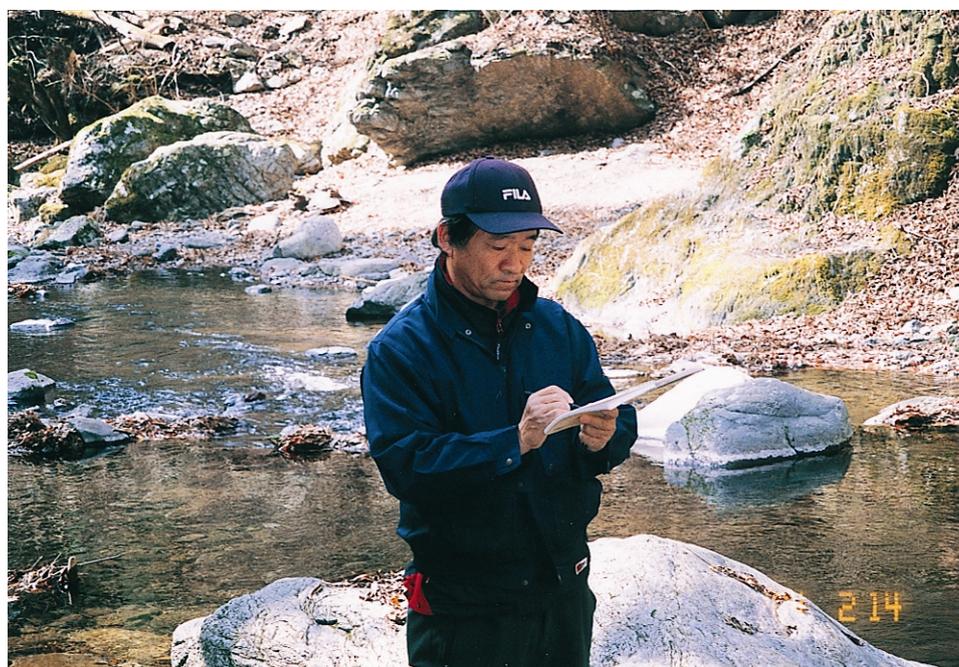


海沢の新さん (04. 2. 11)

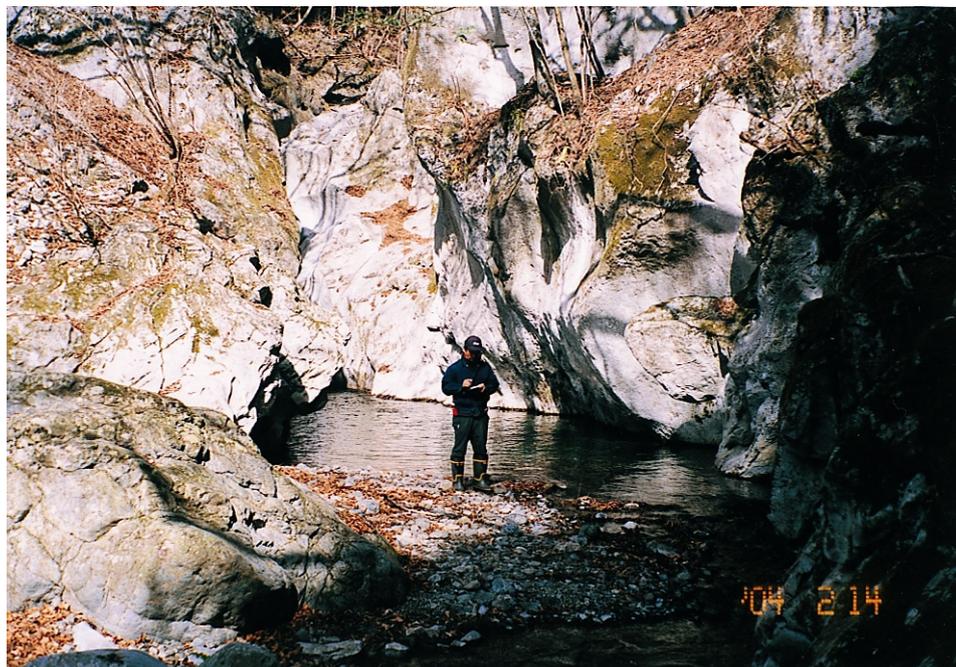
奥多摩実踏調査



川苔谷 (04. 2. 14)



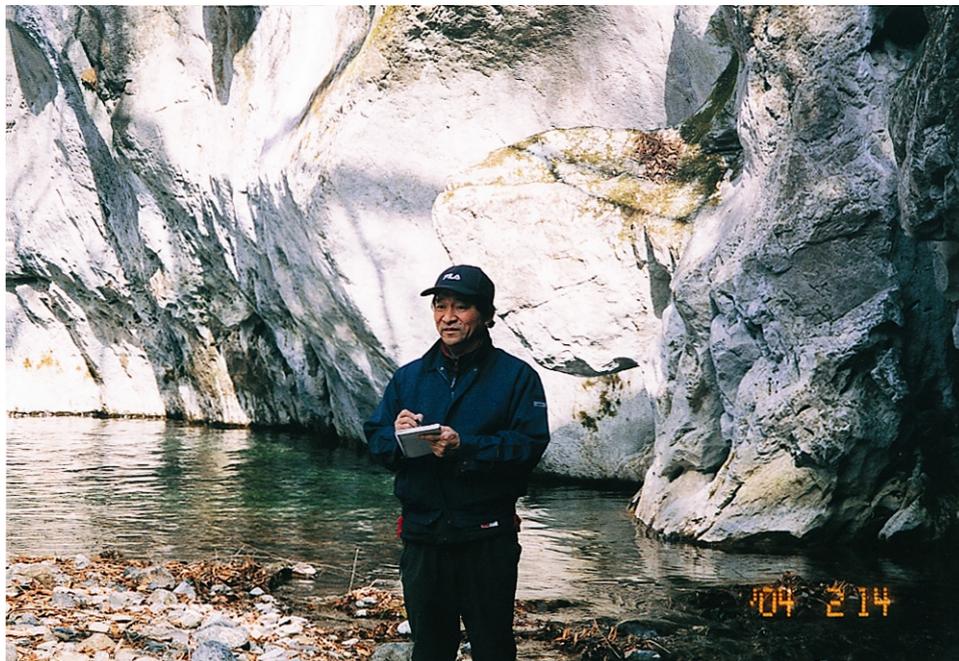
川苔谷 (04. 2. 14)



聖滝 (04. 2. 14)



聖滝 (04. 2. 14)



聖滝 (04. 2. 14)



聖滝下流 (04. 2. 14)

奥多摩ヒヤリング



大沢 天野さん (04. 2. 14)

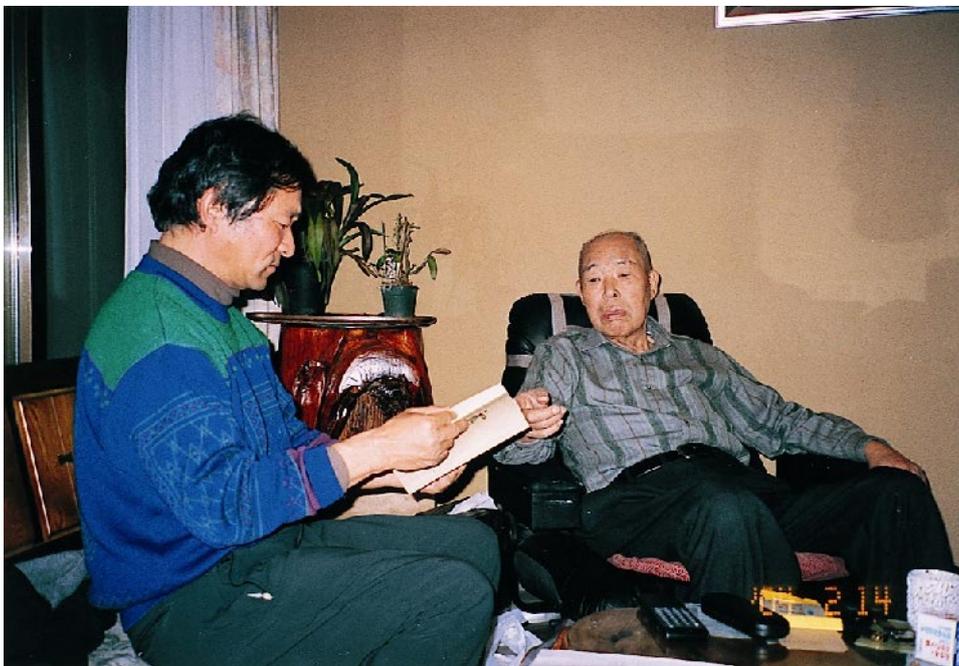


大沢 天野さん (04. 2. 14)

奥多摩ヒヤリング

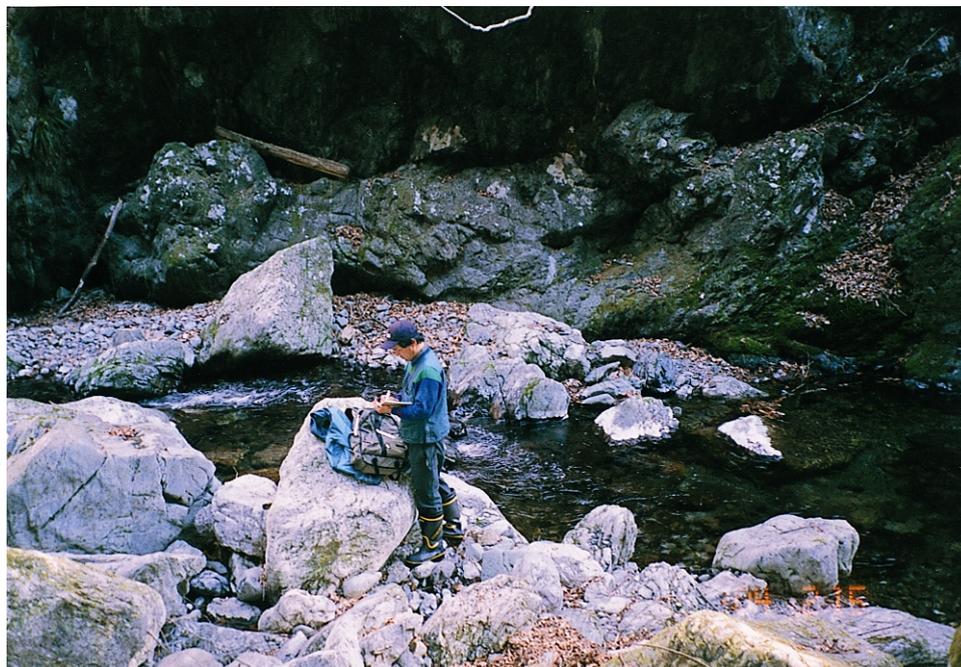


西川 佐久間さん (04. 2. 14)

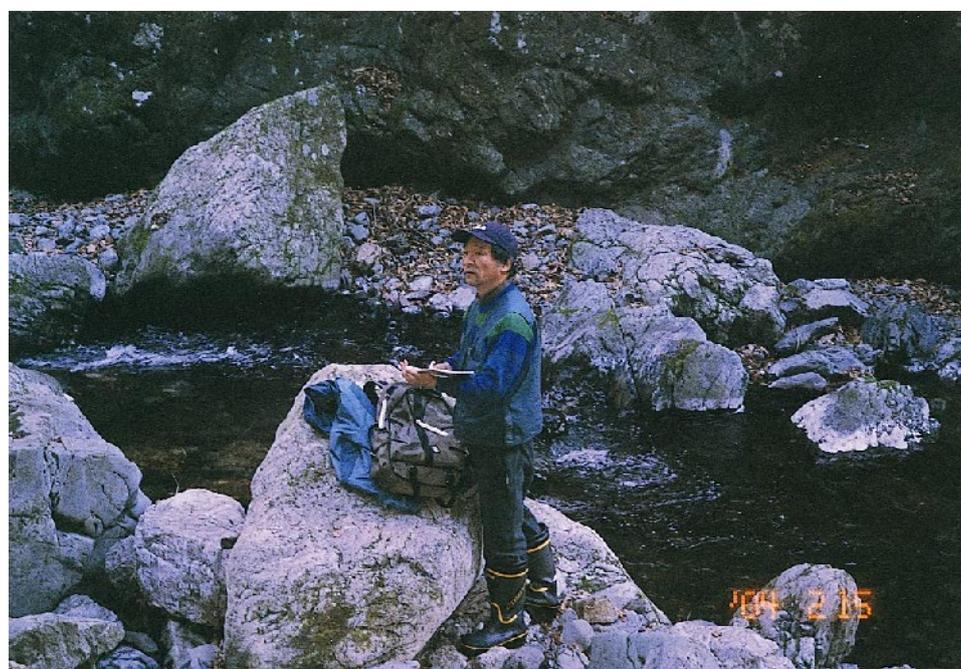


西川 佐久間さん (04. 2. 14)

奥多摩実踏調査

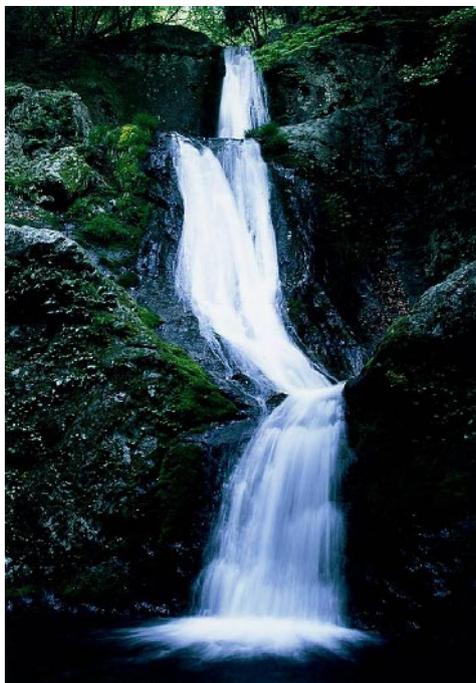


川苔谷 (04. 2. 15)



川苔谷 (04. 2. 15)

奥多摩実踏調査 (2002. 5月)



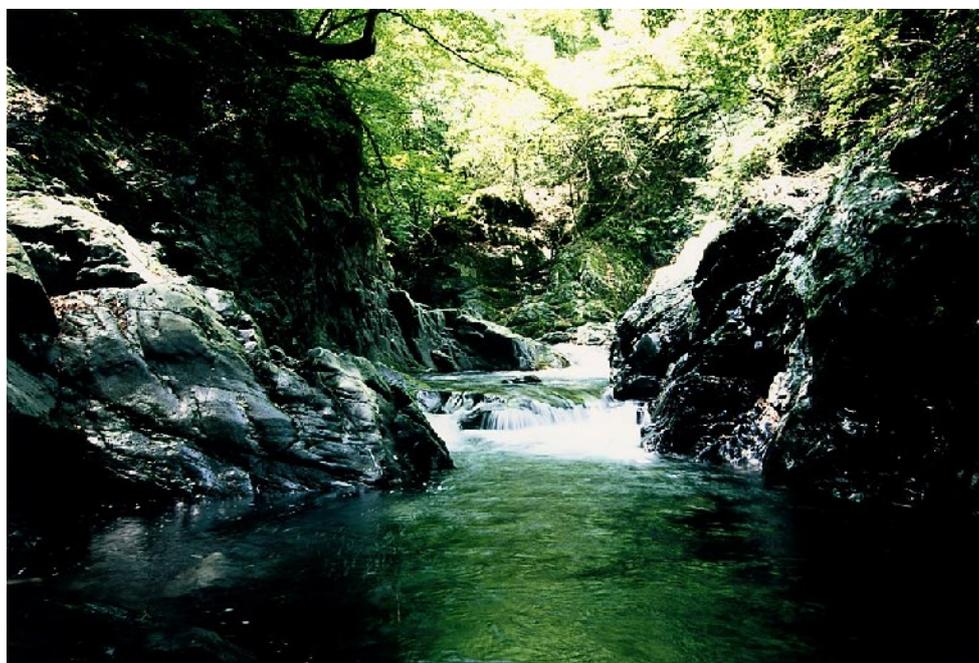
海沢の三ツ釜の滝 (02. 5月)



海沢の大滝 (02. 5月)



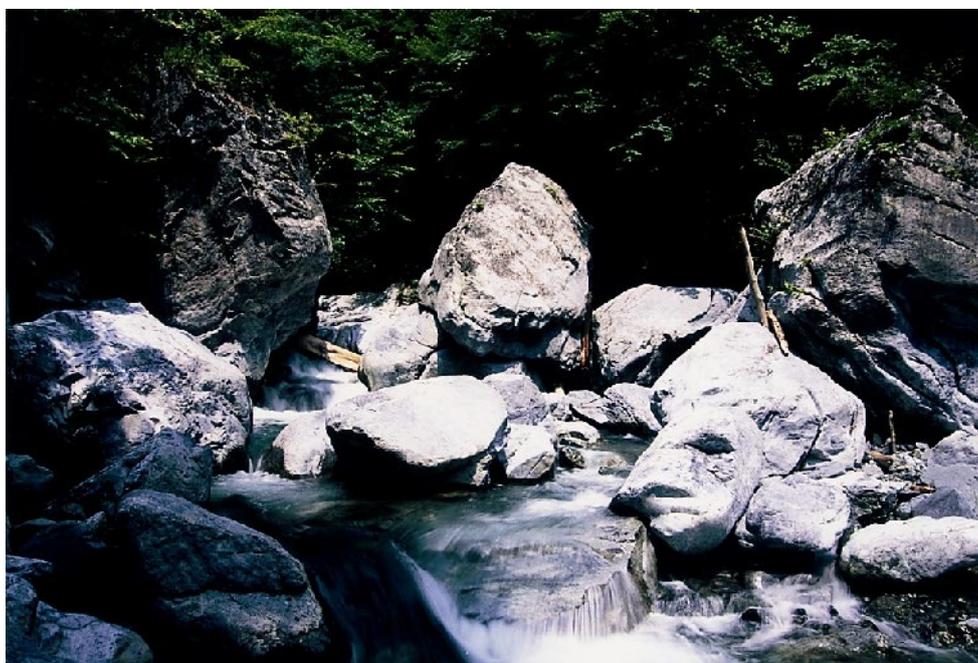
己ノ戸大滝 (02. 5月)



日原川 曲り尾根淵 (02. 5月)



日原川 岩清水上流



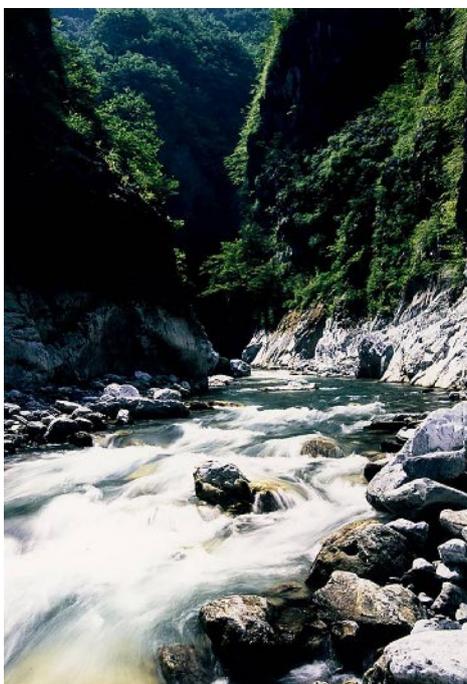
日原川 ガニザワ合流付近



日原川 戸望の岩壁 (02. 6月)



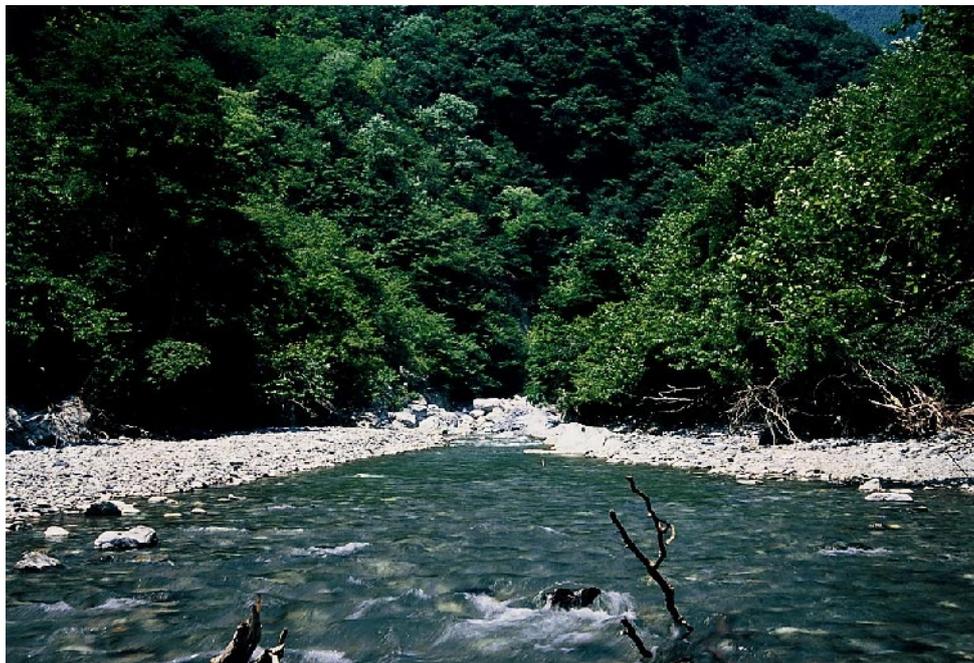
日原川 戸望 (02. 6月)



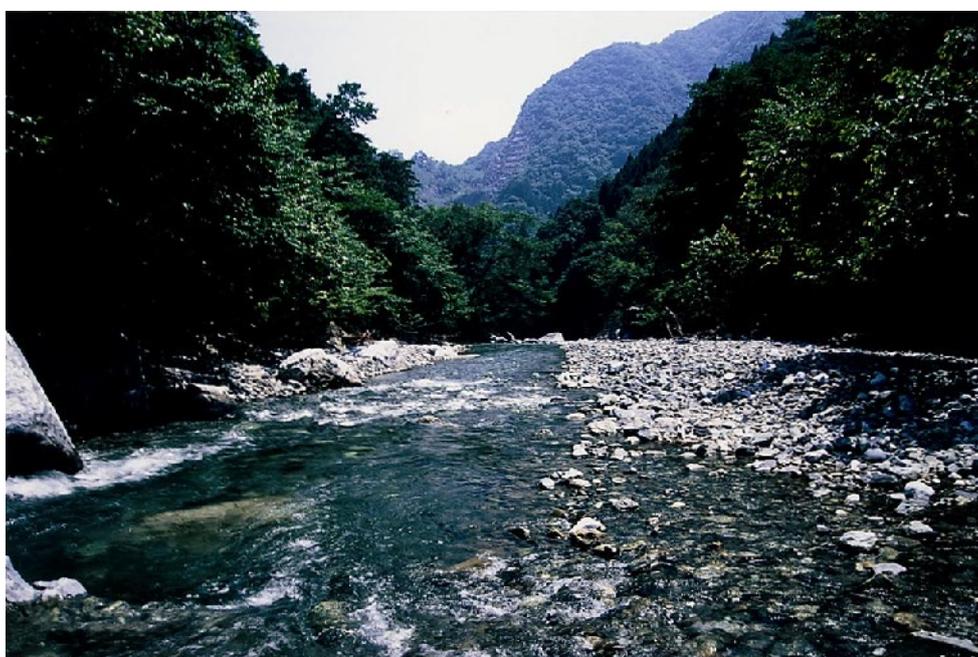
戸望下流 (02. 6月)



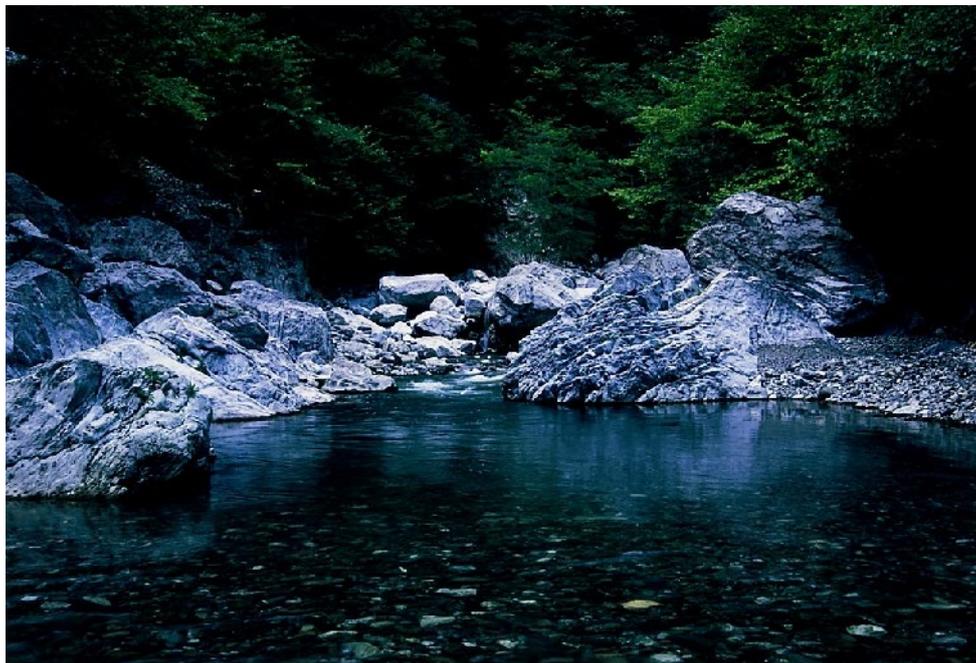
戸望の谷 (02. 6月)



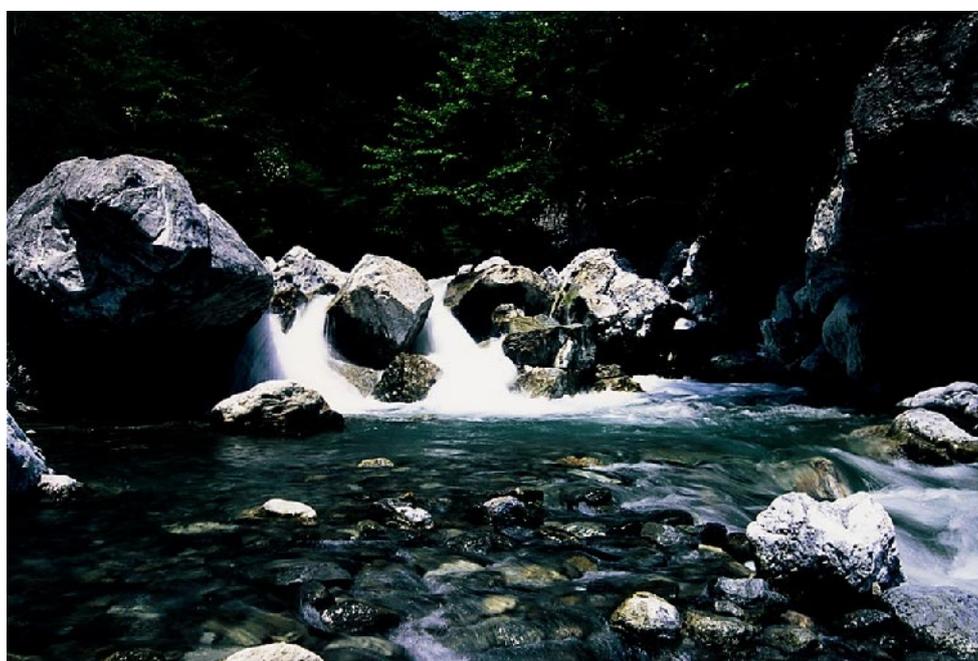
日原川 セベエ出会い付近



日原川 セベエ上流



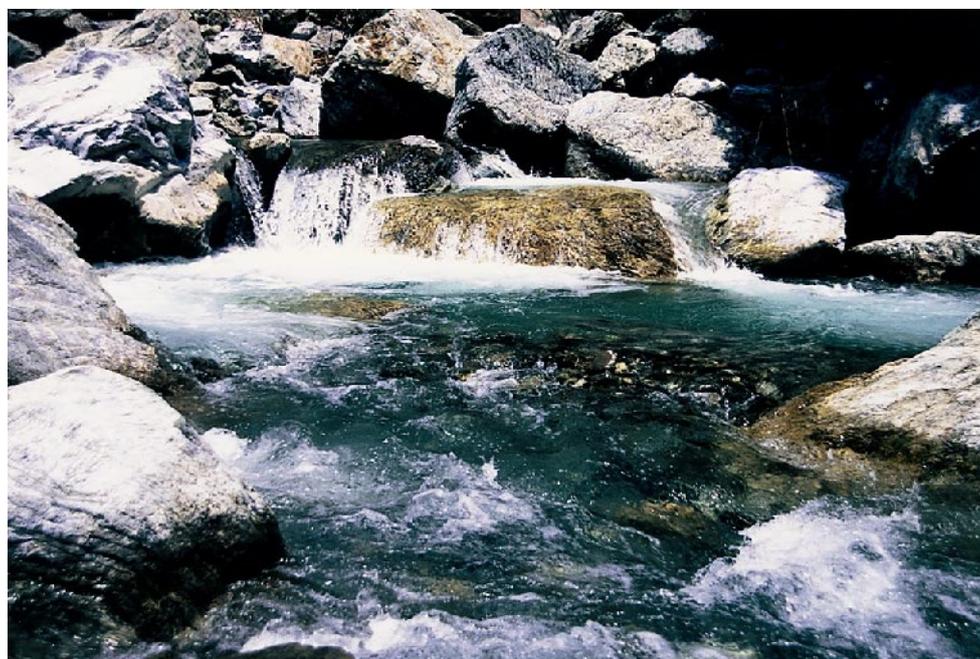
日原川 ゴーロ1



日原川 ゴーロ2



日原川 ゴーロ3 (02. 6月)



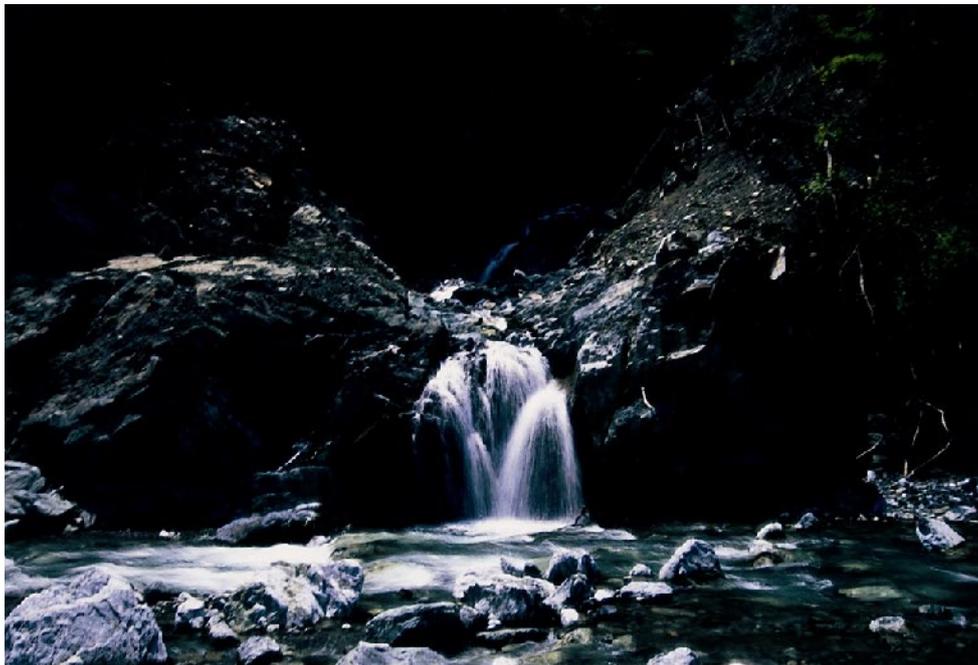
日原川 ゴーロ4 (02. 6月)



日原川 馬マワシナギ付近



日原川 お花ドウ下流



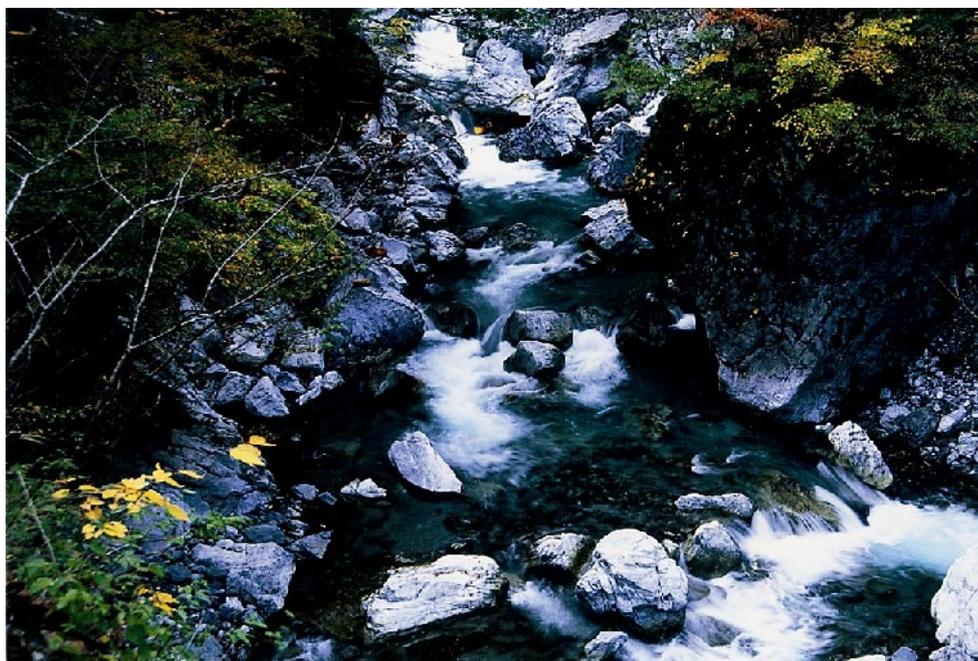
タル沢



昔大橋 (02. 8月)



日原川 ナガシ河原付近 (02. 8月)



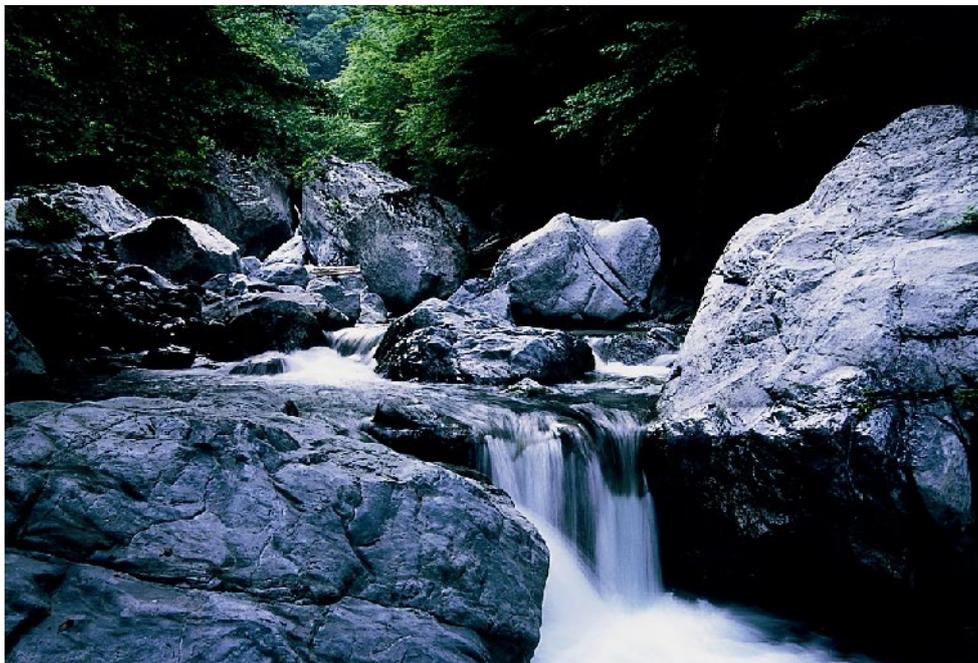
伊勢橋 (02. 10月)



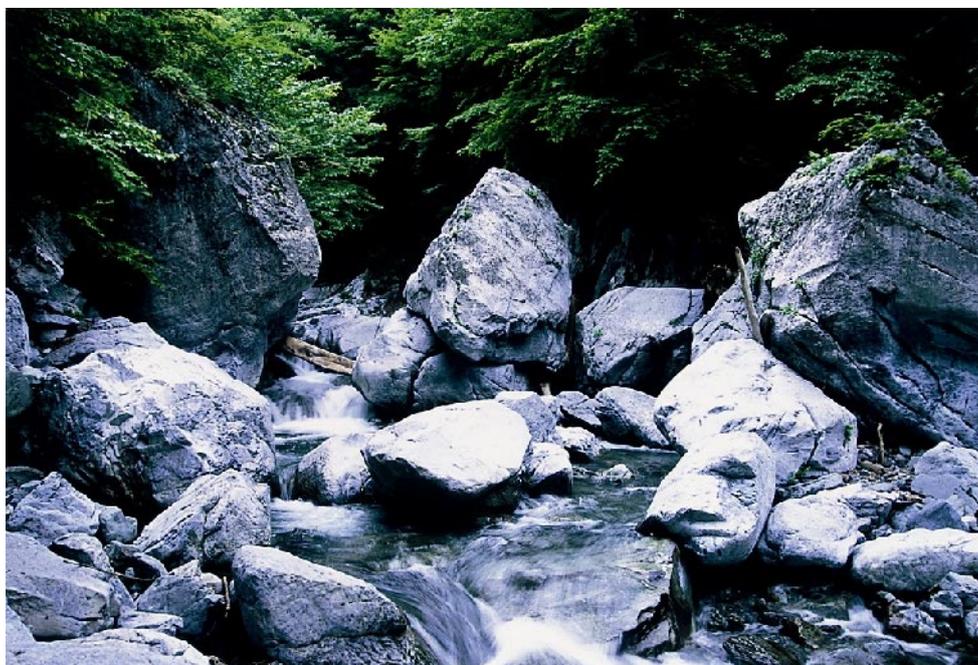
日原川 伊勢橋上流 (02. 6月)



同上



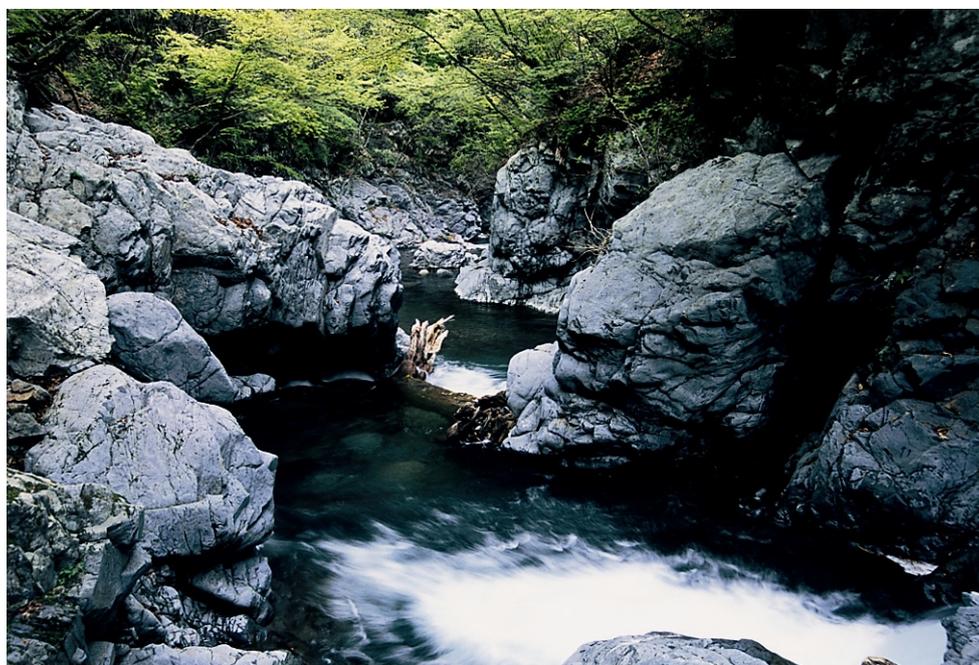
日原川 オツボ滝付近 (02. 6月)



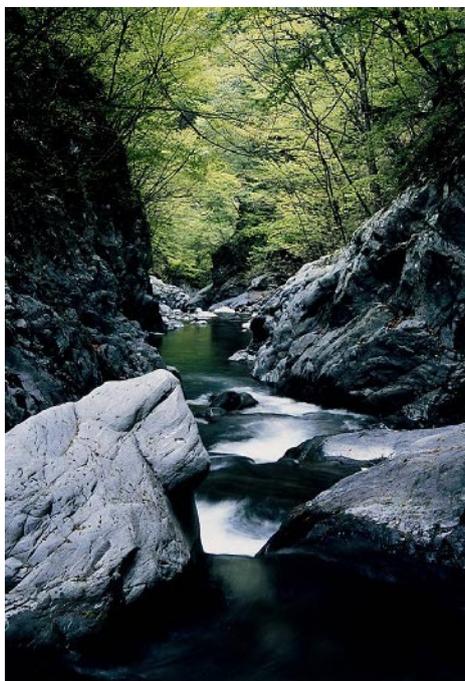
ガニザワ出会い付近 (02. 6月)



日原川 男釜 (02. 6月)



日原川 マラダシ淵 (02. 6月)



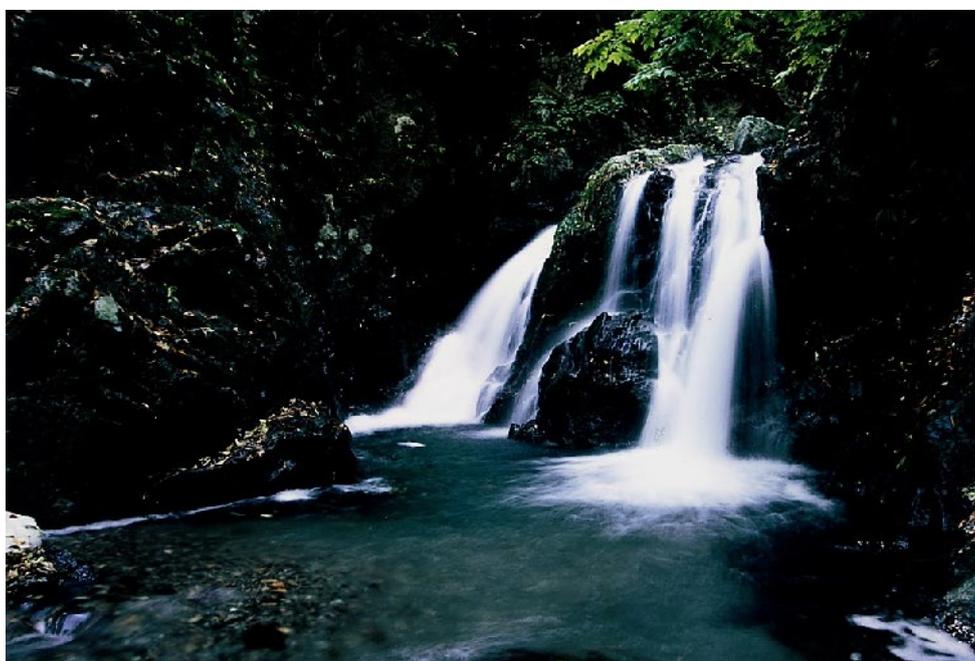
日原川 己ノ戸出会い付近 (02. 6月)



重郎次淵上流 (02. 6月)



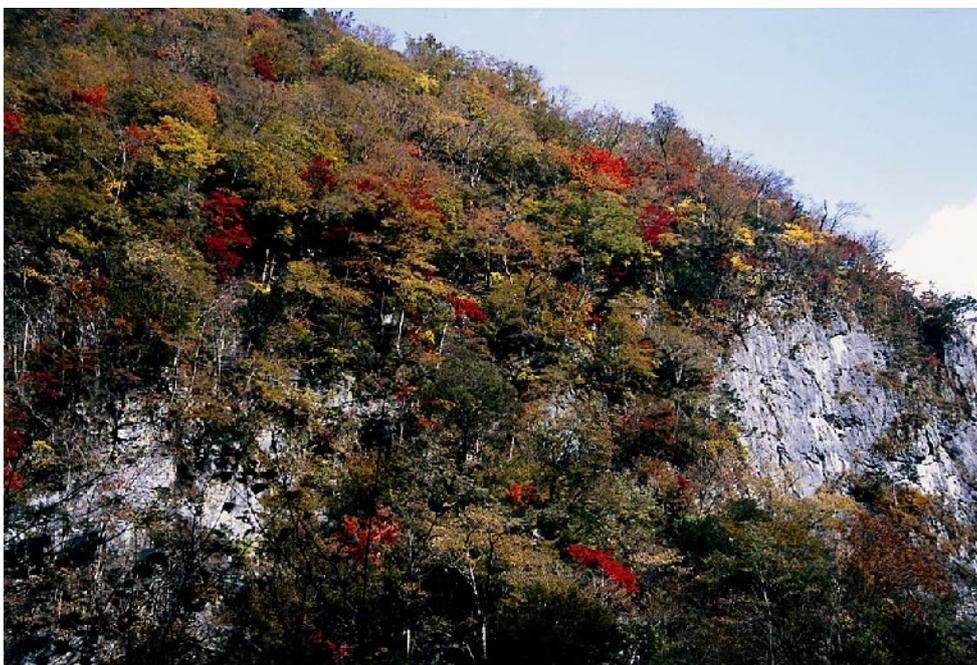
大雲取谷の秋 (02. 11月)



大雲取谷 (02. 11月)



大雲取谷 (02. 11月)



日原川の秋 (02. 11月)



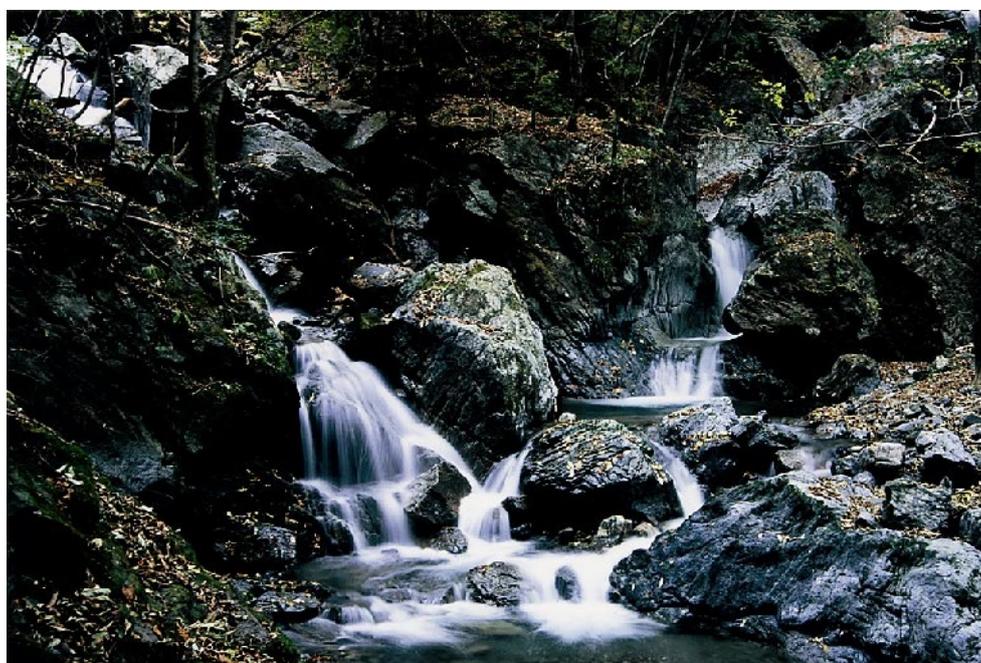
惣兵の秋 (02. 11月)



惣兵の秋 (02. 11月)



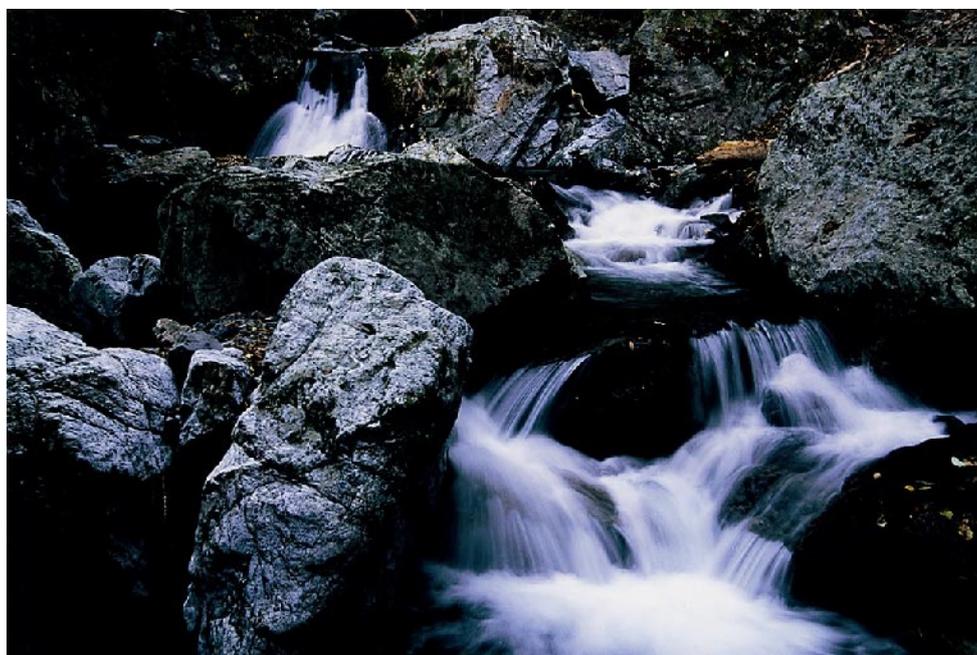
日原川 稲村岩 (02. 11月)



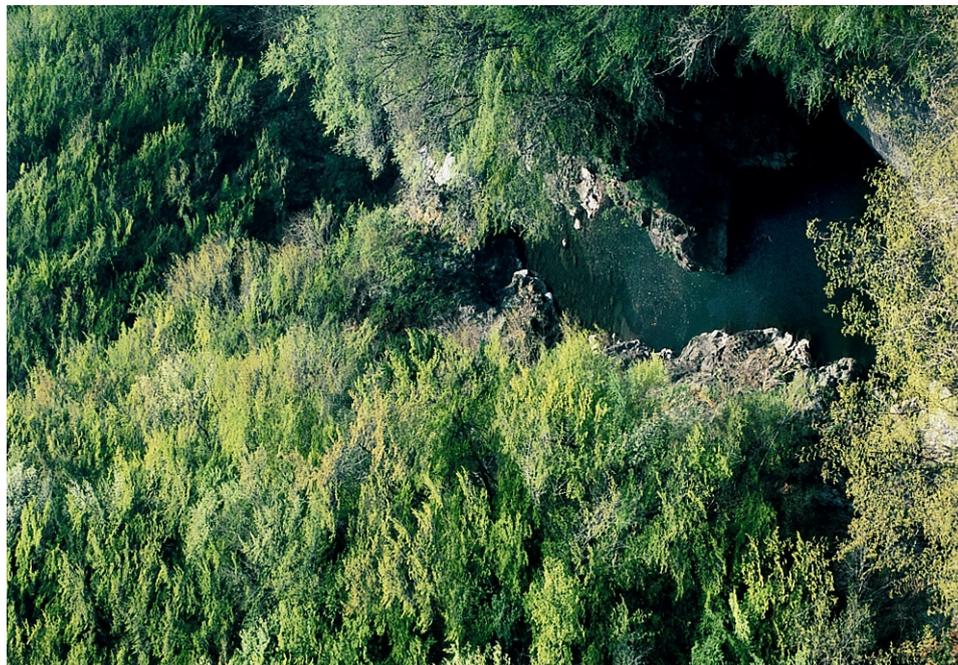
倉沢谷上流 (02. 11月)



倉沢谷上流 (02. 11月)



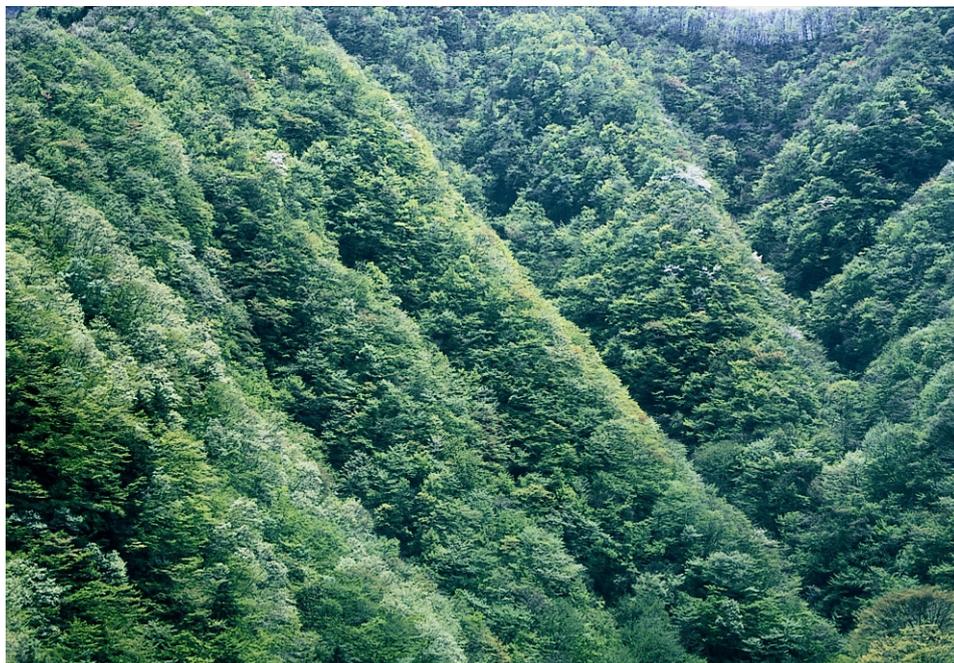
倉沢谷 (02. 11月)



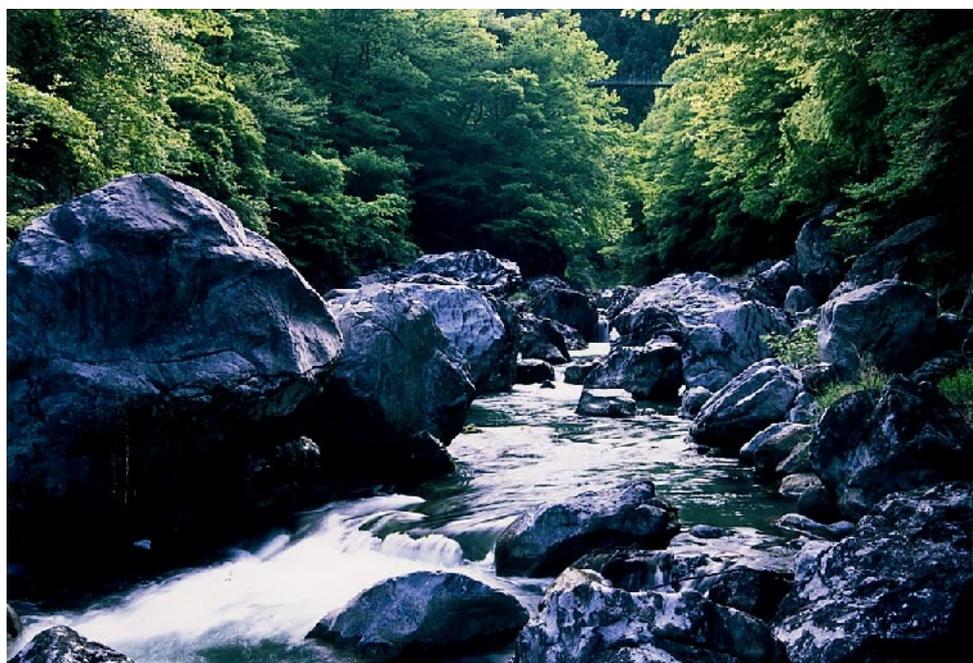
奥多摩の春 (03. 4月)



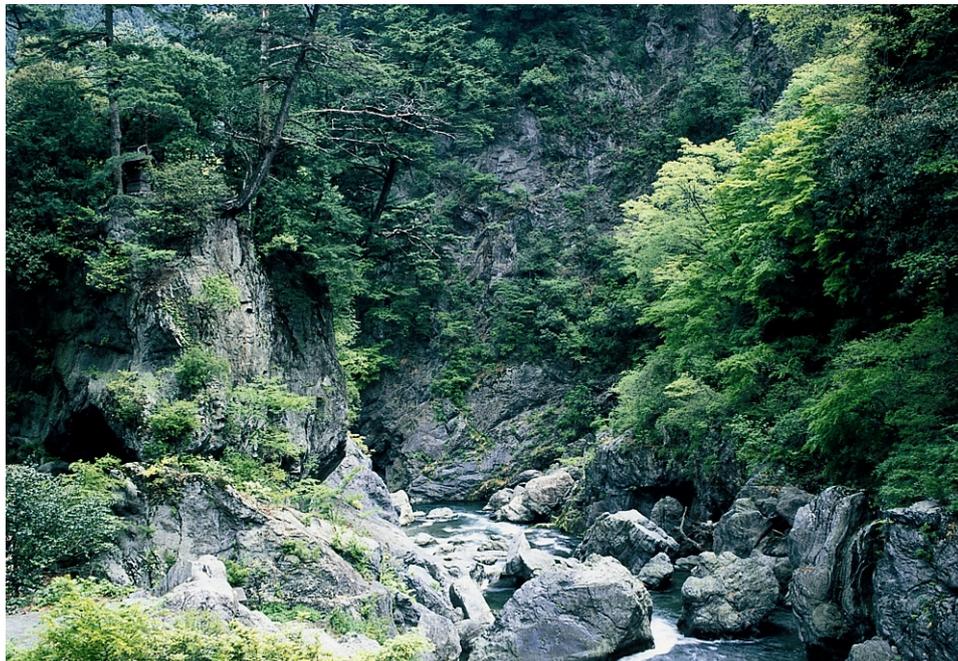
惣岳の春 (03. 4月)



多摩川（本川）の春 （03. 4月）



惣岳の荒 （03. 4月）



鳩ノ巣の春 (01. 4月)



鳩ノ巣溪谷 (01. 4月)



雲取山頂付近 (01. 7月)



雲取山登山道 (01. 7月)



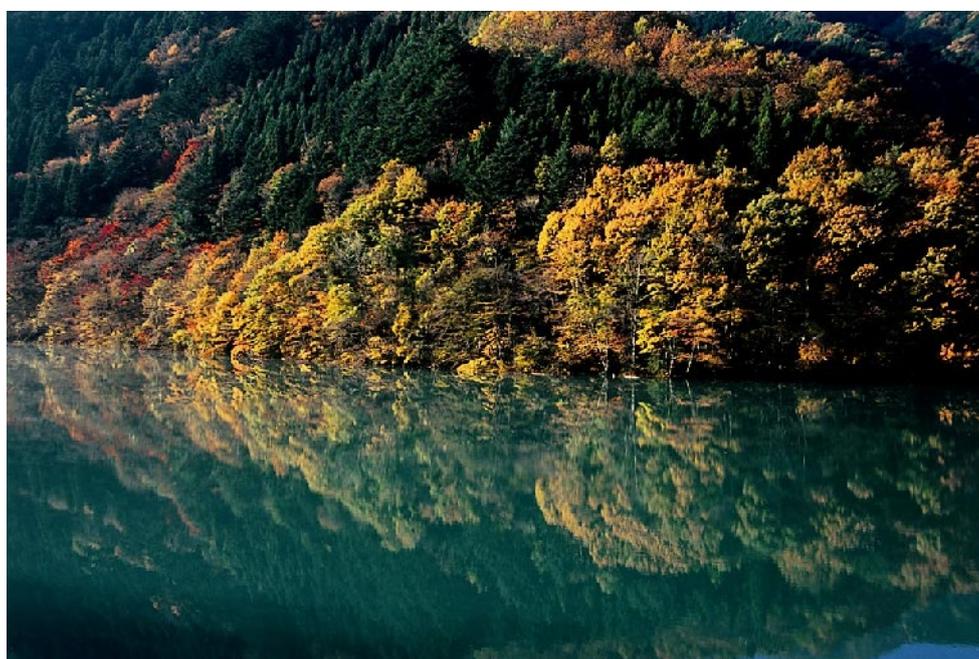
惣岳の秋 (01. 11月)



惣岳の秋 (01. 11月)



惣岳の秋 (01. 11月)



奥多摩湖の秋 (01. 11月)



倉沢の冬 (03.1月)



倉沢のツララ (03.1月)



倉沢のツララ (03.1月)



倉沢のツララ (03.1月)



倉沢の冬 (03. 1月)



倉沢の冬 (03. 1月)



倉沢集落 (04. 1月)



倉沢集落 (04. 1月)



金袋山のミズナラ (02. 8月)



金袋山のミズナラ (02. 8月)



名栗沢のオオトチ



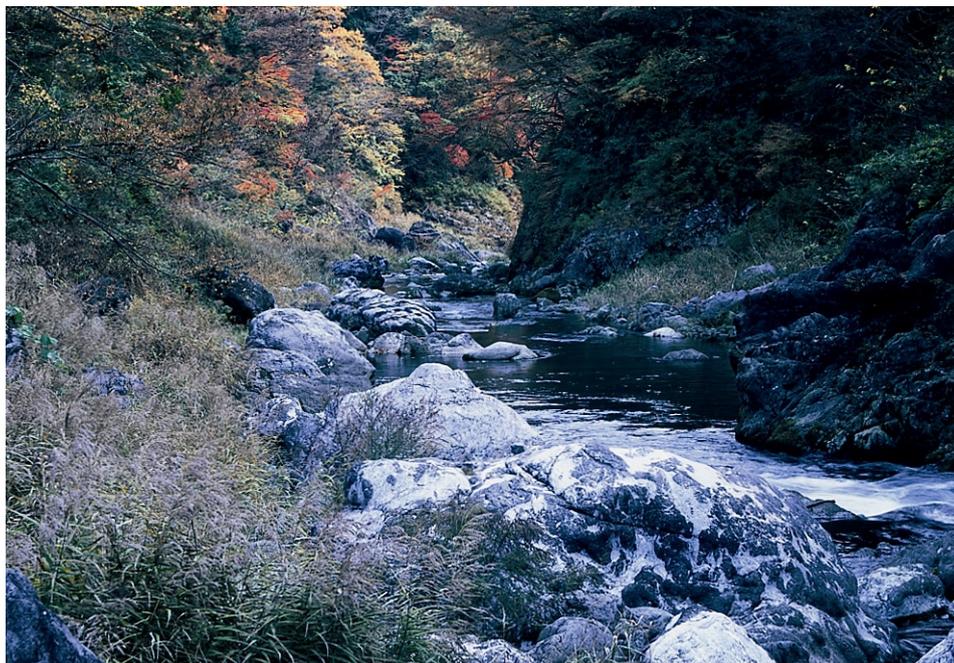
倉沢の千年のヒノキ



ガニザワ出会いのカツラ (02. 8月)



奥多摩湖 (04. 2月)



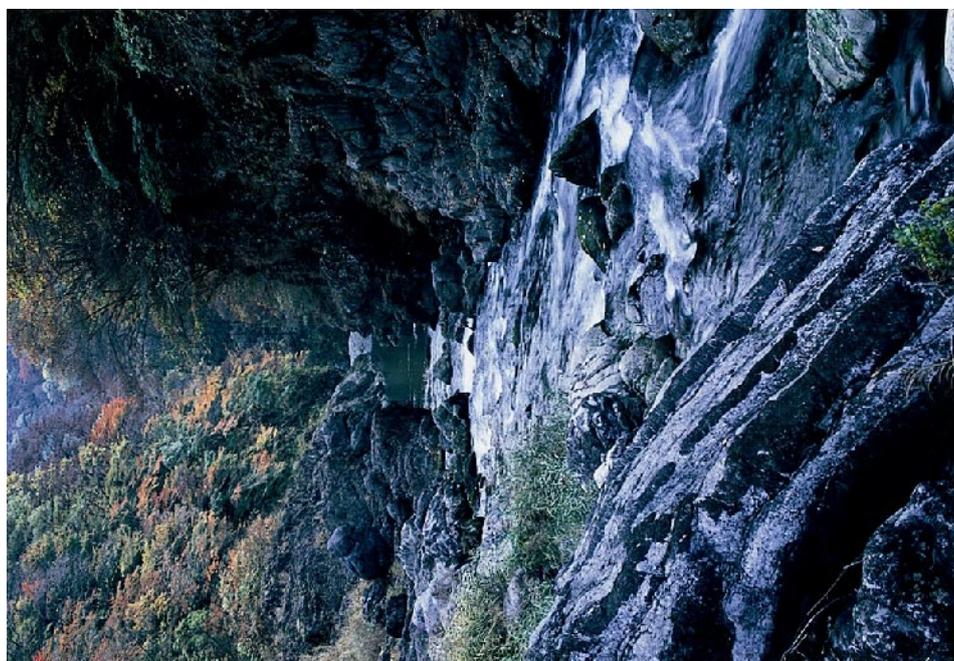
惣岳溪谷 (03. 11月)



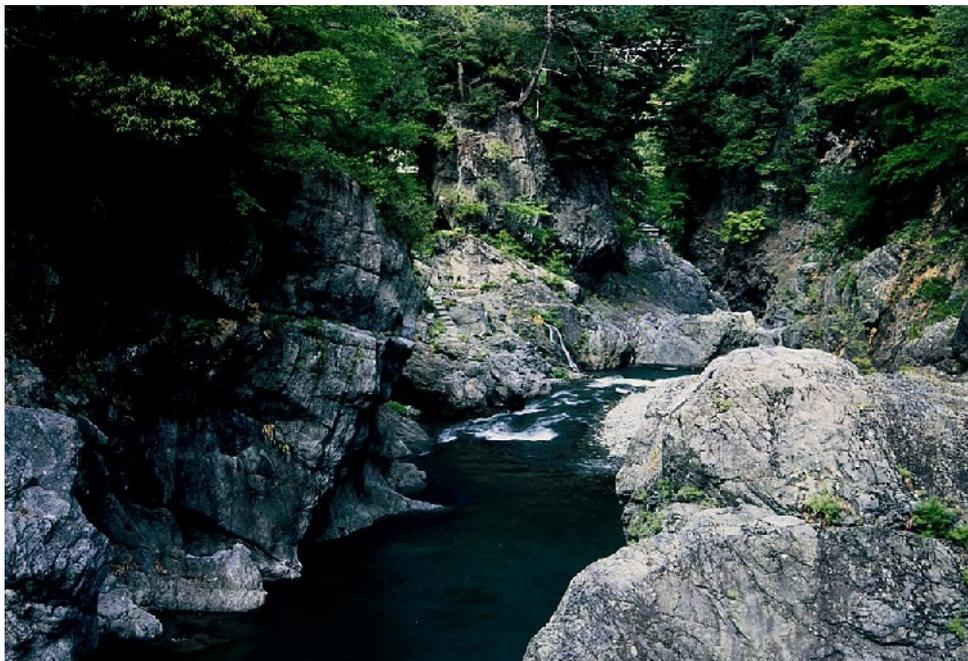
惣岳溪谷の秋 (03. 11月)



惣岳の秋 (03. 11月)



惣岳の秋 (03. 11月)



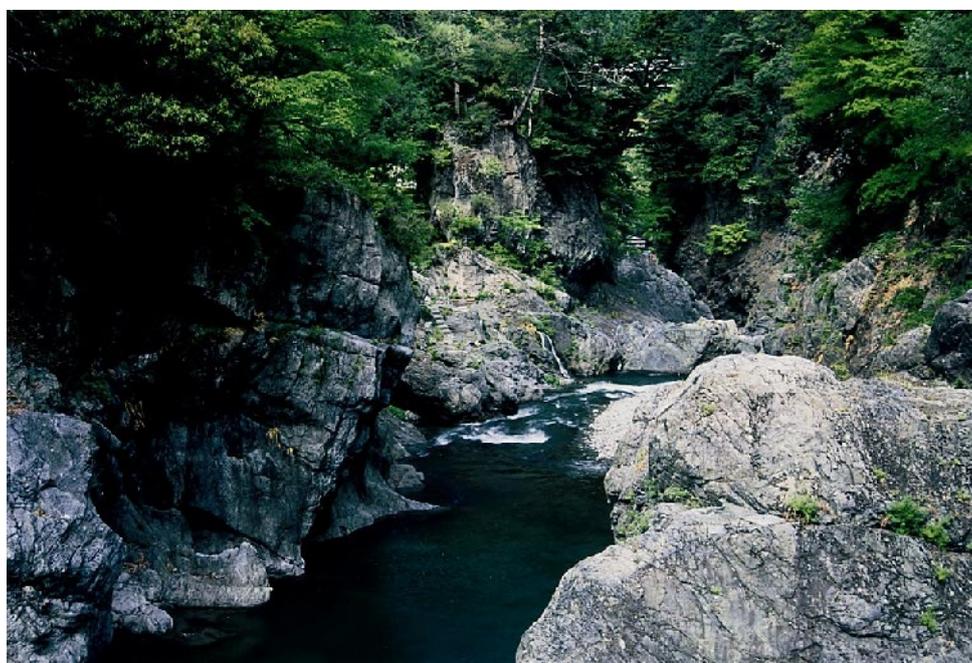
鳩ノ巣溪谷の春 (03. 6月)



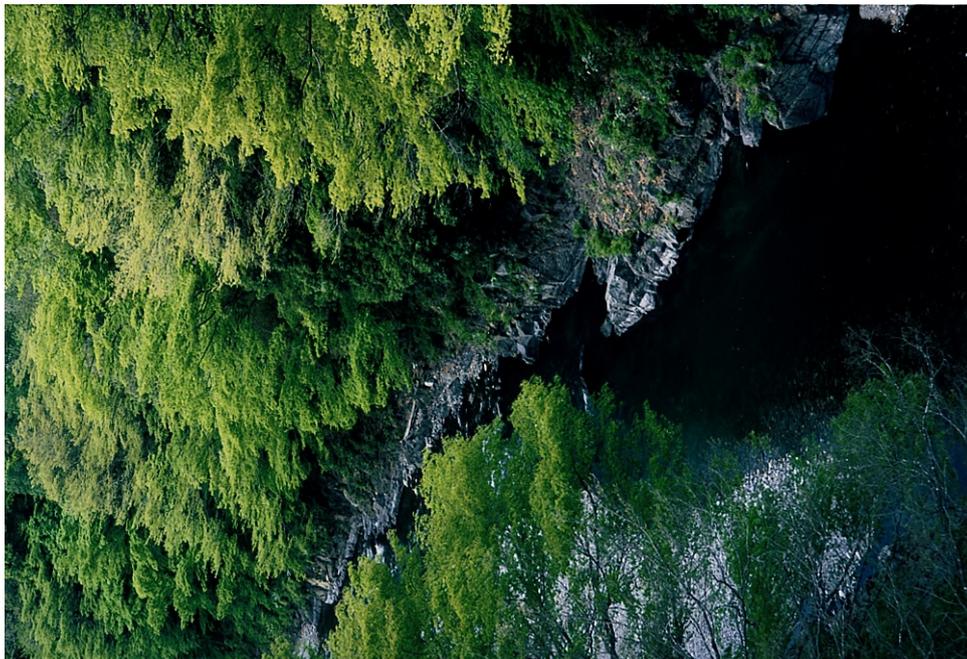
鳩ノ巣溪谷の春 (03. 6月)



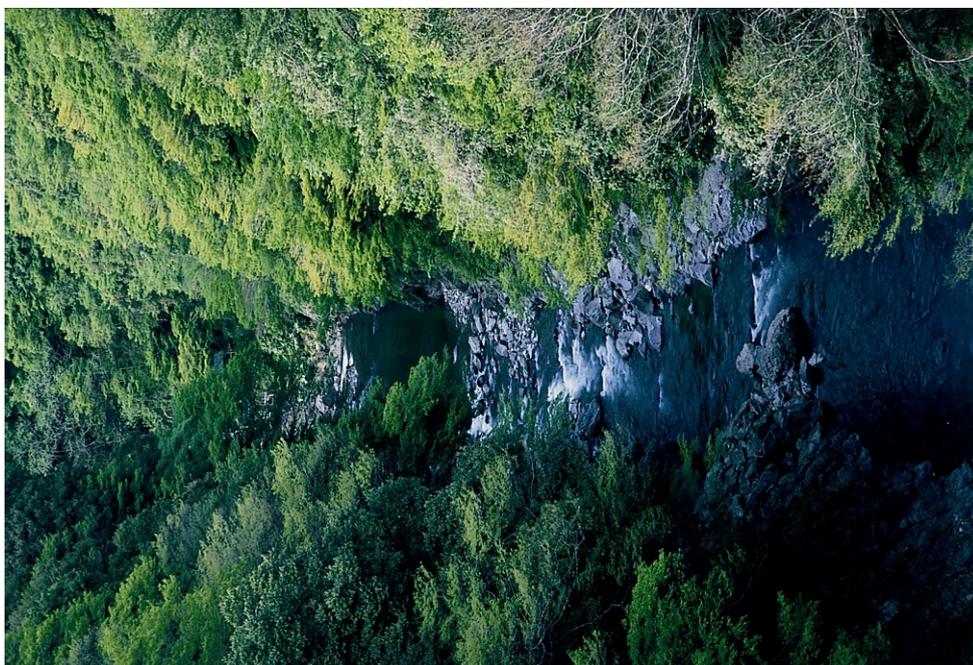
鳩ノ巣溪谷の春 (03. 6月)



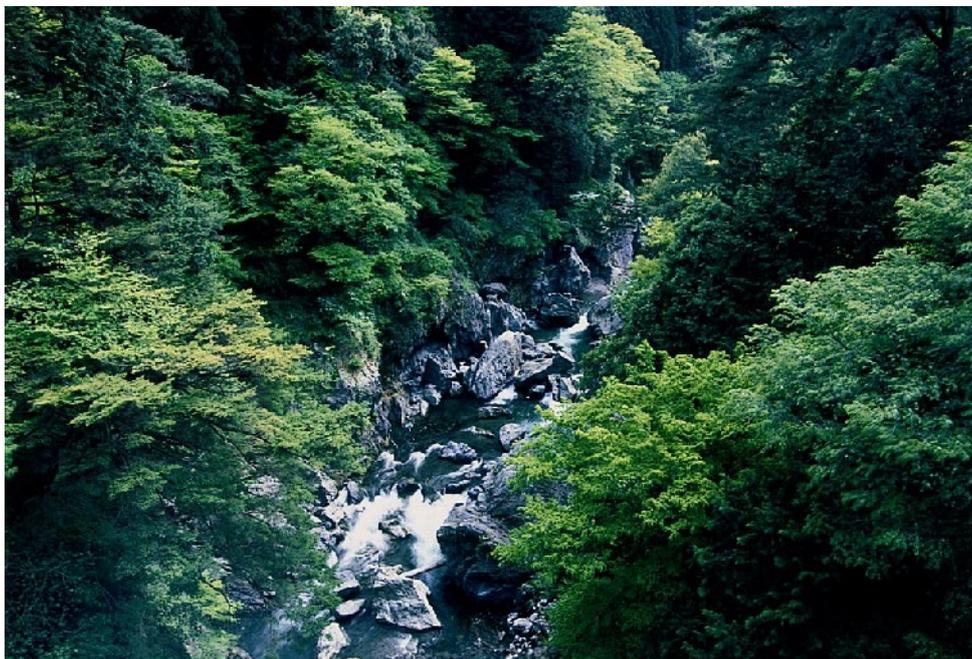
鳩ノ巣溪谷の春 (03. 6月)



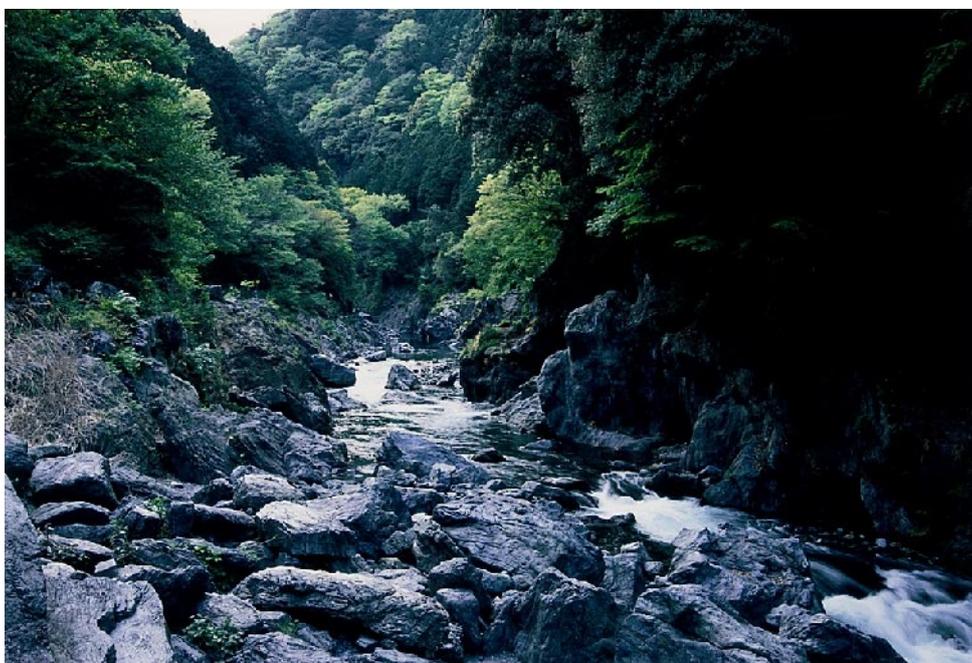
もえぎの湯付近 (03. 6月)



もえぎの湯付近 (03. 6月)



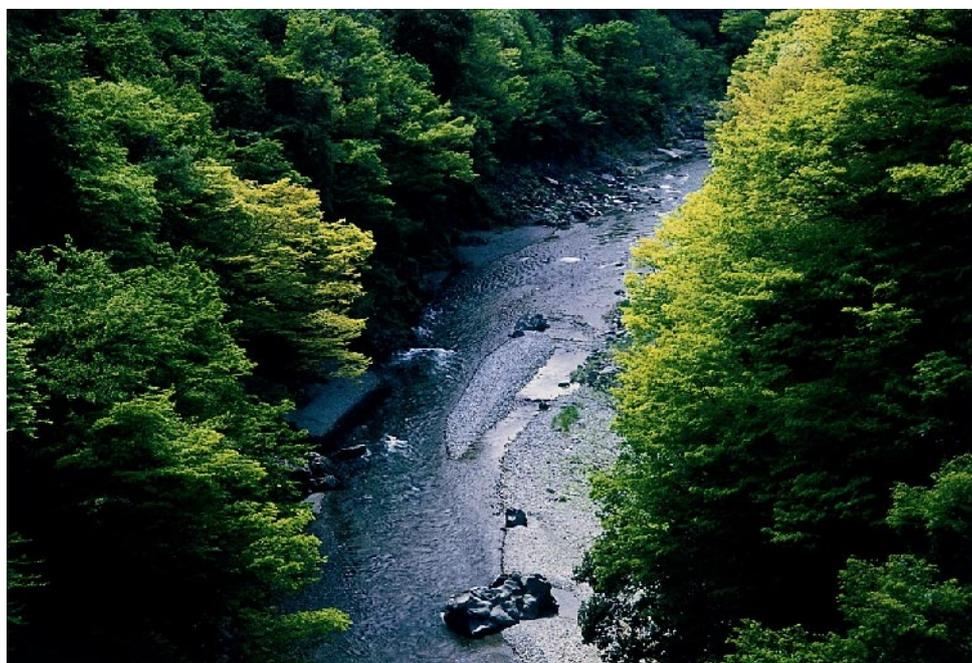
鳩ノ巣溪谷の春 (03. 5月)



鳩ノ巣溪谷の春 (03. 5月)



日原川八丁橋付近 (03. 6月)



多摩川 (本川 03. 6月)

多摩川

源

流

絵

図

奥

多

摩

版



金袋山のミスナラの巨樹 撮影:中村 文明

多摩川源流部の滝や淵、  
沢や尾根などの名称とその由来

多摩川源流域は、広大な都水源林に覆われて、手つかずの自然が残されており、急峻な山々や渓谷の織りなす変化に富んだ地形は、四季折々の美しい景観を作り出している。この源流域の大自然は多摩川流域社会共有の貴重な財産である。我々はこの多摩川源流の自然、文化、歴史等の資源に着目してその調査、研究とデータの蓄積、情報の収集と発信、交流と中下流との交流事業の推進などに取り組んできた。

源流域の滝や淵などの聞き取り調査、記録、保存継承を目的として、この10年間、実績調査を積み重ね、「多摩川源流絵図」塩山・丹波山版(1999年)、同小管版(2002年)を作成し好評を得たが、今回その第三弾である「多摩川源流絵図」奥多摩版の完成を見た。調査や製作にあたり、山崎進さんや小林操さんをはじめ、地元奥多摩町の方々、とうきょう環境浄化財団など多くの個人、団体に大変お世話になった。心から感謝したい。

二〇〇四年九月十五日 多摩川源流研究所 所長 中村 文明

企画・写真:多摩川源流研究所 所長 中村 文明  
絵図担当:多摩川源流観察会 副会長 石川 重人  
発行:多摩川源流観察会  
協力:奥多摩町、国土交通省京浜河川事務所  
印刷:(株)サンニチ印刷

注意 現地のガイドなしに溪谷に入ると大変危険です。絶対に御遠慮下さい。

多摩川源流研究所 山梨県北都留郡小菅村4383  
電話:0428-87-7055 ファックス:0428-87-7057  
ホームページ <http://www.tamagawagenryu.net>  
Eメール [genryu@mx.cosmo.ne.jp](mailto:genryu@mx.cosmo.ne.jp)

# 日原川・小川谷

- 1 **西谷出合い** 小川谷の最上流部に位置する。トリはオトリに通じており、昔、修験者はここから秩父に抜けたという。右岸からコツ谷が合流する。今から10年ほど前まで、ここにワサビドブがあったという。
- 2 **キエモン小屋** 西谷出合いと三又(ミマタ)の大淵の間に、キエモンのワサビ田があり、ワサビ田や山作業のために小屋が建てられていた。
- 3 **悪谷出合い** 出合いから150メートル近く両岸が絶壁の谷が続く。滝有り淵有りの悪場から、この名前が付いた。別名は割谷(ワレタニ)。大地が真っ二つに割れたような地形からそう呼ばれた。
- 4 **大京谷(上滝、下滝)** 地元では、大京谷と呼ばれている。大小無数の滝が続くことから、滝谷とも呼ばれる。下滝は、落差15メートル、上滝は落差50メートルの見事な滝である。
- 5 **三又の大淵** 三又とは、大京谷、西谷(中沢)、悪谷の三つの谷を意味するが、この三つの谷の合流地点に近いことからこの名前が付いた。この大淵は、小川谷で一番大きな淵である。
- 6 **小さい淵が連続する** 魚止めの滝から三又の大淵までの約300メートルにわたって、小さな滝と淵が連なり、美しい景観を見せる。
- 7 **魚止めの滝(ウオドメの滝)** 落差は5メートル、滝壺は比較的小さい。登りあげてきたヤマメはこの淵に留まり絶好の釣り場だったという。
- 8 **シケン小屋淵** この淵の近くに作業小屋があった。ワサビ田で働く人々の休憩小屋にもなり、箆割りの作業やキノボウの作業、コウラ割りの作業など、周辺の木材を利用するための仕事場があった。多少水がでても大丈夫な位置につくられていた。その近くの淵にこの名がついた。
- 9 **鳥居谷出合い** 右岸から鳥居谷が本流と出会うところに淵があった。この谷筋にどこかの神社への鳥居があったのか、あるいは猟師の山鳥の標的をもってこの場所であったのか。
- 10 **犬麦谷出合い淵** 左岸から犬麦谷が流れ込み、伯母谷とも出会う、やや明るい小ぶりな淵がある。犬麦谷には終戦後まで5~6軒の家があった。日当たりのよい暖かい場所で炭焼きやワサビづくり、箸づくり等が営まれていた。犬麦とは、植物の名前。
- 11 **キリ木小屋の大淵** 大きくて深い淵で両岸に岩が迫っていたため、まかなければ通れない淵だった。
- 12 **材木小屋の大淵** 滝上谷出合いから150メートル上流に大きな淵がある。淵から少し離れた場所に作業小屋があった。その小屋を目印にして、この淵の名が生まれた。
- 13 **滝上谷出合い** 左岸から滝上谷が小川谷に流れ込む。この谷を遡るといくつかの滝があり、ヤマメの姿が目につく。日当たりのよい谷なので、味も型もいいという。ヤマメは茂みが深く、暗いところでは型もよくないし、色も黒い。日当たりのよい場所のヤマメは白くて太くてきれいでおいしいという。
- 14 **クラミの沢出合い** 左岸からクラミの沢が流れ下る。今は水はほとんど流れていない。深くて暗い沢で両岸に岩があって、恐い位だったという。
- 15 **スズ坂出合い淵** 右岸からスズ坂谷が流れ下る。スズは熊笹やスズタケのことで、この沢の両岸は一面スズタケに覆われていたという。
- 16 **伏木沢出合い淵** 右岸から伏木沢が流れ下る。伏木沢一帯にはキノボウ、ゲタボウ等、錐の材料や下駄の材料が豊富にあったという。サワグルミ(カルメ)、ハンノキ、ホウなど目方が軽い材質が豊富だったという。
- 17 **クエモンの大淵** 丸く深い淵で、転がり石があったという。明治時代にクエモンがこの淵に落ちたことから名前が生まれた。
- 18 **イチザワ出合い** 左岸からイチザワが流れ込む。沢の奥行きは浅いため、水量は少ないが、上流部は開けており、ワサビづくりが盛んだった。
- 19 **カローの出合い** カロー谷を500~600メートル登り詰めると、見事な大滝がある。落差は60メートル。山崎進さんが奥多摩町の職員を連れて、滝上から巻き尺をたらし、この滝の長さを直接確かめたという。カローの大滝と呼ばれている。カロー谷には昔おにぎりをつつんだ経木の皮がよく産出し、そのための作業小屋があったという。カロー谷、加老谷、加郎谷と表記されているが、正確なところは不明である。
- 20 **オオグロム** 大きな淵で右岸も左岸も通れなかった。林道工事で今はその面影はないが、釣り人も気持ち悪がっていた場所だ。
- 21 **トウタク** 林道が左に大きくカーブする場所に小屋があった。仕事にきた人々が作業所として利用したもので、トウタクとは持ち主の名前だったのかもしれない。
- 22 **男滝(お)** 落差は7~8メートルで深い釜になっている。左岸は鋭い絶壁になっていて、その岩壁を流れが深く削っている。滝が連続して続くとき、上の滝が男滝、下の滝が女滝と呼ばれる。

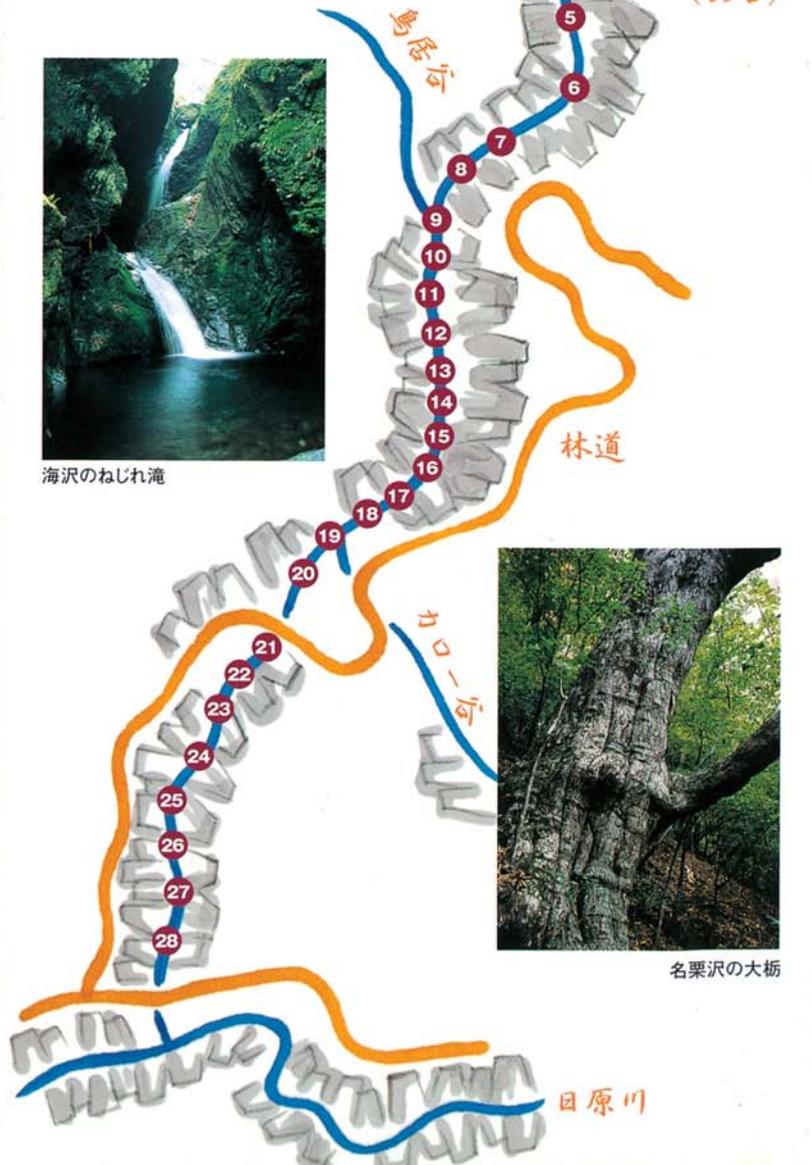
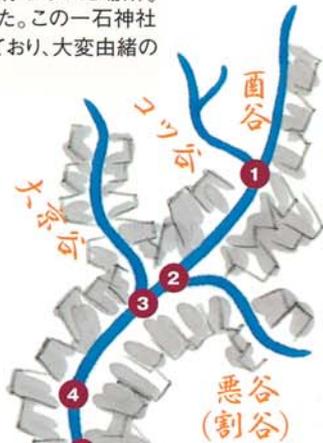
- 23 **女滝(め)** 落差は5メートルくらいで男釜より小さいが、淵は大きくて広い。この男釜、女釜は連続しており、厳しい地形をなしている。
- 24 **広河原** 釣り場やキャンプ場になっている。溪谷のそのままの自然を残した佇まいが見るものの心をほっとさせる。
- 25 **梵天岩** インドの梵天の岩に似ていた。6本の岩が突き出ていたことから6本岩ともいわれていた。最近、岩場の崩壊が続き、景観が崩れつつある。
- 26 **鍾乳洞** 関東でも有数の鍾乳洞がある。山口県の秋芳台のような広々とした空間には及ばないが、垂直に伸びる洞窟は夏なお涼しく迫力満点の鍾乳洞である。
- 27 **銚子滝** お銚子のように流れおちる滝。流れ落ちると滝壺がコップみたいに受けしてくれる。落差は7メートルから8メートルある。
- 28 **ショウジン場淵** 一石神社のお参りに身を清めていた場所。手を洗い、顔を洗い、体を洗って、身と心を清めていた。この一石神社は日原の守護神で日原の住民の多くが氏子となっており、大変由緒のある神社である。



雲取山頂から見た富士山



海沢のねじれ滝



名栗沢の大坂

日原川

# 川苔谷・倉沢谷

- 1 地藏滝** 倉沢を上り詰めていくとウオドメの滝の上流で長尾谷と塩地谷に分かれるが、地藏滝は、塩地谷にある。倉沢で一番大きい落差の滝。
- 2 魚止めの滝** 右前方から2段になって流れ下る滝で、滝壺は右岸の岩を深くえぐり、不気味なほどの深さを感じさせる。三日月状になった淵である。
- 3 源五郎滝** 源五郎がこの滝に落ち命をなくしたことからこの名が付いた。大きな一本の流れが青々とした滝壺に流れ落ちる。倉沢では一番大きな淵。
- 4 山王大淵** 六本淵より一回り大きな淵。左岸の絶壁を流れが深く大きく削り、大きな空間が生まれている。山の神の棲むところなのだろう。山王は猿を意味したり熊を意味したり所によって色々だが、信仰の対象になったのであろう。
- 5 ハコ淵** 両岸が切り立って遠くから見ると箱型に落ち込んでいる形からこの名前が付いたと思われる。
- 6 六本淵** 淵頭に大きな石があり、勢いよく流れ落ちた淵は、青々と深い。この滝の下流の右岸は、岩壁が続き、階段状の棚を幾つも形成している。大きな淵が4つも5つも連続していることから、この名が生まれたのかもしれない。

- 7 アマヶ淵** アマは通常女の修行僧のことを示すが、この場がアマの修行に使われたかどうか、はっきりしたことは言えない。
- 8 安穩淵** 近くの安穩坊に修行僧が住んでいたといわれている。はっきりしたことは言えないが、安穩坊との関わりからこの名が出たと思われる。淵は広々と静かな穏やかな表情をしている。
- 9 シチヶ淵** 数百年前のこと、シチという名の男がヤマメとりに来てこの淵にはまり命をなくした。それ以来シチヶ淵と呼ばれている。
- 10 不動滝** 本流と倉沢出会いとの近くに不動滝がある。昔はまく道もなく、倉沢に登り始めてすぐ二段の滝が現れたので、手を合わせてお祈りをしたのであろう。



秋の奥多摩湖



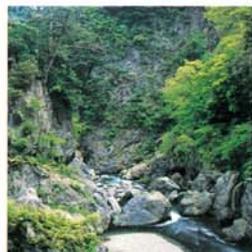
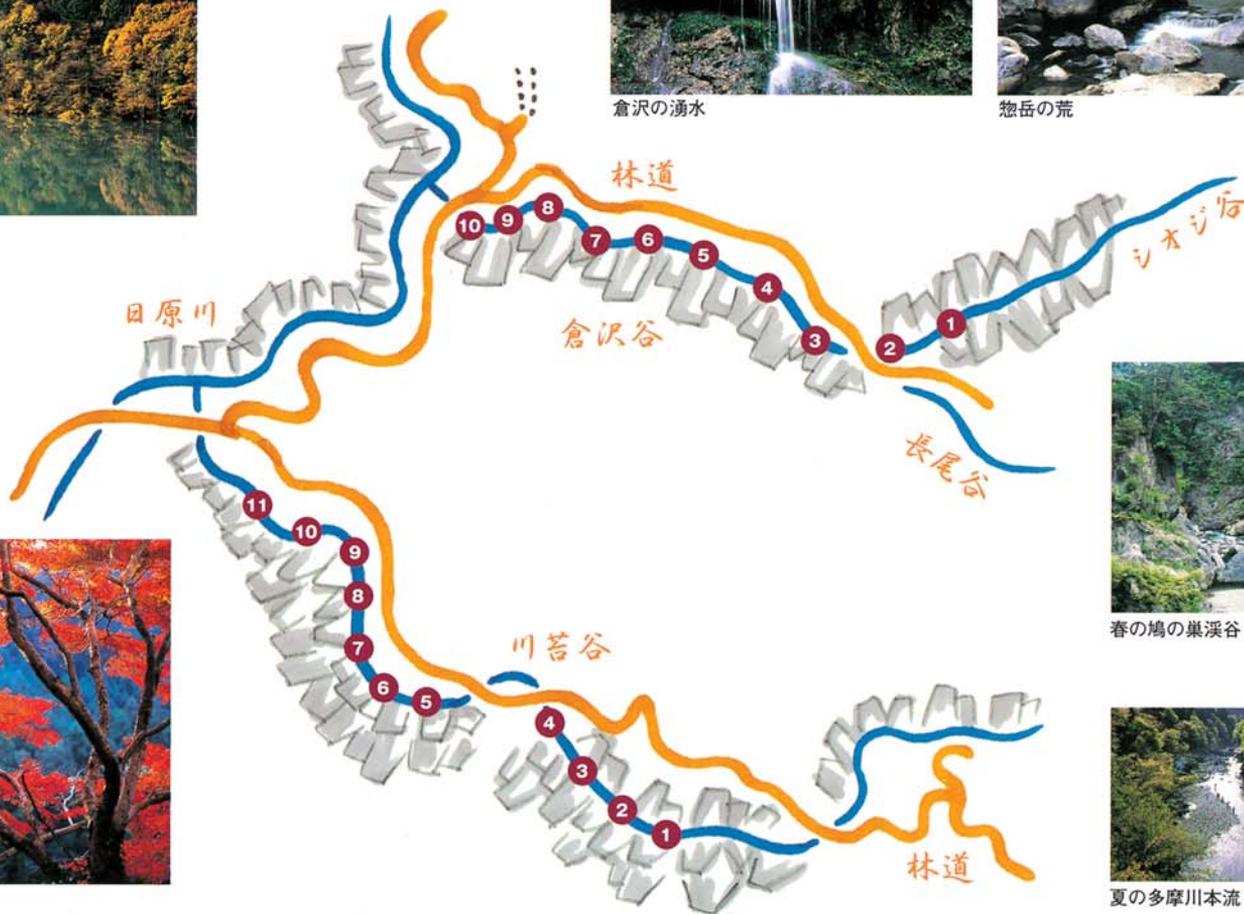
倉沢の湧水



惣岳の荒



むかしみちの紅葉



春の鳩の巣渓谷



夏の多摩川本流

- 1 百尋の滝** 日本の滝百選に選ばれている見事な滝。深い森に轟音を轟かせ、布状になって一気に流れ下る。何度でも訪れたくなる滝である。
- 2 下百尋の滝** 百尋の滝の下にある滝。ナガト口になっていて、深みにはまったく出てこれないと言う。滝の上流の右岸が大きく崩落している。
- 3 丸淵** 真っ暗で底が見えない深い淵。昔この淵沿いを通る山道に山賊がいて、この淵の近くにきた人々を突き落として金品を巻き上げたという言い伝えがある。
- 4 百畳淵** 細長くて深い淵で、かなりの広さがあることからこの名前が付いた。
- 5 三筋ヶ滝** 滝の流れが三本の筋になっていることからこの名が生まれた。3段の滝になっている。
- 6 北の沢魚止めの淵** 右岸から北の沢が流れ込んでいるが、その出会いの近くにある青々とした深い淵。4メートルの丸太を滝壺に立てても底まで届かなかったという。底なし淵として恐れられているが、滝壺は川苔で一番美しい。
- 7 犬つるし滝** 犬つるし岩の近くにある。犬も通れない岩盤の険しい場所であったことからこの名が生まれたという。この犬つるし滝の滝壺には、丸太のように大きなヤマメがいて、まともに糸を垂らすと、糸を人間ごと滝壺に飲み込んだという言い伝えが残っている。

- 8 聖滝** 聖なる滝とはよく名付けたものだ。白衣をまとったこの滝は汚れを知らない滝である。石灰岩を毎年毎年刻み続け、内部をドームのような形に作り上げた。清流と純白のドレスの組み合わせが絶妙の神秘的な滝である。この聖滝では昔、白装束の信者が滝に打たれて修行したという言い伝えが残っている。滝壺の周りの壁には、奇岩、奇穴があちこちにある。この滝は、この不思議な造形を幾年かけて築きあげたのだろうか。
- 9 丸淵** 本当に丸い淵である。青々と澄みきった水が淵一杯に溢れている。木の葉の散った冬場には林道からも良く見通すことができる。淵頭にも淵尻にもナメ滝があるが、淵頭にはナメ滝との間に数メートルの回廊がある。
- 10 カシの木淵** 上流の丸淵からの流れがこの淵で直角に曲がっている比較的大きな淵。正面に硬い岩盤が立ちはだかっており、その岩盤には洪水によって繰り返し浸食された痕跡がはっきりと刻まれている。小さなナメ滝が注ぎ込む楕円形をした美しい淵である。近くに大きな榎の木があったと思われる。
- 11 箱淵** 細長くて箱のような形をした淵。比較的浅い淵だが両岸には岩が迫っている。特に右岸は切り立った岸壁となっている。淵頭は岩場が続き、河床から段差の小さい水道が幾段も重なっている。

## 多摩川源流・日原川 上流

**1 六間ノ滝** 日向谷出会いから数百メートル上流に、まぼろしの六間の滝がある。六間の滝とは六ヶ所の滝が連続する姿から生まれた名前という。

**2 日向谷出会い** 雲取の大滝から100mくらい上流に日向谷が流れ込んでくる。

**3 雲取の大滝** 雲取谷にある姿の美しい滝。落差はそんなに大きくないが、清流が布状になって流れ下る。広葉樹の森に滝音を響かせて、小鳥や鹿などを呼び寄せているかのように、心地良い風を巻き上げている。

**4 トチのクボ** 日原川最上流部の大雲取谷は、ブナやミズナラ、モミヤツガなど落葉広葉樹と針葉樹の森が広がっている。沢筋には、サワグルミやシオジ、カツラなどが多い。この場所には大きなトチの木がくぼ地にいっぱいある。

**5 モミソクボ** この周辺には大きなモミの木が林立するクボ地がある。地元ではモミの木を「モミソ」と呼ぶ。

**6 キリドウシ** 山道を作る際、立ちはだかる尾根の高見を垂直に近い角度で切り取った箇所をキリドウシという。

**7 ゴンエイ出会い淵** 淵自身はさほど大きくないが、近くにゴンエイワツバ(千人尾根)があり、明治初期にここで軍隊が訓練をしたという。ワツバとは渡り場のこと。

**8 ゼンベイ滝** ゼンベイさんが落ちて亡くなったことからこの名が付いた。手前の右岸が大きく崩壊している。

**9 長沢出会い淵** 左岸から長沢が流れ込んできている。長沢は谷全体に太陽がさし込み、明るい谷になっている。明るい谷のヤマメは丸々としていて、いい値で売れた。

**10 昔鉄砲出し跡** 一番上流にあった鉄砲出しの跡。切り倒した材木を谷からひいて一定量貯まると川をせき止めて堰を作り水と一緒に材木を流した。

**11 コウオドメ滝** 魚はこの滝より上流には棲んでいなかった。落差は5~6メートルで、下のウオドメに比べてこぶりなのでこの名が付いた。

**12 カラマツ出会い淵** 雲取山に登る登山道の橋がかかっている。カラマツ谷は大きな谷で、大小無数の滝が連続する。

**13 キンザ小屋淵** 沢にワサビ田のための小屋が建てられたことからこの名が付いた。キンザはたぶん人名であろう。

**14 オオウオドメ滝** 20m位の落差の滝で、この滝を登れる魚はいなかったことからこの名前が付いた。今では白滝と呼ばれている。

**15 カジ小屋淵** 左岸に岡部さんのところのいいワサビドウ(ワサビ畑)があった。そのワサビドウのシりに小屋があったことからこの名が付いたといわれているが、その小屋がなぜカジゴヤと呼ばれたのかは不明。

**16 ゼンダナ淵** 明治時代にゼンキチという釣り人が棚から落ちて亡くなった。周りが滑りやすく淵は深いので、釣り人にも恐れられている。

**17 ナグリ沢出会い淵** 右岸から流れ落ちている名栗沢の出会いに、小さめの淵がある。この沢にも大きいカタのヤマメがいたという。このグリは、石を意味していることからこの沢は石の沢と思われる。

**18 ヒカリ石** 日陰名栗沢出会いの下流にあり、大きな石が夜になると光るといわれてここのように呼ばれている。この周辺は足場が悪いが釣り人達の絶好の釣り場になっていて、この呼び名は多くの人に知られている。

**19 ナカゴヤ沢出会い淵** 左岸からナカゴヤが本流に出会う地点から少し下ったところに淵がある。

**20 岩清水** いくつもの淵を通り抜けると、右岸の大きな岩の割れ目からこんこんと清水がわき出している。その清水の冷たさは年間を通して変わることなく、地中深くから湧きだしたものと思われる。

**21 曲り尾根淵** この周辺は谷が深すぎて通過することは出来ない。日原の流れは突きだした尾根に沿って大きく湾曲し、その大曲りにこの淵はある。上段の淵と下段の淵に分かれていて、上段の淵は淵頭の滝から流れ込んだあぶくで真っ白になっており、それに比べて下段の淵は流れはやや緩やかで青々として不気味な印象を与える。

**22 ミノト谷出会い淵** ミノト谷出会いから少し下ったところに大きな淵がある。淵頭は早瀬になっており、淵の形はやや末広がりになっている。ミノト谷に入って数百メートル進むと、迫力のあるミノト大滝に出会う。この滝をまいて進むと「忌山(いみやま)の悪場」と呼ばれる深い谷がある。

**23 昔梁跡** 昔、ここでヤナをしかけてヤマメやイワナを捕った。川幅が広く流れは緩やかである。

**24 重郎次淵** 釣り人の重郎次がここに落ちてひどい目にあった場所。

**25 昔鉄砲出し跡** 日原川では材木流しの方法として鉄砲出しが三ヶ所で行われていた。鉄砲出しとは、川をせ



レンゲショウマ



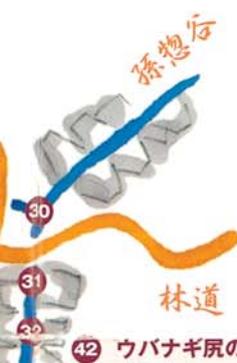
# 多摩川源流・日原川 下流



秋の稲村岩



初夏の日原川上流



**25 昔鉄砲出し跡** 日原川では材木流しの方法として鉄砲出しが三ヶ所で行われていた。鉄砲出しとは、川をせき止めて貯めた大量の水とともに材木を流すやり方である。ここは下流から二番目の場所で、鉄砲出しをした後はヤマメの姿が消えたという。



初秋の日原川上流

**26 キムラ淵** この辺りには昔からたくさんの釣り人が通いつめた。キムラと名乗る釣り人がこの大きな淵に落ちたことからこの名が付いた。明治時代のことである。左岸は垂直に切り立った岩壁で右岸はやや傾斜があるが日の当たらない湿った岩肌をしている。

**27 マラダシ淵** 釣り仲間でマラダシ淵と呼ばれている。マラとは男性のシンボルのことで、深い淵を渡るためにふんどしをまくり上げる際マラが飛び出した光景からこの名が生まれたと思われる。下半身マルダシからきているのだろう。

**28 八丁橋** 日原川はこの八丁橋を境に厳しさを増す。この橋は上流に向かう起点となり、多くの登山者の目印になっている。八丁という名は近くの高い山の名からとられている。

**29 孫惣出合い淵** 孫惣谷は日原一の石灰岩の産出量を誇る。昔この出合いから天祖神社に参る信者の姿が多く見られた。現在この淵は橋のふもとにある。左岸は大きな岩壁となっていて、この岩に水があたり底を深くえぐっている。

**30 ガニザワ出合い淵** 右岸からガニザワが流れ込んでいる。昔この沢に沢ガニがたくさんいたことから付けられたのだろう。

**31 フタマタ川** 流れの中心に中州が出来ており、川が二俣に分かれて流れたためこの名が生まれた。二俣川では瀬干しをして魚を捕った。

**32 オハラ小屋跡** 山の持ち主の小原さんが建てた小屋があり、山の手入れや伐採に利用されていた。

**33 ミツマタ出合い淵** 周辺に紙すきの材料のミツマタが栽培されていたことから、この名前がうまれた。

**34 ミズヒキアナ** 洪水の時だけに現れる現象で、水を引き込み、30mくらいのS字状の流れが出来るところ。

**35 オツボ滝** 滝の落ち込みの形がトックリ(ツボ)に似ていることからこの名が生まれた。

**36 イセバシの大淵** 右岸の山をお伊勢山と呼ぶ。全国各地の御伊勢木事にあるように、この地区で伐採の斧始めに最初に伐った材木を伊勢神宮に納めるその風習により名付けられた山である。また、昔、山から木を切りだすキリコがいて、このキリコがオイセに恋をして山に会いに行った。この恋に燃えるオイセ山からイセの大淵の名前が生まれたという逸話も地元にはある。

**37 茶坊淵** 材木流しの最盛期の頃、お茶の世話をする15、6歳の少年のことを「茶坊主」と呼んだ。その茶坊主がこの淵に落ちたことからこの名が付いている。左岸に大きな石が横たわり、石の廻りに深い淵がある。

**38 大川のカマアタマ** 男釜の上に緩やかな流れが続くが、そこを大川のカマアタマと呼んだ。

**39 男釜** 人を寄せ付けぬ岸壁が続き、男釜の全体をのぞき見ることは出来ないほど深く刻まれた谷に男釜がある。昼なお暗く、ごうごうとうなり声をあげる滝の音は絶えることがない。

**40 霧立ち姫の碑** 男釜と女釜の間にこの碑が建っている

**41 女釜** 女釜・男釜と二段の連続した滝を形成している。女釜は青々とした大淵を備えた滝で、その上段にある男釜に落ち込む滝壺から絶え間なく水しぶきが立ち上がっている。右岸に霧立ち姫の命(ミコト)の石碑がある。



カタクリ



いたるところから流れ出る湧水



42 **ウバナギ尻の大淵** ナギは緩やかな流れを表すが、ウバに関してははっきりしたことは分からない。ナギに人が足を滑らせて落ち、淵尻で引き上げられたという。

43 **モチ小屋淵** 川ながしの仕事場の小屋があり、川ながしの連中のための炊き出しと、弁当を届けるモチコがいて、木材を切り出している現場に届けた。

44 **バケモノ淵** 岩や木に覆われた場所でもいかにもバケモノでもてそうな程、暗くて怖い淵。今は、釣り場になり昔の面影はない。

45 **サクガ淵** 明治時代にサクエモンという人が飛び込んだところ。

46 **小川出合い淵** 小川谷との出合いにある淵。本流と変わらないくらいの水量を持つ小川谷は、奇岩、奇石を多く抱えている。

47 **丸淵** 大きな岩の近くに大きな淵があり、大物のヤマメのあがる場所だった。

48 **鉄砲出し跡** 日原川では、多くの木材が川を利用して下流に運ばれていた。一本流しとか筒流しとか呼ばれていたが、水量が少ないときは、鉄砲出しが行われた。三ヶ所あるうちの一番下流。

49 **イヤゴヤ淵(岩小屋淵)** 地元ではイヤゴヤと呼ばれている。昔、木材を流すための小屋を建てた大きな岩があった。今はガクレク岩と呼ばれ、岩登りの練習に利用されている。日原山荘下にある。

50 **ネッコ滝** 大きな木の根が岩にはさまり、雑木がたまって滝をつくっている。

51 **カナ小屋の大淵** ここで昔鉄を掘った。今でも赤さびた水がたまる。ここに大きな淵があり、よく魚が釣れた。

52 **ミノト橋** 「オタビシヨノ下」…天祖のたて岩さんが秩父の妙見山に旅に出るとき、ここで身支度をしたという。巳ノ戸に通じる橋。

53 **鷹ノ巣出合い淵** 鷹ノ巣(1736m)より流れ下る鷹ノ巣谷との出合いに大きな淵がある。昔鷹ノ巣沢に水車がかり、村人がここでアワやヒエをついたという。

54 **古ミノト橋** 昔、巳ノ戸の集落(3~4軒)に通じる橋がかかっていた、そのすぐ近くに大きな淵があった。洪水の度に埋まり、今は昔の面影はない。左岸からさほど離れていないところに大きな石があり、ここに橋が架けられていたという。

55 **キンザ淵** 昔、キンザという名の男がこの淵に流され怪我をしたことから、キンザ淵と呼ばれている。左岸に大きな岩があり、淵頭は滝のように激しく流れ込んでいる。ネズミ沢出合いにある。

56 **六段の滝(無名滝)** 右岸から流れ込んでいる。一段目は、落差が大きくて幅広の布滝、二段目は2本滝、三段目は、幅の狭い布滝、四段目は、緩やかなV字谷、五段目は堀割になっていて姿は見えない、六段目は銚子滝。水量は少ないが、見栄えの良い滝である。

57 **バクチ岩** 50mくらい登ったところに、昔バクチ小屋があり、人の出入りが多かったことからこの名が付いた。今はトシハシ場とも呼ぶ。この淵は幅が広くてゆっくりと流れる。淵頭は、早瀬で瀬音は強い。正面に稲村岩がそびえている。



大雲取谷の大滝

58 **弁天** 左岸に15mを超える大きな弁天岩があることから、この一帯を弁天と呼んだ。その岩の下に淵があるが、右岸の岩壁に激しく削られた凹凸が残されている。

59 **イモアライ滝** お花ドウのすぐ上流にある。落差は3、4メートルの滝だが、3本、4本の流れが一箇所に集まりモクモクと盛り上がっている。お互いにもみ合う姿からこの名が生まれたのであろう。イモアライ滝の左の肩に幅の広い水道がある。増水時には、この道も水に埋まるのであろう。

60 **お花ドウ** お花という人がここに飛び込んで亡くなったということからこう呼ばれている。左岸は高く大きい岩があり、右岸は大きな石がゴロゴロしている。左の岩盤をなめながら激しい音を立て、左右にうねりながら流れる。ゴロ口同様素晴らしい眺めである。

61 **平の沢出合い滝** 左岸から滝が流れ込んでいる。この沢の筋に平らなところがあり、畑が作られていたことから平の沢と呼ばれた。

62 **馬マワシナギ** 右岸にぶつかった流れは跳ね返され、ゆったりと廻っている。昔この辺りで死んだ馬が捨てられたという。街道筋に馬頭観音が祀られており、その近くにあるナギ。ナギとは、緩やかな流れのこと。

63 **アミハリドウ** 川岸の深く削られた岩の洞にアミを仕掛け、魚を追い込んでとったところ。蛇行する流れは、彼方此方(あちこち)にエゴの淵をつくる。エゴができるためには、河道の勾配のきつい、流速の大きな谷でないと駄目である。エゴはアミハリの絶好のポイントだった。

64 **昔大橋** 旧道の吊り橋が、昔大橋と呼ばれている。吊り橋の上流も下流も幅の広い河原だが、たまたま両岸から岩が迫り出して川幅が狭いところに吊り橋が架かっている。昔の人は、うまいところに道をつくり橋を架けたものだ。

65 **ナガシガワラ** 台所の流しのように、川の水がなめらかにゆったりと流れる河原をナガシガワラをいう。長い河原の中間点に、左岸から見事な3段の滝が流れ下る。その沢にかかる橋は登竜橋。まさに竜が勢いよく登っている姿をしている。

66 **イザエモン淵(イゼーモン淵)** 昔、イザエモンと名乗る人が落ちて流され命を落としたことからこの名前が生まれた。巨石を縫うようにして流れ下る迫力のある眺めである。一段と大きくて深い淵がイザエモン淵だ。上流からの激しい流れが水中に潜り、淵一杯にアワを吹いている。ここに落ちたら水に回されて浮かばれないと思ってしまう。

67 **ゴロ口** 大きな岩が両岸にころがっている。ゴロゴロと転がっていることからこの名が生まれた。中央部に落差は小さいが見応えのある3本滝がある。下流の細長い淵は青々と深い。単なるゴロ口だけでもったいない場所である。

68 **タル沢出合い** タル沢は、右岸から滝となって合流する。一番目の滝は銚子滝、二段目の滝は布状である。タル沢は両岸の供水のツメ跡を克明に残して流れ下る。かなり大きな土石流でも発生したのだろう。

69 **メメズギャーラ** ミズがメメズに訛ったものでミズがのたくったような平坦な河原である。ギャーラは「河原」の訛ったもの。右岸にメメズ(フサザクラ)が群生していたことからこの名が生まれたともいう。

70 **ウリの木淵** 大きなウリハダカエデがあったことからこの名前が付いた。右岸に大きな岩が迫り出している。幾たびかの洪水の直撃を受けたため、下流に向かって階段状にデコボコが刻まれている。淵頭から淵尻まで30メートルの長さがある。

71 **風穴の大淵** 石灰岩が風雨に浸食されて絶壁に大きな穴が空いている。そこからは絶えず風が吹き出しているという。この風穴の近くに大きな淵がある。淵頭の流れは、激しくうねり流れ下り、二段に分かれた淵に落ちていく。下流の淵は深い。

72 **セベヤ出合い** 本流が左右に蛇行した地点に右岸からセベヤ沢が流れ下る。地元からの聞き取りでは意味不明であったが、沢の地形からすると尾根と尾根の間隔が「狭い」が訛ったものと推測される。この出合いではヤマメがよく釣れたという。

73 **戸望岩** 地元では、木戸のことをトンボグチと呼ぶ。日原の入口を意味する戸望岩は、自然の美しさや厳しさの両方を備えている。日原川の流れが石灰岩を削り取り両岸に絶壁を形成している。

74 **神庭沢出合い** には沢と呼ばれている。神の庭とは良い名前をこの沢に与えたものだが、名前の由来は不明である。水量の少ない急勾配の沢であるが、蟹か何か関係があるのかどうか分からない。

75 **地藏淵** 昔、この淵の近くにお寺があって、地藏様が祭られていたという。青々とした深い淵だったという。

76 **アンダイラ** 平らになっている場所であるが、地名の由来ははっきりしない。

77 **マストリ淵** 昔、魚が沢山いたので、柵でも捕れたのであろうか。

78 **カゴ岩** 籠岩のことで、背負う籠に似て岸壁が垂直な姿からこう呼ばれている。

79 **オタツが滝** おタツがこの滝に飛び込んで命をなくしたことからこの名がついたという。

80 **おみっちゃん河原** 近くのおみっちゃんが川に流されたのだろう

81 **オヨウ淵** オヨウさんが、袂に石をおいて飛びこんだと言われている淵。

82 **瀬波** 早く流れる川の様子を早瀬と言うが、この瀬波は、流れる水同士がぶつかり合い、大小の波を立てながら下る様子を見事に捉えている表現である。早瀬、百瀬、鳴瀬と昔の人々は素敵な名前を付けたものである。

# 多摩川源流の四季

## 源流・ミニミニ辞典

### 東京都水源林

東京都は明治34年(1901年)水源涵養林の経営に着手し、明治44年(1911年)10月20日現塩山市萩原山を山梨県から買収する。現在の水源林の面積は21635ヘクタール。塩山市-5628ヘクタール、丹波山村-6596ヘクタール、小菅村-1620ヘクタール、奥多摩町-7791ヘクタール。清浄な水道水を確保し、洪水や土石流から住民の命を守るために、今から百年も前に、広大な山林を買収して水道水源林を経営した当時の為政者の先見性と決断力には感服する。この水源林は日本で最も優れたものの一つである。



新緑の惣岳溪谷上流

### 日原鍾乳洞

この鍾乳洞に入ると涼しい風が全身をつつみこむ。洞内は年中温度11℃の別世界であり、高低差の激しいコースは良く整備されていて楽しい。ここは江戸時代から山岳信仰の対象地として参拝者も多く、遠く中国から日本に入ってきた宋銭や明銭や国内銭などが洞内から大量に発見されている。関東随一の規模を誇る見応え十分の鍾乳洞である。見学料大人600円、中学生400円、小学生300円である。



夏の日原川上流

### 巨樹の町 奥多摩町

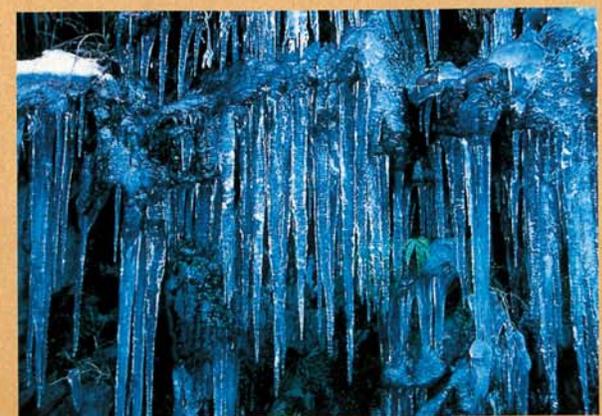
日原の奥には巨樹や巨木が林立する豊かな森が残されている。「巨樹は環境のセンサー」といわれ今後ますます注目されるだろう。倉沢の千年のヒノキ、金袋山のミズナラ、ガニ沢のカツラ、名栗沢の大トチなど、巨樹、巨木が891本も確認されている。日原には「森林館」や巨樹ギャラリーがあり、誰でも巨樹博士になれる。



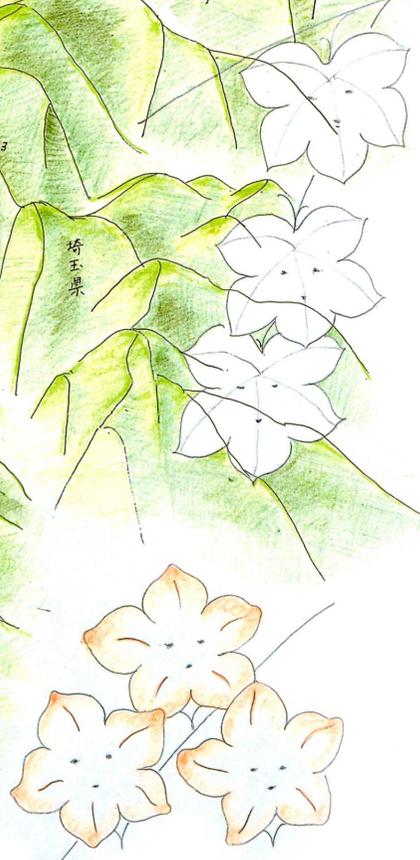
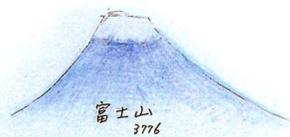
おかしみちの秋

### 都民の水ガメ奥多摩湖

多摩川上流に位置する奥多摩湖は総貯水量1億8,000万トンの大きさを誇り、都民が毎日利用する水の約2割を供給している重要な水ガメである。川の流れをせき止めている小河内ダムは、昭和32年に建設されたが、奥多摩町や丹波山村の多数の民家が水没したため移転を余儀なくされた。源流域の人々の協力と犠牲のうえに小河内ダムや奥多摩湖が生まれたことを忘れてはならない。



冬の倉沢谷



「<sup>た</sup>多<sup>ま</sup>川<sup>が</sup>源<sup>わ</sup>流<sup>げ</sup>部<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>沢<sup>ゆう</sup>・<sup>ぶ</sup>尾<sup>ぶ</sup>根<sup>ろ</sup>・<sup>さ</sup>淵<sup>わ</sup>・<sup>さ</sup>滝<sup>さ</sup>・<sup>わ</sup>小<sup>た</sup>字<sup>き</sup>等<sup>ゆう</sup>の<sup>ち</sup>地名<sup>めい</sup>と

由来<sup>ゆ</sup>に関する<sup>らい</sup>調査<sup>かん</sup>研究<sup>ち</sup>」—奥<sup>ち</sup>多<sup>ょう</sup>摩<sup>さ</sup>編<sup>けん</sup>—

(研究助成・一般研究 VOL. 27-NO. 156)

著者<sup>な</sup> 中<sup>か</sup>村<sup>む</sup> 文<sup>ふ</sup>明<sup>ん</sup>

発行日 2006年3月31日

発行者 財団法人 とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141